
魔王襲来！！

鹿谷力モ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王襲来！！

【NNコード】

N4542Q

【作者名】

鹿谷力モ

【あらすじ】

「オヌシ、儂のモノになれ！！」

突如異世界に召喚された少年、あかつき そうた。暁宗太。

右も左も分からぬ彼が訪れた街で、偶然出会った少女は世界最強（最凶）の魔王様！？

人知れず世界の命運を賭けた名も無き勇者の物語が今、始まる。

プロローグ（前書き）

初めての小説です。

自分のえしい語彙力ではてさてどうまでも書けるやう。
ノープランの物語が今、始まる（笑）

プロローグ

フォートリア暦一一六一年。

フォートリア大陸を永き間脅かし続けた魔族と人間との争乱は、それまで中立を保っていたエルフを始めとした亜種族の参戦や、異世界より召喚された勇者の活躍により終わりを告げた。

魔王は勇者に討たれ、世界は平和な世を迎えた。

ハズだつた。

終戦から五年後　　フォートリア暦一一六七年、魔族は先代魔王の子を新たな魔王とし、世界は再び戦乱の世を迎えた。

勇者は再び魔王を倒すために魔王国に乗り込むが、歴代最強と謳われる魔王の前に成す術も無く倒れてしまった。

「

ルネスクが墜ちた、だと？」

王城の一室、作戦会議室に置かれた大きな長テーブル、その上座に座る男性 エルトリア王国国王、ヨーリス・オルト・イヴァリア・エルトリアが重々しい口調で報告に来た兵士に確認した。

金の髪に碧い瞳、精悍な顔付きに衣服の上からでも鍛え抜かれた事が分かる体躯は、もうすぐ50に届くとは思えない程若々しく見える。

「ハッ！魔族による大規模攻勢により奮戦虚しく……」

その報告に室内は重苦しい雰囲気に包まれた。

「これで先の大戦で我が国の領土となつた旧魔国領は全て奪い返されてしましましたな……」

エルトリア王国宰相ガルデニス公爵が疲れた表情で呟く。
先代魔王を討つた大戦で魔王国から得た領土、その5つ全てがたつたの三年で奪い返されてしまつたのだ。
五年も掛けて統治の基盤作りを行つたものが全て水の泡となつてしまつた。

と、沈黙の続く作戦会議室に慌てた様子の兵士が飛び込んで来た。

「何事だ！」

ノックも無しに飛び込んで来た兵士にエルトリア王国軍大将グラスト侯爵が怒鳴りつける。

しかし、次に兵士の発した言葉に室内は凍り付いた。

「も、申し訳ありません！御報告致します、魔族軍凡そ500の部隊による奇襲攻撃によりアーネスト駐屯軍8000壊滅…城塞都市アーネスト陥落致しました！！」

「バカな！アーネストはかつての魔族軍の大攻勢にも耐え抜いたのだぞ！！それが魔族とはいえたつたの500に壊滅だと……？確かな情報なのか！？」

グラスト侯爵が立ち上がり、怒りも露わに兵士を怒鳴る。兵士は怒気に身を疎ませながらも何とか続きを報告する。

「……ハツ！アーネストの通信技官よりの魔術通信による報告です！ほ、報告によりますと……今回の進軍は魔王自ら兵を率いていたそうです……」

その報告に再び室内に沈黙が訪れる。しばらく続いた沈黙を破ったのはコーリスだった。

「軍属に限らず宫廷内の全ての魔術師を召喚の間に集めよ」

「陛下！？」

コーリスの命に室内をざわめきが支配する。

その中で宫廷魔術師団長を務めるレイファスが異議を唱える。

「危険です、陛下！召喚の魔法陣に流せる魔力は先代勇者様召喚時が限界。いくら流す魔力量で召喚される勇者様の力量も変わるといつも限度を超えるれば失敗、最悪爆発の危険も……！」

「解つておる……！」

それを一喝するコーリス。

その顔は苦渋に歪んでいた。

「圧倒的な力を持っていたあの勇者が容易く敗れたのだ…、出来なければこの国、いや、この世界が終わるのだ…」

その言葉に返せる者は誰もいなかつた。

エルトリア王城、その地下に召喚の間はある。

松明で照らされた広間の中には紺色のロープを着込んだ宫廷魔術師団の精銳が50人程。

どれも熟練の魔術師ばかりだ。

召喚の間に入りきれなかつた者達は魔晶石に魔力を封じ、魔術師団が保存していた魔晶石と共に儀式に使用されることとなつた。

その総魔力量は先代勇者召喚の儀の実に三倍。

儀式に失敗し、魔力の暴発が起きれば王城も吹き飛ぶやもしれない。

「儀式を始めたいと思います。」

準備が整つた事を確認したレイファースが宣言する。

「 つむ。」

ヨーリスが見守る中、広間の中心にある魔法陣の外周にレイファス
他4人が、その後ろに残りの魔術師達が並び円陣を組む。

レイファスが呪文を唱え始める。
すると魔術師及び魔晶石から魔法陣へと魔力が流れ、魔法陣が輝き
出す。

儀式が進むにつれ輝きを増す魔法陣。

魔力は魔法陣を中心に渦を巻き、魔力の嵐が広間を襲う。
間近で魔力の激流にあてられた魔術師達は顔色が蒼白になり、額には脂汗を浮かべている。

離れた場所で王を護つている結界魔術が軋みを上げる。

儀式は進み、遂には耐えきれず意識を手放す者が現れ始めた。

(ぐう…やはり無理だったか…?)

レイファスは倒れていく魔術師達を横目に頭の隅で考えるも、しかし儀式を中断する訳にはいかない。

魔術師が半分程倒れた頃、漸く儀式は終わりを迎える。

最後の呪文と共に目を開ける事も出来ない程の眩い光が広間を埋め尽くし、溢れていた膨大な魔力が魔法陣に収束していく。

(成功だ…!)

レイファスは儀式の成功を確信した。

やがて光は收まり、視力が正常に戻っていく。

果たして、魔法陣の中心には

誰も居なかつた。

プロローグ（後書き）

ふう…、時間の割に文章量少なつ！

ノープラン、勢いで書いたのでこれからどうなるかも分かりませんが、どうぞ宜しくお願ひします。

第1話 異変は突如

「くわあ～…」

午後の授業、窓際一番後ろといつ特等席で少年、あかつきそうた暁宗太は睡魔という強敵と熾烈な戦いを演じていた。

季節は四月、春の日差しと食後の満腹感、昨夜の夜更かしに極めつけは坊主の読経も斯くやという教師の声が聞こえてくる。正に四面楚歌、怒涛の攻勢に自制心という防壁は陥落寸前である。

「じゃあ、…から…まで。暁、読んでくれ。」

勢いに押され船を漕ぎ始めた頃、現国教師田中先生（仮）に指されたが、如何せん今まで必死の攻防戦を繰り広げていたのだ、肝心な部分が頭に入つて来なかつた。

「67ページ5行目から68ページ2行目までだ。」

指された内容が分からずにいると、隣の席から中学以来の悪友、岡崎浩平が小声で教えてくれた。

なので俺は「ありがと」感謝の意を述べ席を立つと

「すみません、田中先生（仮）。睡魔との抗争が激しくて聞いてませんでした。」

正直に述べる。人間正直が一番である。

途端に教室内は笑いに包まれるが岡崎は悔しそうな顔をしていた。

「俺は橋本だ！まだ名前覚えとらんのか…まあいい、じゃあ同じ所岡崎読んでみる。」

田中先生改め橋本先生は呆れながらも岡崎に振る。

岡崎はといえばついわざとまで爆睡していたのだ、分からう筈もない。南無。

案の定わたわたとしたと思つたら、

「すみません、キレーなお姉様方とキャッキャウフフして聞いてませんでした。」

教室内が一瞬で真冬になつた。

睡魔も裸足で逃げ出してしまつた。恐るべし岡崎。

一体どの様な夢を見ていたのか非常に気になる所ではあるのだが。

「 もうか、それはさぞかし楽しかつただうつな。そのまま立つてろ。」

田中先生もとい橋本先生は非常に良い笑顔で仰つた。
ハツ、やまあ。

そんなこんなで後5分で退屈な授業も終わりといつ頃、それは起つた。

(… ? 何だ?)

何かがおかしい。

周りを見渡してみると別段いつもと変わらないように見える。

しかし、何故か言いよつのない不安、奇妙な感覚が押し寄せた。

まるで自分の周りの空間だけ変質しているよくな。

氣のせいだと自分に言い聞かせ、残りの授業に集中しようとした時
…。

突如視界がねじ曲がった。

「あ、曉！？」

異変に気付いた橋本先生が叫ぶと、振り返った面々も騒ぎ出し教室
内はパニックに陥った。

宗太の周りだけ空間が歪んでいるのだ。

「宗太ッ！」

隣の席の岡崎が歪んだ空間から宗太を引きずり出そうと手を伸ばす。

宗太も必死に手を伸ばすが、本来一メートルもない筈の距離が届かない。

そういうしている内に歪みはどんどん大きくなつていき、最早歪みの内と外がそれぞれ判らなくなつた頃。

宗太の足元が円形に光り、やがて消えた。

歪みと、宗太と共に。

第1話 異変は突如（後書き）

短い…。やべえ短い。

投稿後確認してみて愕然としました。

てかプロローグに纏めちゃつても良かつた気が…。

もっと精進致します。

第2話 田覚めと遭遇、初戦闘で逃避行

「しらない天井だ…。」

田を覚ますと、そこにあるのは蒼と白、そしてそれらを侵食するかのように包み込む緑。

要するに森の中だった。

「言つてみたかっただけですよーっと…。」

誰に言つづもなく一人呟くと身体を起こし立ち上がる。

木々に遮られ日が余り当たらぬためか、地面は水分を多く含んで
いるようだ。

どれだけ寝ていたのか、制服に水分が染み込み背中が冷たい。

正直気持ち悪いのだが、日が遮られているため乾かす事も出来ない
だろう。我慢する事にする。

「しつかし……、ゼーヨー……。」

辺りを見回してみると、そこにあるのは木、木、木。

正直言つて人が足を踏み入れているのかも怪しい。

「何でこんな所で寝てたんだ……？」

急な展開で記憶が少々曖昧になつていてるよつだ。

一度大きく深呼吸。

落ち着いた所で、記憶を辿つてみる。

「確か……、朝起きて、遅刻ギリギリで急いで学校に行つて……。」

授業を真面目にとは言えないが受けていた筈だ……。

「んで、昼飯食つたら眠くなつて、睡魔と闘つてる内に岡崎がバカ
やつて田中先生（仮）に立たされて……。」

だんだんと記憶が（一部を除き）はつきりとしてきた。」

「変な感覚がしたと思つたら周りが歪み出して……？」

オーケー オーケー、眠る前の事思い出しましたよ。思い出しましたとも。

「……ビルよへ。」

いくら眠る前の事を思い出したとしても、起きた後の事との繋がりが解らないなら意味が無いのである。

「……そうだー携帯で……。」

誰かに連絡するなりして状況の打開を図るひと試みるも、ディスプレイには無情にも『圈外』の「一文字」。

「はあ……。だんだけ山奥に……てか、何故に山奥に……。いや、森か。」

ボヤいてみるも答えてくれる人は存在せず。

無駄に虚しさが込み上げてくるのみである。

「とりあえず、人が居そつた場所を探すしか無いのかな？」

深い森の中、サバイバル道具どころか水も食料も無いのだ。

助けが来るかも分からぬ中、何時までもこの様な場所でじっとしているのも不安になる。

「…といつか、熊とか出てきたら恐い。てか、出てきそうで恐い。」

本音などそんなものである。誰だつて野生の獣は恐いのだ。

「さつてと、どつちに進めば良いんだ？ 最低でも川ぐらじ見つけたい…。」

周りは木ばかり。太陽の位置でかるうじて方角は判るのだが、現在地が欠片も判らない状況では大して意味がなかつたりする。

「仕方ない、こいつ時はアレに限るか。」

やつぱりと、地面に落ちていた一本の木の枝を拾い上げ地面に立てる。

手を離すと、枝は南東を指し示すように倒れた。

「よし、じつちか。」

どうやら未だ混乱は治まつていなかつたようである。

しかし、落ち着かせてくれる者などいる筈もなく。

宗太は深い森の中を歩き出した。

どれだけ歩いたどうが、昇りかけた田は頂上に達してくる。

時計を確認する。一時十五分。

まだまだ余裕はあるとはい、日が暮れる前には森を抜けたい。

何故か肉体的な疲労は感じないのだが。

「腹…、減つた…。」

とは言え、精神的な疲労や空腹感だけは如何ともしがたい。

片田舎に住んでいたとはい、森に踏み込んだ経験などない宗太には食べられる木の実などの知識はない。

下手に食べて体調を崩すのも嫌なので、木の実や茸を見付けても手を出せずにいた。

そんな時である。

ガサガサ

何かが落ち葉を踏みしめ歩いてくるような音が宗太の意識の隅に聞いた。

(……？ 何だ…？)

音は後ろ、宗太が歩いてきた方角から聞こえてくる。

何とも嫌な予感がする。

はつきり言つて振り返りたくない。

だが、予感は所詮予感。森に入つていた人が発見してくれたのだとしたら出口まで案内もして貰えるかもしねり。

ガサガサガサツ

そんな風に悩んでいると音は大分近くまで来ていた。

意を決して振り返る。

「ブルルルルルツ」

そこには巨大なイノシシが居た。

体長は一メートルを越えるだろ？ 下顎からは一本の大きな牙が突き出ている。

それだけ見れば只の巨大なイノシシなのだが それでも十分脅威ではあるのだが 額からは何故か一本の角が突き出し、背中にも棘の様に小さいながらも幾つか付いている。

そんな異様なイノシシ様は鼻息荒く呆然としている宗太を睨み付けている。

（ななな、何アレ！？^{ヌシさま}主！？この森の主様ですか！？）

角の生えたイノシシなど見たことも無い宗太は混乱が頂点に達している。

不意に、イノシシが宗太を睨み付けたまま口を開けると、大きく息を吸い込みだした。

(何をしてるんだ…?)

宗太は意味も判らず見つめ続ける。

すると、イノシシの口内が淡い緑色に輝き出し、空氣の砲弾を吐き出した。

「いいつ…！？」

宗太は訳も分からず横に飛ぶと、地面を転がつて回避する。

すると、背後から爆発音と共に風が吹いてくる。

恐る恐る背後を振り返つてみると、その場の木々は薙ぎ倒され、地面が抉れた光景が目に入った。

直撃したと思われる木は半ばから砕けている。

(じょ、[冗談じゃねえぞ…！？])

あんなモノが直撃すれば人の身体など容易くボロ雑巾のようになつ

てしまつ。

背中を冷たい汗が流れる。

「ブルルルルルッ！」

獲物を仕留め損なったイノシシは怒りも露わに一鳴きすると、再度口を開け息を吸い込む。

（ ヤバいっ！ ）

そう思つた時には身体は勝手に動き、後ろを向いて走り出す。

ドゴオオオン！！

背後、自分が先ほどまで居た場所から爆発音が聞こえる。

次いで吹き荒れる風に煽られながらも木々の間を縫つて全力で逃げる。

続け様に一発、三発。

全てが宗太の背後に着弾する。

（あれ？俺つてこんなに速く走れたっけ？）

宗太は自分が何時もより速く走れることに疑問を抱きつつも、逃げることに精一杯で深く考へることは出来ない。

イノシシは圧縮弾では仕留められないと悟ったか、宗太を追いかけ走り出す。

突進の威力のまま角で突き刺せば、大抵の獲物は仕留められると理解している。

意外にも獲物の足が速いのは予想外だが、それも時間の問題だろう。

そうした追いかけっこを続けること凡そ一時間、じりじりと距離を詰められる中、宗太は横に長く木々が途切れている場所を見つけた。

（…街道、か？）

舗装されてはいないが、狭い訳ではない道がそこにあった。

しかし、その一瞬氣を緩めてしまつたのが拙かつた。

宗太の走る速度が遅くなつたのを好機と見たか、イノシシが更に速度を上げて突つ込んできた。

「…………」

背後からの気配を察した宗太は辛うじて横に飛ぶこと、イノシシの一撃を回避する。

避けられたイノシシは前方で停止、振り返る。

宗太は街道を田の前にして回り込まれた形になつた。

「うわつと…………」

振り返つたイノシシは宗太を仕留めようと突進してくるも宗太は横に飛んで避ける。

イノシシは進路上にあつた木を薙ぎ倒し停止する。

「……怒りてらりしゃる？」

長い追いかけっこでジレたのか、イノシシはかなり鼻息が荒くなつていた。

口を開け再度圧縮弾を放つが、何度も見たソレ。

宗太は風圧でバランスを崩しながらも回避に成功する。

と、突如イノシシが突進してきた。

今まで単調な攻撃しかしてこなかつたのが、ここにきて連續攻撃を仕掛けてきた。

（ やられる………）

迫り来る巨体。

バランスを崩した状態で回避出来る筈もなく、目を瞑り衝撃を覚悟したと同時に無意識に拳を前に突き出した。

（ ……？）

メキッというイヤな音の後に何かが倒れるような音。

腕に若干の衝撃を感じたものの、覚悟していた程のモノは来なかつた。

「……何で？」

恐る恐る目を開けてみると、そこには角の下、眉間の辺りが陥没したイノシシが痙攣しながら横たわっていた。

「はあ……。」

予想だにしなかつた急展開に思考が付いていかず、精神的疲労と相まってその場にへたり込む。

「何で一発でイノシシ仕留められたんだ……？虎殺しならぬ猪殺しつてか？どこかの武道の達人だよ……。」

理解出来ない出来事に一人ボヤく。

「あれだけ走ったのに殆ど疲れて無いし…、一体どうなつてやがんだ。」

本来であれば答えてくれる人がいたのだが、宗太の問いは誰にも聞こえる事なくただ木々に吸い込まれただけだった。

「…さて、行くか。」

疑問は幾つも湧いて出て来るが、解決のしようがないのなら悩むだけ無駄である。

氣を取り直して人のいる場所を探す事にする。

「…と、その前にコレドリするか。」

田の前には先程仕留めた巨大イノシシ。

とりあえず足を掴んで引き摺つてみる。

「…軽つー。」

殴った時の衝撃の軽さから考えてもしやと思ったのだが、せいぜい

20キログラム程度にしか感じられない。

ともあれコレなら運べそうである。

イノシシの足を掴み上げると街道まで出る。

「右か左かか…」

一本道の街道をどちらに進むか迷ってしまう。

「よし、決めた！」

そう言つと、地面に落ちている木の枝を拾い上げる。

困つた時の神頼みならぬ枝頼み。

木の枝を地面に立て、手を離す。

枝は街道を横切る形で倒れた。

「……氣を取り直してもう一回。」

再度枝を倒すと今度は左。

「よし、行くか。」

宗太はイノシシを掴み直すと、街道を進み出した。

第2話 田覚めと遭遇、初戦闘で逃避行（後書き）

森の中でイノシシ狩り。

身体の変化にも余り深く悩まない宗太でした。

しかし、魔王様が出来来ない（笑）。

設定は主人公の宗太よりも詳しく出来てるのに。

誤字、脱字、「改行とか読みづらいよー」等の御意見など御座いましたらお気軽にどうぞ。

少しでも読みやすくなるよう改えて行きたいと思います。

第3話 街への到着とキルド登録（前書き）

今日は説明、説明、また説明。

ちよつと長くなってしましました。

第3話 街への到着とギルド登録

人気の無い森の中の街道を巨大なイノシシを引き摺りながら進む少年が一人。

街道に出てからかれこれ二時間、人っ子一人現れない。

「むひ…、自転車が結構通つてたみたい何だがなあ…。」

地面を見ると、剥き出しの土の道には細い車輪の後が幾つも残っている。

最初の内は近くに民家でもあるのかと思ったのだが、その様なものは一向に見えてこない。

疑問に思いながらも今では半ば諦めている。

「腹減つた…。」

今日は目が覚めてから何も口にしていない。

いや、歪みに飲み込まれてから朝まで眠っていたのなら、最低でも丸一日何も食べていかない事になるのか。

腹も減るはずである。

「腹減った！メッシ食わせー！腹減った！メッシ食わせー！……はあ。」

氣を紛らわせようと騒いでみるも、そんな事で腹が膨れるわけも無く。

溜め息一つ。

時刻は二時、このまま民家が見つからなければ野宿は確定。

火を起こす事も出来ず、猛獸が出没する森の中で過ごすのは全力で遠慮したい。

最悪、食事も生で猪肉を貪らなければならないかもしね。

そこまで考えると気が滅入つてくれる。

「…ん？」

脳内でこれから鬱展開に悶えていくと、視界の先で森の木々だ途切れているのが田に入ってきた。

「おお、森から抜け出せた！？」

やつたぞ木の枝！スゴいぞ木の枝！

気分一転、森の終わりに喜びも露わに足を速める。

森を抜け出せば、そこは一面の草原が緩やかな傾斜を描いていた。

何とも牧歌的な光景である。

片田舎とは言え“ゴゴゴ”とした現代日本で過ごしていた宗太である、観光で訪れていたならどれほど心安らぐ光景だらうか。

そしてその先には…。

「……城？」

巨大な城壁の中には城を思わせる建築物と、街と思われる小さな建物が微かに確認する事が出来た。

てつかり日本に居たものと思っていたのだが、西洋圏まで来ていたところのか。

宗太は思ひこもよらない事態に、呆然とその場に立ち直り直しつた。

「……ハツ！」

どれだけ立ち直り直していったのか、気を持ち直すとつあえず城塞に向かって歩く事にする。

田はまとうに傾いているのだ。

急がなくては日が暮れてしまつ。

早足で向かうこと數十分、道なりに進むとこれまた巨大な門に辿り着いた。

入口脇に灰色に輝く鎧を着込んだ数名の兵士らしきものが、槍を手に警戒している。

時代錯誤も甚だしい格好だ。

宗太がイノシシを片手に近づいていくと、こちらに気付いた兵士が槍を向けて問うてきた。

「止まれ！ 貴様は何者だ！」

宗太はどう答えたものか悩みつつも何とか返答する。

「えーとですね…、気が付いたらあっちの森の中に放り込まれてて、自分にも何がなんだか…。ここって何処なんでしょうか？」

そう言って来た方角、森の中を指差す。

「イーヴルースの森からだと… 貴様、魔族か！？」

やつぱり兵士は刺し殺さんばかりに槍を突き出していく。

「え、ええ…！？」

宗太は訳が解らず混乱する。

「少しばかり着かんか、ロイド。」

宗太が狼狽えていると、そう言いながら奥から一人の兵士が出て来る。

歳は四十くらいだろうか？

ガタいのいい鍛え抜かれた体躯は歴戦の戦士の風格さえ漂つてくる。

「部下が済まんな。俺はモーリス、良ければ中で話を聞かせてくれんか？」

モーリスと名乗った兵士の言葉にロイドと呼ばれた兵士は反論する。

「危険です！魔族かも知れない者を中に入れるなビト……！」

「落ち着けと言つたるだろ？ 確かに黒髪黒眼といった風貌や身なりは珍しいが、居ないという訳ではないし魔族にしては小柄。羽も尻尾も角すら見当たらんではないか。」

やつ聞われると漸くロイドは黙る。

「では改めて、中で話を聞かせては貰えんかな？」

上司と部下の言い合いに付いて行けずにはいられないと、ロイドを黙らせたモーリスが再度訊ねてきた。

よく観察してみると、表情こそは柔らかいが目が笑っていない。

此方の一拳手一投足すら見逃すまいとしているようだった。

「分かりました。」

「断つたらどうなるかと不安になり即答してしまつ。

「 さうか、それは良かった。では付いてくれ。」

そう言つとモーリスは門の中、詰め所のような場所に向かう。

（早またかな？もし納得して貰えなかつたらどうなるんだ？…？）

後ろをロイドともう一人の兵士に囲められながらモーリスについて行く宗太は、今更ながら不安を覚える。

と、詰め所の前まで来た所で引き摺つていたイノシシの存在を思い出す。

「あの、コイツはどうすれば…？」

「ああ、ロングホーンボアか。ひとまず「コチラで預かう。そこへ置いててくれ。」

そつ言つてモーリスは詰め所内の隅を指差す。

「分かりました。」

宗太が隅にロングホーンボアを置いたのを確認したモーリスは更に奥の部屋へと入っていく。

奥の部屋は隊長室とでも言つべきか、執務机と書類、ソファーに応接机が置いてあるだけの質素な部屋だった。

「ヤ」に掛けてくれ。ロイド、済まんが水晶を持ってきてくれんか。

」

モーリスは宗太にソファーに座るよう促すと、入口に立つロイドに指示を出し、自分も反対側に座る。

「改めて自己紹介をしよう。私はここ城塞都市ハーベルの衛兵隊長を務めるモーリス・ブラウンという者だ。さて、いきなりだが君の素性と何故イーヴルニスの森から来たのかを聞かせて貰つても？」

（魔族云々とか訳の分からん事言つてたし包み隠さず答えるのはマズいか…？）

「あ、自分は曉…いや、ソウタ・アカツキと言います。あの森に居たのは自分でも良く解らなくて、気が付いた時には着の身着のまま放り出されたとしか…。」

モーリスに問われるままに、しかし重要な事ははぐらかしながら答える宗太。

それを聞いたモーリスは顔を顰める。

「ソータか、変わった名前だな。しかし、何も持たせずにイーグルニスの森に放り出すとは…何か恨みでも買つたか？」

「そんな事は無いと思つんですが…。」

「失礼します！」

モーリスの疑問に宗太が苦笑しながら答えた時、ロイドが手に水晶球を持って入ってきた。

「おお、来たか。ここに置いてくれ。」

そうついつて応接机の上を示すと、ロイドは水晶球を慎重に置く。

「これは…？」

宗太が訊ねるとモーリスは説明をしてくれた。

「これは俗に識別球と呼ばれる物でな、手を翳す事でその者の持つ魔力属性を調べる事が出来るのだ。」

そう言つて手を翳すと水晶内が赤く輝き出す。

「と、まあこんな感じだ。君もやつてみてくれ。」

宗太は促されるまま水晶球に手を翳す。

すると、水晶内が緑色に輝く。

「ほつ、風に…若干だが土もあるのか?優秀なのだな。」

僅かながら茶色が混ざつていたようだ。

そう言つてモーリスは頷く。

心なしか表情が柔らかくなつた気がする。

「あの、これにほんとうの意味が…？」

宗太が質問すると、モーリスは済まなさそうに答えてくれる。

「うむ…実はな、先日魔族が近々この都市を攻めてくるという情報がもたらされたのだ。それで警戒を強化した所、魔王国領であり魔獸の巣窟であるイーヴルニスの森から正体不明の人間がロングホーンボアを引き摺りながら現れた。それで君を魔族かどうか調べさせて貰つたのだよ。魔族は少なからず闇属性を持っているのでね。」

そつと笑つて笑つ。

入口の兵士も緊張を解いてくれたようだ。

室内の張り詰めた空気が弛んだ気がした。

「手数を掛けて済まなかつたな。お詫びといつては何だが通行税は此方で免除させてもらつよ。」

「助かります。財布すら無い状態でしたので。」

そう言つとモーリスは大声で笑い出した。

「ハツハツハツ！そいつはまた災難だったな。まあ、あのロングホーンボアをギルドに持つてけば丸」と一頭だ、それなりの値段で買取つて貰えるだろ。そうなると早めに行かんとギルドが閉まつちまつた。ロイド！手早く手続きをしてやれ！」

モーリスはロイドに指示を出すと宗太に訊ねる。

「ギルドまでの道は…分からんだろう。ロイドに案内をせよ。ついでに荷車も貸そつ、ロングホーンボアを運ぶのに使つとい。」

「重ね重ねありがとうございます。」

宗太はモーリスの好意に感謝を述べる。

「気にしないでくれ、魔族なんぞと間違えて不快な思いをさせちまつた詫びだ。荷車は売り払つた後で返しに来てくれれば良い。」

その言葉に宗太は改めて礼を言つと、手続きの為に執務室を後にする。

詰め所で名前や目的等簡単な質問を受けた後、滞在許可証を受け取りギルドに向かう。

ギルドに登録していない者は身分確認が出来ない為、許可証が無いと色々と不便なのだとか。

ロイドはロングホーンボアを売るついでにギルドに登録しておいた方が良いとアドバイスしてくれた。

ハーベルで手続きを取った西門から続く大通りを暫く進むと、田当ての冒険者ギルドはすぐに見付かった。

道すがら教えて貰った情報によると、ハーベルは東西南北四つの区画に別れており、魔王国に近い危険な西区が冒険、傭兵、ギルドや武器・防具店の集まる区画になつたのだとか。

因みに、南が市場等の商業区、北が城を含めた高級住宅区、東が一般住宅区らしい。

「じゃあ、俺は詰め所に戻るよ。後はギルドの受付の指示に従えば諸々の手続きは出来る。」

そう言ってロイドは来た道を引き返す。

「ありがとうございます。」

宗太はロイドに礼を言いつと、ロングホーンボアを持ち上げ、ギルドの扉を開ける。

大きめの扉をぐぐると、正面にカウンター、左手の壁に書類が何枚も張り出され、その手前には幾つかのテーブルと椅子。

何ともベタなギルドであった。

「すいませーん、素材を買い取つて貰いたいんですけど…」

「あ、はい。…い…？」

宗太が入口からカウンターの受付嬢らしき人に声を掛けると、宗太を確認した受付嬢は驚愕の表情を浮かべた。

ギルド内にたむろしていた冒険者達も皆一様に口をあんぐりと開けて宗太を見ている。

「コイツを買い取つて貰いたいのですが。」

皆の反応を不思議に思いつつもカウンターの前まで進むと、右肩に担いだロングホーンボアを示しながら受付嬢に言つ。

「…あ、は、はい！では向かつて左手のドアから奥にお進み下さい。

何とか我を取り戻した受付嬢がカウンター脇、奥へと続いていると思われる扉を指し示すと、宗太は礼を言つて奥の部屋へと入つていく。

それを見送つた冒険者達は宗太が消えた後も暫く呆然としたままだつた。

奥の部屋は思ったよりも広かつた。

入つて左手には恐らく荷車等で運び込むためだろうか、正面入口よりも大きな扉があり、依頼の書類が張り出されていた壁の裏側に当たる場所には保管庫なのか、重厚な鉄の扉がある。

「すいませーん、コイツを買い取つて貰えますか？」

宗太は右側にカウンターを認める、再び訊ねる。

「あ、はー。…て、嘘お…。」

宗太に気付いた受付嬢はこちらでも呆然と宗太を見つめる。

「…あの、ハイツってそんなに珍しいんですか？」

その反応にいい加減不安になつてきた宗太は受付嬢に訊ねる。

「…あ、い、いえ！ランクは○相当ですが、割とポピュラーな魔獸です。…じゃなくて！その…、重く無いんですか…？」

「どうやら○の受付嬢、相当混乱しているようである。

「まあ、そこそこですね。○はどうすれば？」

先に進まないと判断した宗太は話を進める事にする。

「セレセレですか…。あ、そちらに置いて下さい。魔獸素材の買取り確認お願いします！」

宗太が床にロングホーンボアを置くと、受付嬢は裏に向かって声を上げる。

すると、奥から数人の男性職員が出てきてロングホーンボアを調べだす。

「お客様、査定の間に買い取り手続きをさせて頂きます。ギルドカードはお持ちでしょうか？」

「どうやら受付嬢はもう立ち直つたようだ。

流石は荒くれ共を纏める冒険者ギルドの受付嬢。

大したプロ根性である。

「いえ、実はまだ登録はしてないんですよ。」

「そうですか。では都市発行の身分証明書等はお持ちでしょうか?」

言われて宗太は詰め所で貰つた滞在許可証を提示する。

「「Jの許可証で大丈夫ですか？」

「はい、そちらで大丈夫です。ソータ・アカツキ様ですね、少々お預かりさせて頂きます。」

許可証を受け取った受付嬢は書類に何やら書き込んだ後、ロングホーンボアの査定をしていた職員と一緒に三言言葉を交わす。

「お待たせ致しました。今回の買い取りですが、ロングホーンボアが殆ど完全な形となりますので7万エリーでの買い取りとさせて頂きます。」

「え、エリー…？」

初めて聞く単位に宗太は頭上に疑問符を浮かべる。

「えっと…、失礼ですがお客様、入城手続きの際に通行税の方は…？」

不法入城と思ったのか、受付嬢が訝しげな表情で聞いてくる。

「あ、通行税は魔族に間違えられたお詫びとかで衛兵隊長さんが免除してくれたんですよ。お金の方は小さい頃から人里離れた場所で修行の毎日で今の今まで接する機会も無く…。」

勿論修行云々は口から出せはあるが、何とか納得してくれたようだ。

「では、通貨の説明を致しましょうか?」

「助かります。よろしくお願ひします。」

何と優しく受け嬢だろうか。

まるで後光が差して見えるよつである。

「では…、ニニフォートレス大陸では国を問わず共通通貨が流通しています。単位のエリーとは商業を司る女神エリーシャから来ていると言わており、貨幣の発行量は毎年女神エリーシャを祀る神殿の巫女が神託を受けて公正に決め、神殿が発行しています。」

そう言つて幾つかの八角形と円形のコインを取り戻した。

よく見ると八角形のコインの方が少し小さいようだ。

「これが貨幣です。種類は下から角銅貨、銅貨、角銀貨、銀貨、角金貨、金貨、白金貨となります。白金貨だけは高額なので角貨幣はありません。」

「続いて貨幣単位ですが、角銅貨一枚が1エリー、銅貨一枚が10エリー、角銀貨一枚が100エリー、銀貨一枚が1000エリー…と10の倍数で続いて、最後の白金貨が100万エリーとなります。角銅貨は使う人が少ないため余り見る機会は無いでしょう。貨幣で呼ぶか単位で呼ぶかは人によって様々ですので、細かいですが両方覚えた方が良いと思います。何か御質問は？」

受付嬢は一息に説明すると質問があるか聞いてくる。

「神殿が全て発行しているとの事ですが、不正はどうやって防止しているのですか？それと、両替はどうすれば良いのでしょうか？」

宗太の質問に受付嬢は笑つて答える。

「今まで何度も神殿の司祭等と不正を画策した人は居たそうですが、その全てが企みが成功する前に金銭的不運に見舞われて没落したそうです。今では不正を働くと考へる人も居なくなつたそうですよ。

両替についてですが、大抵の都市に民間の両替商が居りますが5～10パーセント程の手数料がかかります。お客様はこの後、ギルドへの登録はなさいますか？」

「はい、一応その予定です。」

宗太の答えに頷くと、笑顔で続ける。

「では、表のカウンターで、ギルドカードを提示して頂けば手数料無料で両替を御利用頂けます。これはどの都市の冒険者ギルドでも共通のサービスとなつておりますので必要の際は是非御利用下さいませ。以上で説明はよろしいですか？それでは改めまして、買い取り代金の7万エリーです。角金貨6枚と銀貨10枚にしておきました、どうぞお受け取り下さい。尚、ギルド登録手続きの際こちらの書類も提出して下さい。」

宗太が頷いたのを確認した受付嬢は、角金貨と書類を差し出す。

宗太がそれらを受け取ると、男性職員がロングホーンボアを保管庫に運び込む。

大の大人が五人掛かりでも少しづつしか動かない。

「セレセレですか…。」

受付嬢の眩きは聞こえない振りをした。

表の部屋に戻ると、登録手続きのためカウンターへ向かう。

「お疲れ様です。どのよいな」用件でしょうか?」

すると、こちらも立ち直った受付嬢が良い笑顔で対応してくれた。

「えつと、ギルドへの登録をしたいんですけど。」

「畏まりました。それではこちらの用紙にサインをお願いします。身分証明書と買い取り時に受け取った書類がありましたらそちらもお出し下さい。登録手数料は3000エリー、銀貨3枚となります。」

「

言われた通り、銀貨と書類を提出する。

「見た」との無いサインですねー…。」

サインを確認した受付嬢が不思議そつて笑ぐ。

「拙かつたですか？」

不安になつて聞き返す。

日本で育つて17年、外国語など書けるワケがない。

とこりか、せつきからみんな日本語話してゐるじやないか。

「いえ、カードの再発行の際に必要になるだけですのです。」

受け取つた受付嬢はといつと、特に気にした様子もなくカウンター奥の部屋に行き、書類を渡して戻つてくれる。

どうやら奥の部屋は貰い取り窓口と共通の事務室になつていいらしい。

「カードの発行には少々お時間がかかりますが、その間にギルドについての説明を致しましようか？」

「お願いします。」

ギルドについても聞いておく事にする。

冒険者ギルドは想像していたよりも親切なようだ。

「冒険者ギルドとは、基本依頼者と冒険者間の仕事の仲介を行う組織です。依頼の内容は護衛や魔獣及び犯罪者の討伐、素材の採取など様々なものがあります。

あくまで依頼者は個人単位が基本ですので、戦争等に参加するのではしたら傭兵ギルドの方に登録下さい。両方登録されている方もいらっしゃいます。

丁度向かって左手の壁に依頼書が確認出来ると思いますが、その中で仕事内容と報酬から納得出来るものをお選び頂き、こちらのカウンターに持ってきて頂ければ受注手続きを致します。」

「報酬額ですが、基本一つの依頼を何人のパーティーで受けようと思報酬額は変わりません。パーティー内で山分けして頂く事になります。しかし、護衛など人数が欲しい依頼では個別報酬となる場合もあります。キッチンと依頼内容は確認するようにして下さい。その場合は報酬欄に『個別報酬』と記載されますので分かりやすいと思います。

また、提示されている報酬額は予めギルドの仲介手数料を差し引いた金額となつております。尚、ギルドを通さない依頼の契約にはギルドは一切関与致しませんので」了承下さい。ここまで何か御質問は？」

訊ねられて宗太は首を横にふる。

「では説明を続けます。次にランクですが、これはS～Fの7段階に別れており、それぞれ2ランク上の依頼までしか受ける事は出来ません。下は制限がありませんが、ランクアップの審査の対象にはなり難いですね。ランクは依頼の達成状況やランクの高い魔獣を倒す等、実力があると認められる事で上がっています。

注意して頂きたいのは、依頼を失敗されると10パーセントの罰則金が発生致します。また、失敗を何度も繰り返すと実力無しと判断されランクが下がる場合もありますのでご注意下さい。」

「最後に依頼とは関係ありませんが、便利なギルドのサービスを説明させて頂きます。

ギルドでは、新しくやつてきた冒険者の皆様に対し優良商店、宿屋などの紹介や両替、お金のお預かり、素材の買い取り、各種手続きの代行等を行っております。手続き代行は一部手数料が掛かる物もございますが、これらのサービスは基本無料でご利用いただけます。新しい都市にお越しになつた際は是非ご活用下さい。

また、ギルド提携店ではギルドカードの提示により割引が行われます。割引率は店舗により異なりますが、大抵は5～30パーセント程でしようか。提携店は看板の隅にギルドの印である『盾に立て剣』が描かれています。」

そう言って一枚の紙を取り出して見せる。

紙にはヒーター・シールドの中心に両刃の剣が立て掛けられた様な絵が描いてあつた。

「提携店は厳格な審査によつて選別されますが、万が一詐欺行為等が起きた場合はギルドまで申し出て下さい。調査し、再発防止等に努めさせて頂きます。

説明は以上です。解らない事がありましたら、お気軽に職員にお訊ね下さい。」

受付嬢が説明し終えた時、奥からやつてきた職員が受付嬢にカード渡す。

「お待たせ致しました。こちらがカードになります。ソータ様はロングホーンボアの討伐が評価され、Dランクからの開始となりました。頑張って下さい。

尚、カードの再発行と一年毎の登録更新ではそれぞれ手数料が発生致しますのでご留意願います。

それでは、ソータ様の今後のご活躍をギルド職員一同、心よりお祈りします。」

そう言つてお辞儀する受付嬢。

宗太も礼を言つと宿屋の場所を聞いて、ギルドを後にす。

外はすっかり暗くなつていた。

急いで荷車を詰め所まで持つて行くと、衛兵にお礼を言い返却する。

ギルドで紹介された宿屋は西区の大通り、比較的、ギルドに近い場所にあつた。

一階が酒場兼食堂とはまたまたベタな…。

向かつて左に上に上がる階段がある。

「いらっしゃい！ 一人かい？」

中に入ると拾福の良いおば…お姉様が出迎えてくれた。

一瞬強烈な殺氣を感じたのは氣のせいだらう。

近くの客がこっちを見て青い顔をしていた氣もするが。

「冒険者ギルドの紹介で宿を取りたいんですが。」

そつと口にながらギルドカードを提示する。

「おや、アンタ冒険者かい。一人部屋で良いのかい？ 一泊二食で角銀貨5枚だけだ。」

一応、暫く滞在するかも知れないので角銀貨一枚を支払う。

「20日分前払いだね。もし宿を出る場合は残金返却するから言つとくれ。アンジー、お姉さんを部屋に案内しておくれー！」

おば…お姉さんが店内で叫ぶと、給仕をしていた十歳くらいこの女の子がやつてきた。

「部屋を確認したら夕食を出すから降つてしまおれよ。」

おば…お姉さんはやつと詰めて給仕に戻る。

「々感じの殺氣な何なんだ？

「アアア」お姉さんはやつて言つたら凄く恐いのよ…あたしアンジーハリー

ナ、アンジーって呼んで。よろしくねー。」

「俺はソータ。よろしくね、アンジー。」

そう言って挨拶する宗太とアンジエリーナ。

食堂内におかみさんの怒声と密の笑い声が響き渡った。

その後部屋に案内されてから夕食を取り、今日は早めに寝る事にする。

今日は色々とあり過ぎて疲れた…。

(明日はまだあるか…。)

そんな事を考えながら眠りに落ちていった。

第3話 街への到着とギルド登録（後書き）

他人との会話が入つただけでここまで長くなるか。

いや、説明のせいでしょうかね？

ご意見、ご感想お待ちしています。

次回、ついに魔王様が出る！…予定。

第4話 街の散策と買い物、邂逅（前書き）

といひでR15っていひまで許されるんでしょうかね。

あまりグロい表現は入れないつもりですが…。

後書きに投稿直前に考えた簡単な各種ギルドの説明を載せます。

本文最後のルシファラによる傭兵蹂躪部分に少し書き足しました。

第4話 街の散策と買い物、邂逅

「しらない天井だ…。」

目覚めて最初に目に入ったのは白い天井。

頭側の壁にある両開きの窓からは朝の光が差し込んでいる。

時刻は7時、窓の外に意識を向けると早朝にも関わらずかすかな喧騒が聞こえてくる。

「今度はちゃんと言えたぜ…。」

固めのベッドから起き上がりつつ、咳く。

何とも無駄な拘りである。

随分とゆっくり眠れたので頭は大分スッキリしている。

（この街は何なんだ？城門の兵士に中世のような建築物、鎧と剣を装備した人もチラホラ見えたし。…それに魔族？吸血鬼伝説の事か

(?)

「コードハンガーに掛けておいたワイシャツと詰め襟を着ると、朝食を取るため食堂に向かいながら今の状況について色々と考えてみる。」

（魔物に魔族、兵士や冒険者、魔力属性…。あー…、訳解らん。まるでゲームや漫画の世界だ…。）

まあ、小説なんで…ゲフンゲフン。

どうにも現実に理解力が追いついていかない。

「おや、お早う。朝食にするかい？」

いつの間にか一階に辿り着いていたようだ、おかみさんが声を掛けてきた。

流石に朝っぱらから酒を飲もうなどというバカは居ないようで、食堂内は数人の客が居る以外は昨夜の喧騒が嘘のように静かだ。

「お早うございます。お願ひ出来ますか？あ、その前に顔を洗つてきたいのですが…。」

「用意しておくよ。裏に井戸があるから好きに使いな。」

おかみさんが指差した階段裏にある扉から外に出ると、裏庭の隅に井戸があつた。

「井戸とか使うの初めて…。」

祖父の家にも井戸はあつたのだが、石の蓋が被せられていたため使つた事は無かつた。

つるべを落とし水を汲み上げると、桶にあけて顔を洗つ。

水が冷たくて気持ちいい。

タオルが無かつたのでハンカチで顔を拭くと食堂内に戻る。

朝食はパンと柔らかく煮込んだ肉、スープとサラダだつた。

全体的に薄味だがかなり美味しい。

昨夜は疲労で味わって食べられなかつたのが残念でならない。

「今日せむりあるんだい？」

一心に朝食を消化してこらへ、おかみさんが話しあげてきた。

「んー……」この街には昨日来たばかりなので、散歩がてら色々と見て回りつかと。」

「じゃあ、あたしが案内してあげるー。」

宗太が答えると、掃除をしていたらしくアンジーハーナが笑顔で言つてきた。

肩甲骨の辺りまで伸びた茶色の髪を後頭部で一つに纏め、同色の瞳は期待に満ちている。

「確か昨日は三つ編みだつたよね、髪型変えた？」

昨夜の記憶を思い出しながら、聞いてみる。

「あの日の気分で色々と変えてるの。似合わないかな……？」

「うん、似合ってるよ。可愛い。今日はアンジーさえ良ければ案内頼めるかな？」

円滑なコワゴーーションの為には相手を褒めるのが有効なのだ。

「うそ、任せたねママー、行つてきと良じよね？」

宗太の返事に笑顔を一層深くし、おかみさんご聞くアンジーリーナ。

頬が若干赤いのは何故だろうか。

おかみさんは苦笑しながら許可を出す。

「やった！ソータさん、掃除が終わったり迎えに行くんで、お部屋で待つてて下さい。」

アンジーリーナはそう言つて上機嫌で掃除に戻る。

食べ終わった宗太は、食休みのためにも言われた通りに部屋で待つ事にする。

部屋に戻つて一時間程経つた頃、扉をノックする音が聞こえる。

「ソータさん、お待たせしました！」

アンジェリーナの準備が出来たらしい。

宗太が扉を開けると、外出用がおめかしした姿が目に入った。

少し時間が掛かつたのはこのためか。

「着替えたんだね。よく似合つてゐるよ。」

宗太が褒めると顔を赤くして俯いてしまつた。

（ありや、恥ずかしいのかな？似合つてゐるの……。）

何とも無自覚な男である。

「何か買つ物はありますか？」

一人で外に出ると、アンジエリーナが訊ねてくる。

「そうだな…、武器とか欲しいかな。冒険者が素手つていうのもアレだし。良い店知らないかな？」

「うーん、リードさんのお店で大丈夫かな…。案内しますね。」

そう言つて歩きだすアンジエリーナ。

何やら不安げな表情が隠せていない様子だ。

「そのリードさんだけ…？何か問題でもあるの…？」

一緒に歩きながら聞いてみる。

「問題、といいますか、その…。」

何とも歯切れの悪い返答だ。

「取り扱っている武具は良いものが揃っていると評判なんですが、性格の方も評判で…。気に入った人とその他の人で値段を変えちゃうんです。いい人ではあるんですが。」

「何ともまあ…。」

不安そうにしている理由が分かった。

何とも個性的な人物であるようだ。

宗太も若干不安になってきた。

「でも、きっとソータさんなら大丈夫です！あ、着きましたよ！」

話している間に着いたようだ。

アンジェリーナは根拠不明だが自信満々に言い切ると、店の扉を開け入つて行く。

武具店の印なのか、盾に剣と斧槍が交差した物が看板に描かれてい

た。

宗太も後に付いて入つて行くと、剣や槍を始め短剣、盾、鎧など様々な品物が陳列されていた。

「おう、アンジージャねえか！今日はどうした……って、誰だ？後ろのヒヨロイのは。」

宗太が店内を珍しそうに眺めていると、奥から一人の男性が現れた。

禿げ上がった頭に白い口ひげ、顔や筋骨隆々な体躯には至る所に傷痕がある。

何よりデカい。

二メートルはあるんじゃないだろうか。

その風貌は「山賊の頭かしらです」と紹介されれば思わず納得してしまいそうだ。

（前職は山賊か……？）

「誰が山賊だ、俺は元冒険者だ！」

「読心術！？」

思つていた事を言い当てられて思わず焦る。

「声に出していましたよ…。」

アンジエリーナが苦笑しながら教えてくれた。

あまりの衝撃に口に出してしまつたらしい。

反省。

「…まあ、いい。それで、お前さんは？」

「」の人はソータさん、ウチに泊まつてゐる。

リードの間にアンジエリーナが答える。

「ソウタ・アカツキです。昨日冒険者ギルドに登録したばかりなので、武器を買いに来たんです。」

続いて宗太からも自己紹介をする。

「リード・ロフマンだ。元冒険者で今は武具屋の店主をしている。」

元冒険者を強調しながらリードも自己紹介をする。

結構気にしていたようである。

アンジェリーナは苦笑を浮かべながら見ている。

「登録したばかりってことは新米か。ギルドカードは？」

言われてカードを見せる。

看板にギルド印が無かつたので提示はしていなかったのだ。

「ふむ、…ん？依頼達成ゼロでランクロだと…」いや、ビリビリの事だ…？」

カードを確認していたリードが疑問を口にしたので宗太は事の経緯を説明する。

「実は気が付いたら西の森で倒れてたみたいで、街を探して歩いていたらロングホーンボアでしたっけ？あの魔獣に追いかけられたので何とか倒したんですよ。」

「イーヴルニスの森を踏破しただと？魔族つて訳でも無さそうだな。…成る程、その時に剣を折つちまつたつて訳か。」

「あの森を無事に抜け出せるなんて、ソータさん凄いです！」

リードは宗太の説明に納得をし、アンジェリーナは尊敬の眼差しで見つめてくる。

宗太は特に考へもせず、リードの言葉を一部訂正する。

「いえ、剣とか持つて無かつたんで殴りました。」

「「……は？……殴つた？」

リードとアンジェリーナは見事なシンクロ率で唖然とした表情を浮かべているが、宗太は特に気にせず説明を続ける。

「ええ、無意識に拳を出したら運良く眉間に打ち抜いたみたいで。そのまま引き摺つて街まで持つてきました。：剣とか見せて貰つても？」

「…あ、ああ。」

「なぐ…、引き摺つて…？」

宗太の質問にリードは辛うじて反応を返すが、アンジェリーナはまだ脳が理解しきれていないようだった。

その間に宗太は武器を見て回る。

片手剣や大剣、種類も直刀から曲刀まで様々である。

目に付いた物から握つて確かめて見るが、どれも軽過ぎてしつくり来ない。

粗方見終わり、諦めようかと思い始めた時、店の隅に立て掛けている大剣が目に入った。

ツヴァイ・ハンダーと呼ばれる大剣に似ているだろ？

一メートル近い全長に長い柄、刀身の根元にも持ち手にするためか革紐が巻かれている。

ただ記憶にあつた物と違うのは、剣先から根元　革紐が巻かれていない部分　までが大分幅広になっている事だろ？

手に取り軽く振つてみる。

まだ片手でも振れそうな程軽いが、他の剣より余程良い。

これにしようと決めてリードの方をみると、またしても啞然とした表情でこちらを見ていた。

「…お前さん、そいつを振れるのか？」

「…？ええ…。」

リードの問い掛けに頷くと片手で振つてみる。

それを見たリードはうなだれていた。

「今までそれを振るう事を目標に鍛えに鍛え、ついで叶わなかつたモノがそんな細腕に…。」

Hラ-に落ち込みよつである。

「ソータさん凄い！格好良いです！！」

アンジュリーナは逆にHラ-にハシャギよつであつたが。

宗太は若干引きつった笑みを浮かべながらも値段を聞いてみることにする。

「それで、コレを貰いたいんですけど、良いもん見せて貰つた。角金貨二

「金貨五枚…と言いたい所だが、良いもん見せて貰つた。角金貨二

枚で持つてけ。」

あまり高すぎる買い物が出来ない宗太は、内心ホッとしたながらも代金を支払い礼を述べてアンジエリーナと店を後にする。

「次はどうに行きますか?」

言われて考える。

他に必要な物といったら服だらうか。

いつまでも同じ物を着続けるといつのも気分が良くない。

本来なら剣よりこちらを優先するべきなのだろうが、そこは冒険者とこう事で無理やり自分を納得させる。

「そうだな。替える服が欲しいんだけど。」

「じゃあ商業区の服屋さんですねー。」

行き先を決めると、アンジエリーナは裏道へと入つて行く。

田当ての店に行くには、中央広場まで出てから大通りを歩くよりも近道になるそうだ。

裏道は想像通りと言つべきか、疎^{まば}らに商店がある以外には殆ど人通りもない。

「もしかして買い物に行く時とかは何時もこんな道を通りてるの?」

この様な場所を女の子が一人で歩いているのだとしたら危ないんじやないか、と思い訊ねてみた。

「そうですね…、お使いの時なんかも通つたりしますよ。あ、この街つて意外と治安^{安_{セイ}}が良くて裏通りも安心して歩けるんですよ。」

治安の良さがどれだけのものかは知らないが、流石に日本レベルといつ事も無いだろう。

アンジエリーナに気付かれ無いように周囲を警戒しながらも、会話を華を咲かせる。

(見られてる…?)

西南区画の中程まで来た頃だらうか。

宗太はふとこちらを観察するよつた視線を感じ、顔を上げる。

すると、黒いローブを着た小さな人影が一こちらに向かって歩いて来るのが目に入った。

フードを田深に被つてゐるために、その表情までは窺う事が出来ない。

(！？)

「どうかしたんですか？」

ふと人影と目が合つた氣がして若干身構えると、アンジェリーナが不思議そうに訊ねてくる。

「あ、いや、何でも無いよ。」

「？」

笑つて内心の動搖を誤魔化す宗太。

ありがたい事にアンジェリーナはそれ以上深く突っ込んでくる事はしなかつた。

内心安堵しつつも、件の人影に思いを巡らせようとした時だつた。

「 オイッ！ テメエビ」見て歩いてんだ、アアッ！？」

前方から何ともガラの悪い怒声が響き渡り、宗太とアンジェリーナは揃つて声のした方に視線を向ける。

見ると、ガラの悪そうな屈強な男達が五人、先程の人物 身長が男達の胸辺り迄しか無い事から察するに未だ子供だろう を取り囲んでいた。

「確かに儂は注意を怠つてしまつたが、それはオヌシ等とて同じであらう？ぶつかったのはお互い様という事じや。」

「どうやら互いに注意不足で脇道からの出会い頭にぶつかつてしまつ

たようだつた。

ローブの人物は口調こそ年寄りクサいが、声から察するに女性それもまだ幼い少女であるらしかつた。

宗太は徐に背負つた大剣の柄を握る。

このまままるく收まれば良し、状況が悪化すれば直ぐにでも助けに入るつもりであつた。

第一、子供一人を大の大人が寄つて集つて脅すというのが氣に入らない。

「ンな事関係ねえんだよ！そのフードを取りやがれ！」

男達もそれに気付いたのか、その内の一人が下卑た表情を浮かべながらフードを剥ぎ取る。

左右後ろに纏め縦に巻かれた陽光に煌めく銀髪に幼いながらも整つた顔立ち、ややつり上がり氣味の真紅の瞳はその意志の強さを表しているようだ。

剥ぎ取られたフードの下から現れたのは十人居れば十人が振り返る

程の美少女だった。

「へへへ、コイツは上物だ……。」

その素顔を見た男達が誰ともなく滋くと下卑た笑みを深めた。

「ガキとはい人にぶつかつたからには誠意を持つて謝つてもらわねえとなあ。取り敢えずは身体で払つて貰うか。」

「楽しんだ後は売つ払つて残りを返して貰うから気にすんなよ。」

その表情を見た少女の瞳に剣呑な色が浮かんだのに男達は気付く事無く、言いたい事を言いながらそれ腰の剣を引き抜くと、脅す様に翳して見せる。

「……ツー！」

男達が剣を抜いのを認めるに、宗太は鞘ごと大剣を背中から引き抜き全力で踏み出す。

「ひやつー!?」

宗太の踏み込みに耐えきれず石畳が陥没する。

それに驚いたアンジェリーナが可愛らしい叫び声を上げるが気にしないでおく。

瞬時に問合いを詰めると、一門。

手前で背を向けている一人を叩き伏せる。

驚いた様子で宗太を見る四人。

宗太は軽く左にステップを踏むと男の肩口に突きを叩き込む。

「伏せて！！」

盛大に吹き飛んで行く男に殺して無いかと内心焦りながらも、少女に向かつて指示を出す。

言われた通りに身を屈めた少女を確認すると一歩踏み込み、こちらに向き直った残り一人の内左の男を横殴りに吹き飛ばした。

「て、テメエ！俺達を傭兵団『鮮血の剣』^{ハリケン}と知つて刃向かつてやがんのか！？」

「知るかバカ。」

上擦つた声で叫ぶ男に一言だけ返して叩き伏せる。

一応死んではいない筈である。

…全員瀕死かもしけないが。

「ソータさん、大丈夫ですか！？」

最後の一人を倒したのを確認したアンジェリーナが声を上げながら駆け寄ってきた。

「うん、平氣平氣。君も怪我とかは無い？」

アンジェリーナに答えた後、少女の方に向き直り訊ねる。

改めて見るとホント小さい。

140センチメートルくらいしか無いんじゃなかろうか。

「つむ、問題は無い。今回は礼をおつ、助かった。オヌシ名は何といつ?」

少女の物言いに苦笑しながらも自己紹介をする宗太。

「どういたしまして。俺は宗太、駆け出しの冒険者をやつてゐんだ。

」

「何、冒険者じやと…?」

宗太の答えが気になつたのか眉根を寄せせる少女。

「あ、あのー取り敢えずここから離れませんか?この人達の仲間が来るかも知れませんし…。」

傭兵“団”と言つていたのを聞いていたのだろう。

アンジエリーナがそう提案していく。

「そうだね、早いとこ離れよ。君も…。」

「済まぬが儂はここに残らねばならぬ。連れがあるのでな。」

宗太の言葉は少女に遮られてしまった。

なおも迷つ宗太とアンジエリーナに少女は続ける。

「何、すぐに合流する予定じゃ。この奴等の仲間に遭遇する前には離れられるじやろ。」

言外に早く行けと言われていると感じた宗太とアンジエリーナは、少女を気にながらも先に行く事にする。

「そう言えば名乗り忘れておったな。儂の名はルシフハウ。すぐにまた逢うことになるじゃろ。」

宗太は背後から聞こえた少女 ルシフハウの言葉に振り返り、軽く手を振つてからまた歩き出した。

「ソータ、か…。なかなか楽しそうな奴じゃの。」

二人が立ち去ったのを確認したルシフェラが呟く。

ふと、こちらに近付いてくる気配を感じた。

その数十。

連れの合流よりこちらの方が早かつたかと一人こちる。

「オイ、ガキ！」いやあ誰がやりやがった！？」

ルシフェラと倒れている仲間を認めた男達がルシフェラに詰め寄る。

「何、ぶつかつた程度で得物を抜いてきたのでな…。」

その言葉を聞いた男達は剣を引き抜いてルシフェラを取り囲む。

腐つても傭兵という事だろうか、その行動は素早かつた。

ルシフェラが内心で感心していると、男達の一人 リーダーと思わしき人物が忌々しげに口を開く。

「オイ、ガキ…。誰がやりやがったのかは後でゆっくり聞かせて貰おうじやねえか。テメエ等、連れてけ！」

「 それは御遠慮願います。」

リーダーが号令を出すと同時に、どこからともなく少女の声が聞こえてきた。

「だ、誰だッ！？」

リーダーが姿無き声の主に向かい叫ぶ。

すると、狼狽える傭兵達の直中、ルシフェラの背後に侍女服を身に

纏つた少女が突如として現れる。

年の頃16、17といった所だろうか。

薄紫の髪を後頭部で一つに纏め、同色の瞳はどことなく落ち着いた雰囲気を醸し出している。

腰に佩いた双剣が異様ながらも身に纏つ雰囲気に溶け込んでいる。

「一人の女性を十人がかりで取り囮むなど、エスコードにしては些か礼儀に欠けると思いますが。」

少女は男達を奢めるように言つ。

「遅いぞリース。何をしておつたのだ。」

「申し訳ありません。城内の探索に思いの外手間取つてしまいまして…。しかし、このまま領主を消した方が手っ取り早いのではありませんか？」

ルシフェラの問いにリースと呼ばれた少女が答える。

「何を言つた。軍を以て侵略するのが様式美といつものじやうひつが。」

「て、テメエ等何を言つてやがる！何モソンだッ……！」

二人のやり取りに業を煮やしたリーダーが問い合わせるも、答えてくれる者はいなかつた。

「申し訳ありませんが、少し黙つてて頂けませんか？」

リースが腰の双剣を握り一步を踏み出しが、それはルシフェラの手によつて遮られた。

「…ルシフェラ様？」

「儂は今とても氣分が良い。こ奴等は儂が直々に相手しよう。」

リースを手で制したルシフェラが変わりに歩み出る。

リースは諦めた表情で退いた。

「さあ、掛かつてくるがよい！下郎共！」

素手で高らかに宣言したルシフューラに対し傭兵達は一瞬だけ逡巡するも、剣を握り直して襲い掛かる。

「　　来い、朔夜。」

ルシフューラがそう言つた瞬間足元の影が蠢き、ルシフューラの右手まで伸び上がつた。

ルシフューラが影を掴むと、影は漆黒の刀身を持ち、身の丈を超える両刃の大剣へと姿を変えた。

急な大剣の出現に動きを止める傭兵達にも構わず、ルシフューラは上段から切りかかる。

咄嗟に剣の腹で受けた傭兵は剣ごと一いつに叩き斬られた。

驚き、狼狽える傭兵達を嘲笑うかの様に突如ルシフューラが姿を変え
る。

側頭部からは一本の角が生え、背中のロープが僅かに盛り上がる。

僅かに上がったロープの裾からは返しの付いた槍の様な尻尾が現れた。

「！」、コイツ…、魔族か…！…！」

あまりの出来事に浮き足立つ傭兵達は、しかし逃げる事叶わず。

次々に斬り伏せられていった。

全てが終わつた後、そこには一人の少女と十五人分の肉塊が残つていただけだった。

「随分とご機嫌ですね。何か良い事でもござりましたか？」

目の前の惨状を気にした様子も無く問い合わせるリース。

「つむ、オヌシが来る前にちと、の…。」

対するルシフェラも明らかにご機嫌な様子で宗太達が消えた方角を見つめる。

「ククク。
さて、今代こなは儂を楽しませてくれるのかのう
?のう、勇者よ。」

第4話 街の散策と買い物、邂逅（後書き）

どうも、今回書いていてアンジェリーナを気に入ってしまった作者です。

遂に出ました彼女達。
これからどうしよう。

取り敢えず作中に出でくるか不明ですが、急遽考えたギルドの説明です。

ギルドの紹介（ ）内は印（ 印は世界共通）

冒険者ギルド（盾に立て剣）

各国にある冒険者を纏める組織。

国を越えて繋がり、国とは独立した組織である為戦争には関わらない。

依頼主からの仕事の仲介や素材の買い取り、提携店の紹介など幅広いサービスを行う。

傭兵ギルド（盾に交差剣）

各国にある傭兵を纏める組織。

冒険者ギルドとは違い他国のギルドとの繋がりは無い。

戦争時に登録された傭兵と国との仲介を務める。

魔術師ギルド（六芒陣に杖）

各国にある魔術の研究や魔術師を教育する組織。

魔術の研究内容は部外秘であり、戦争時には所属魔術師も参戦するため傭兵ギルドと同じく他国のギルドとの繋がりは無い。

商業ギルド（荷馬車に財布）

都市にある卸商の組合。

主に店主への卸商の紹介、取次などをを行う。

また、冒険者ギルドから素材の引き取りや海運ギルドとの提携等も行う。

海運ギルド（竜頭帆船）

沿岸部の船主による組合。

商業ギルドとの提携による船主と卸商の仲介や造船所の取り纏め、一般人への客船等の紹介も行う。

盗賊ギルド（交差短剣）

盗賊や暗殺者を纏める非合法組織。

暗殺依頼や暗殺者の育成、盗品の売買等をしている。

ギルド同士の繋がりは情報の共有程度。

主な物は以上でしょうか。

ご意見、ご感想等もお待ちしております。

第5話 続・買い物と魔王襲来！！

ルシフーラと別れた宗太とアンジエリーナは本来の目的である服飾店への道中を歩いていた。

「 やつぱり暫くは裏道を通るのは止めといた方が良いこと思つよ。」

「

宗太は先程の騒動を思い出しながらアンジエリーナに忠告する。

「いつもならあんな事は滅多に無いんですよ…？」

対するアンジエリーナは若干俯きながらも反論する。

「滅多に無いと言つても絶対じゃあないだろ？それに魔族が此処を狙つてるって情報があるんだし、ああいつたならず者がこれからも増えると思うんだ。」

戦場を求めて傭兵が押し寄せれば、ああいつた手合いもまだまだ増えてくるだろ？

「 今回のルシフーラがアンジーだつたらどうなる？俺だつて何時も

護れる訳じゃない。多少遠回りするだけで危険が回避出来るならそつちの方が良いじゃないか。」

「そう……ですね。分かりました、暫く裏通りには近付かないようにします。」

「どうやらアンジェリーナも理解してくれたようだ。」

笑顔で応じてくれた。

残念ながら「出来れば、お使いの時とかもソータさんと一緒にお出かけしたりとか……」というアンジェリーナの呟きは宗太の耳には届いていなかつた。

目当ての服飾店は大通りから少し中に入った場所に建つていた。

看板には針と糸にシャツ、それにネックレスと思われる絵が描かれている。

「どうやらこれが服飾店のようだ。」

「こらっしゃい……おや、アンジーかい。」

「今日せニースを。」

店内に入るとなごく若い女性店員が笑顔で迎えてくれた。

「うわーいの店もアンジエリーナの馴染みであるひじ。」

「…と、後の男はアンタのコレかい？」

セーフティ親指を示すニース。

「…でも親指は“男”を表すのだろうか。

アンジエリーナは一瞬で顔を真っ赤に染め上げる。

「ち、違こますー。ソータさんはウチのお客さんで…。」

「ほほーー、そりがこわつい。」

顔を真っ赤に染めながらあたふたと反論するアンジエリーナを一矢

「ヤ笑いながらからかうユース。

若いのに随分とオッサン臭い言動だ。

「それで、今日は何の用事で来たんだい？」

一頃りアンジェリーナをからかつた後、宗太に訊ねてくるユース。

アンジェリーナは漸く解放されてホッと息を吐く。

赤くなりながら瞳を潤ませている顔が何とも可愛い。

このままアンジェリーナ眺めていたらイケない性癖に目覚めてしまいそうだったので、慌てて本題に移る。

「えと、実は替える服が無いのでそれらを買つて…。」

「ん、もしかして早急な入り用かい？」

途端に困ったような顔をするユース。

「何か問題でもあるんですか？」

「確かにユニースさんつて普段からフリーサイズの作り置き用意してませんでしたっけ？」

宗太とアンジェリーナがそれぞれ疑問を述べると、ユニースが申し訳無さそうに言ひ。

「…それ何だけどねえー。実は昨日新規の客が来て買つてつちまつたんだよ…。」

「そんな…。」

ユニースの店ならすぐ手に入ると思つていたのだが当たが外れた。

宗太に無駄足を踏ませてしまった事に落ち込む。

「何着必要だつたんかい？」

「やつですね…、上下と下着で二着ずつくらい」でしょうか。」

この街で見かけるよりも遥かに多い。

旅を考えるなりの辺りが妥当だわ。

「今から探しして縫うとなると上着と下着の一組で…出来上がりは一日後かな?」

「そんなに早いんですか?」

そんなに早く作れるものなのだろうか。

もつと時間がかかるものだと思っていた。

「ま、アンジーのオトコなら特別。超特急で仕上げてやるよ。」

そう言つて豪快に笑つ。

ヤバい、姉御と呼びたくなつてきた。

「か、かかかか彼氏じゃ無いですよー…そんな、あたしなんてソー

タさんにはとても……で、でもソータさんさえ良ければ……、その
……。キャッ！」

落ち込んだ様子から一転、わたわたと手を振りながら騒ぐアンジュー
リーナ。

もう先の失敗は頭に無いようだ。

こつなる事を狙つたのだろう。

ユニースは優しげな微笑みを浮かべながらアンジュー・リーナを見ている。

（仲良いんだなあ……。）

そんな一人のやり取りを見て、宗太もつられて笑みを浮かべるのだった。

「さて、それじゃ採寸しようか。コツチに来てくれ。下着は一度一
組あるから、今日の所は古着屋で買つて貰えるかい？」

そう言いながら店の奥に向かうユニースについていく。

店の奥が作業部屋となつてゐるようだ。

壁際の棚には色とりどりの布、作業台の上には作りかけの衣服や裁縫道具等が置かれている。

「上着は脱いでおくれ。」

そう言いながら道具入れからメジヤーの代わりなのだろう細長い紐を持つてくる。

宗太は言われた通り詰め襟を脱ぐとユニースに手渡す。

「ほひ、コレは……なるほど。」

ユニースは受け取った詰め襟を一頬り観察し終えると、入り口脇のコートハンガーに掛けて宗太の採寸に移る。

「ユニースさんつてアンジーと仲良いんですね。」

黙つているのも何なのでユニースの指示通りに紐を摘んだりと、採寸の補助をしながら思つた事を聞いてみた。

「ああ、あの娘の家は服から寝具までウチで買つてくれてるからね、それなりに長い付き合いなんだよ。あの娘も小さい時から知つてるので、まあ妹みたいなもんだね。」

言つて笑う。

「あの娘が今日着てる服もねえ、アタシがこの前の十歳の誕生日に贈つた物なんだよ。大事にするつて言つてたんだが、まさかオトコ連れでお披露目になるとは思わなんだ。まだ子供だと思ってたんだがやつぱり女の子なんだねー。」

「ははは…。」

意地の悪い笑みを浮かべて見上げてくるユースに、宗太は苦笑で返す事しか出来なかつた。

採寸も終わり店内に戻ると、アンジエリーナは暇つぶしに見ていたのだろう商品のカタログから顔を上げた。

「ソータさん、採寸終わつたんですね。お疲れ様でした！」

「うん、お待たせ。」

そう返すと、顔を赤くしてまたカタログに視線を落としてしまう。

「はいよ、下着だ。この後特に予定が無いなら一人で公園に散歩にでも行つてきたらどうだい？」

そんなアンジェリーナの様子をニヤニヤと笑いながら見ていたユースが下着の入った紙袋を渡しながら不意に提案してきた。

「公園？」

「この街には北区と東西区画の境に遊歩道と公園があるんですよ。それと中央広場を合わせた三カ所が市民の憩いの場となってるんです。」

宗太の疑問にはアンジェリーナが答えてくれた。

「じゃあ、古着屋を見た後にでも行つてみよつか。」

「は、ひやいーーー。」

勢い良く答えたアンジェリーナだが、声が裏返つてしまい顔を真つ赤にしながら俯いてしまった。

「はつはつはー、それじゃ あ服は明後日の夕方にも取りに来てくれ。下着の代金もその時に纏めて良いよ。」

「ありがとうございます。」

宗太はユースに礼を言い、アンジェリーナと一緒に店を出て行った。

「まつたく、あの娘も初心なんだから…。」

そう呟くとユースは穏やかな笑みを浮かべて一人を見送るのだった。

「あたしが選んでも良いですかーー？」

ユースの店の近く、大通りに面した古着屋に入るやアンジェリーナが期待に満ちた声で聞いてくる。

ユースに散々煽られたためか、最早アンジエリーナの中では「買いたい物の付き添い」から「デート」に替わってしまっているらしい。

「そうだね、お願ひするよ。」

もつとも、普段から服装に無頓着だった宗太としてはこの申し出を断る理由もない。

好意をありがたく受け取ることにする。

宗太の言葉を聞いたアンジエリーナは、嬉しそうにして店内に所狭しと並んだ衣服を漁りだした。

次々と宗太に似合いそうな服を掲げては小首を傾げている姿はまるで小動物のようで可愛らしい。

「コレなんてどうですか？」

小一時間ほど悩み続けるアンジエリーナを眺めて和んではいるが、選び終わつた服を差し出してきた。

詰め襟姿から決めたのだろうか、麻製と思われる白いワイシャツに

黒のベスト、同じく黒のズボンの二着だった。

「うん、いいね。コレを買おうか。」

アンジエリーナから服を受け取ると代金を支払い店を後にする。

「お皿はどうしたのが？」

腕時計で時間を確認すると一時半を少し過ぎた頃。

昼食を取るには少し遅い時間だらうか。

「中央広場に屋台があると思いますから、そこで買って公園に行きましょー。」

アンジエリーナに促されるまま大通りを歩いて行くと、街の中心部である中央広場に出た。

周りは屋台や露天商が店を広げ、中央にある噴水の辺りでは穏やかな日差しと広場を包む喧騒の中沢山の人々が寛いでいる。

「IJの広場から北西と北東に続いている道が遊歩道で、その中頃に大きな公園があるんですよ。」

アンジエリーナの説明を聞きながら屋台で軽食を購入し、西部の公園へと向かう事にする。

買ったのはナンのような平焼きパンで角煮と野菜を包んだ物で、一つ銅貨五枚だった。

飲み物も一緒に買おうとしたが、公園の屋台で買うべきだと止められた。

何でも、使い捨てのコップとこいつのは無によつて、飲み終わつたら返却しなければならぬらしい。

飲み物を諦め遊歩道を歩くこと凡そ三十分、目的の公園に到着する。

公園の中央には池があり、その周りを石畳の歩道が囲み、至る所に草木が茂っている。

公園は割と広く、中央広場ほどの賑わいは無いが親子連れや恋人同士が思い思いのひと時を過ごしていた。

二人は歩道脇の屋台で飲み物を買つと、近くのベンチに腰を下ろす。

「今日は買い物に付き合つて貰つてありがとね。」

貰つた軽食をかじりながらお礼を言つ。

「い、いえそんな…。あたしもソータさんとお買い物出来て楽しかつたですし…！それにソータさんのお願いなら何時でも…。」

頬を染めて俯きながら答えるアンジョリーナを見て微笑む。

この健氣さは本当に癒される。

残念ながら最後の方は宗太の耳には届かなかつたのだが。

「じゃあ、今度はアンジーの用事に付き合つよ。人手が必要なら何時でも声掛けて。」

「え、良いんですか…！？」

「うふ、今日のお礼も込めてね。」

やはじ自分に付を合わせて一日潰してしまったのだ、それなりの礼はあるべきだわ」と考えた上での提案だった。

(神様あつがといへ……)

アンジエリーナとしては嬉しい事この上ない提案だ。

心の中で神に感謝した。

「あ、そろそろ帰らうこと……。」

たわいも無に話をしながら一時間ほど過ぎたころ、アンジエリーナが呟いた。

「ん、もう時間?」

「あらあらお店の仕込みを手伝って戻らなといけないんですね。」

やつは「アンジエリーナは酷く残念そうだ。

「アンジーちゃん良ければおかみさんに許可貰つてまた来よつか。」

こんな小さな娘ならまだ遊びたい盛りだらうに、それを我慢して親の手伝いを頑張つてゐる。

その健気さに何かしてあげたい そう思つたら自然と口から言葉が出ていた。

「ホントですか!? 約束ですよー!」

途端に満面の笑みを浮かべて喜ぶアンジエリーナだった。

宿に戻るとアンジエリーナと別れ、部屋に戻る。

服の入った紙袋を窓際、ベッドの反対に置かれた机の上に放り、大剣をベッド脇の壁に立て掛けるとベッドに寝転がる。

今日はなかなかに濃い一日だった。

リードには驚かれユースにはからかわれ…、そして叩きのめした傭

兵達にルシフハウと名乗った少女。

（あの娘は無事に連れの人と合流してあの場を離れられたんだろうか…。傭兵の仲間が敵討ちとか来たらイヤだなあ。）

そんな事を考へて、ふと涙に出される。

『すぐにまた逢うことになるじゃね？』

「じつこつ意味なんだ…。また遭つのを確信してみたいたいな言い方だったけど。」

解らないなら考へても仕方の無い事か。

そつ思い田を睨つた。

「ソータさん、夕飯にしませんか？」

ノックの音と共にアンジーリーナの声が聞こえ、田を覚ます。

時計を見ると六時を回った所だった。

「今行くよ。」

そう言ひてベッドから起き上がり伸びをする。

「用意しておきますねー。」

扉の向こうから元気な声が聞こえ、続いてパタパタと廊下を走る音が遠ざかっていった。

宗太も食堂に向かう事にする。

「アンジー、今日はヤケに機嫌が良いじゃねえか！」

「あれか？ついにオトコが出来たんだな？」

「オレア さつとき言ひてた『ソータさん』つてのが怪しこと見たねー。」

「かーっ、オヤジさんも遂に泣く日が来たんだねー。」

階段を降りるとアンジェリーナが酔つた常連客に揉みくちゃにされている光景が飛び込んできた。

「あ、ソータさん、カウンター席にどうぞ！」

宗太を見つけたアンジェリーナは酔つ払い達を軽くあしらいながら宗太を席に案内する。

「何か…大変そうだね。」

「 もひへ、皆酔つぱらつちやつて困つちやいます。」

そつ言つて笑う。

すると、調理場から四十代くらいの男性　　「の宿屋の店主が出てくる。

何時も調理場に居る為宗太は会つのは初めてだつた。

「あ、初めま…。」

宗太の挨拶は包丁がカウンターに突き立てられた音によつて遮られた。

「パ、パパ…！？」

「娘は…、娘は絶対にやらんぞ…。」

驚愕の声を上げるアンジエリーナに構わず、親父さんは低い声で威嚇する。

「何やつてんだい、アンタはつー！」

おかみさんにお盆で頭を叩かれる親父さん。

スペコーンーといつ小氣味よい音が響いた。

「ぐおお…、し、しかしアンジーがこの男に…。」

「ソータさんにヒドい事するパパは嫌い…。」

頭を抑えながらも抗議の声を上げる親父を止める一撃が突き刺さった。

「パパが変な事して」めんなさい…。」

「いや、気にしないよ。」

俯き謝罪するアンジュリーナにそう返す。

力尽きた親父をなんとこいつ、おかみさんに引き摺られ調理場へと消えて行つた。

いつの世も女は強いと実感をせひれる。

食事を終えるとアンジュリーナにタオルを借り、裏の井戸で身体を拭う。

高級宿や金持ちの家ならともかく、一般的な宿や家庭では湯を沸かす手間などの理由から風呂が無いのだとか。

湯を沸かす為に熱を発する道具もあるやうだがやはり高級品だとのじ。

普段は濡れたタオルで身体を拭くか、商業区の公衆浴場とも蒸し風呂らしいに行くのだとか。

お湯を用意すると言われたが、手間をかけさせるのも気が引けるので断つた。

（鉄砲風呂くらいなら作れそうなものなんだがなあ…。金銭的に無理なのか？）

部屋に戻り着替えを済ませると、ベッドに潜り込みそんな事を考えるのだった。

ガチャン

どこの酒場も店舗舞いし、街中がひつそりと寝静まつたころ、宗太はそんな音で目が覚めた。

続いてコツ、コツ、コツと何者かが床を歩く音。

音は宗太の横で止まった。

途端に感じる背筋が寒くなるような殺気。

反射的に身を起こすとドゴツーっとこつ破碎音と共にベッドが砕かれた。

「……流石にバレるか。」

その声に振り向くと、そこには漆黒のドレスに身を包み月明かりに輝く銀の髪を持つ少女 ルシフェラが漆黒の大剣を振り下ろしたままの体勢でこちらを見ていた。

「ル、ルシフェラー？ 何で此処に……。」

「言つたじやろ？『すぐにまた逢つうことになる』と……。」

混乱する宗太を余所に再び大剣を振り下ろすルシフェラ。

かろうじて躱した宗太は、壁に立て掛けっていた大剣を掴み窓から飛び降りた。

背後からは二度目の破碎音。

(一階で良かった…。)

無事着地し、ホッと胸を撫で下ろすと走り出す。

暫く走りつづけると見覚えのある場所、昼間アンジェリーナと来た公園へと辿り着いた。

背後から追つてくる気配が無いのを確認して漸く足を止める。

「傭兵ならまだ解るが、何でルシフェラに襲われたんだ?もしかして昼間置いてつた事根に持つてたとか…?」

「戯け、そんな訳あるまい。それに傭兵共なら始末しておいた故安心するがよい。」

宗太の誰に言つでもないボヤきに対し、そんな返答が前から聞こえて来た。

驚いて前を見ると、いつの間に回りこんだのかルシフェラが涼しい顔で佇んでいた。

「いつの間に！？ってか、昼間の事が関係ないなら一体何で…？」

「昼間の事がまったく関係ない無いという訳では無いが…。まだ解らぬのか？」

そう言つたルシフェラが何事か呟くと、側頭部から角が、背中から黒い羽、腰からは黒い槍のような尻尾が生えた。

「コレで解つたじゃね？！」

そう言いながら手にした大剣で切りかかる。

「え、角？羽？ってうわあ！？」

咄嗟に背中の大剣を掴み防御するも、ルシフェラの小さな身体から繰り出されたとは思えない斬撃の威力の前に吹き飛ばされる。

地面を転がり体勢を整えるも、先程の一撃で剣は曲がってしまった
いた。

「ほひ…、まさか只の剣でこの朔夜サクヤの一撃を受けて無事とは驚いた。」

宗太はルシフュラの斬撃の威力に驚いていたのだが、ルシフュラは
別の事に驚いている様子だ。

「只のつて…、その剣は普通と違うのか？」

「左様、この剣は魔劍月夜シキヨ。」

歴代の魔王に受け継がれし魔王剣じや。」

「魔剣？魔王？」

ルシフュラの説明も予備知識の無い宗太には全く理解出来なかつた。

「そり、そしてこの剣を持つ者こそオヌシの倒すべき相手じや！そ
れくらいは理解しておるつ？のつ、勇者よー。」

言葉と同時に、大きな踏み込みと共に繰り出される斬撃の嵐を避け続ける。

漆黒の刃が夜の闇に溶け込んで見え難い。

感で何とか回避に成功している状態だ。

「ふむ、良く避ける。ならばコソなりビリジヤ？魔劍月夜・纖月！」

ルシフニアの叫びと共に漆黒の大剣がその姿を変じる。

そして漆黒の大鎌が姿を現した。

「形が変わった！？」

「これこそが魔劍月夜、複数の武器に形や能力すら変じる魔の剣じやー！」

大鎌の斬撃を大剣で防ぐも、急な間合いの変化と刃の形状の為か刃先が頬を掠める。

たまらずバックステップで距離を取るが、ルシフロラは追つ事はせず、その場で鎌を振るつ。

(アレは拙い……！)

本能が警鐘を鳴らす。

考えるより先に横へ回避する。

直後、石置が幾本もの線を引き抉れていた。

「どうした、避けてばかりだと儂は倒せぬぞーー？」

「コッちにゃ闘う理由が無いってのーー！」

あまりの理不尽さに思わず怒鳴ってしまった。

「オヌシを召喚した王から説明されたじやろ？魔王、即ちこの儂を倒せと。その為にこの都市に来たんじゃろうが。」

「王なんか知るかー俺が目覚めたのは西の森でこの街に来たのも偶

然だ！それに可愛い女の子に傷なんかつけられるか……」

一気にまくし立て肩で息をする。

ルシフェラはとこうとポカソと口を開けていた。

「 ク、ククク…ハハハハハツ！召喚された先がイーヴルースの森じゃと！？しかも歴代最強と言われ魔族からも恐れられるこの儂に『可愛い』などと申すか…。ククツ、オヌシは想像以上に面白い男じゃのう。」

ルシフェラは楽しそうに続ける。

「しかし、オヌシが儂を倒さねば人類が危機に立たされるのじゃぞ？」

「それも嫌だな…。」

若干悩む様子で答える宗太。

「じゃあ、ならば儂を倒して…。」

「だからそれは嫌だつて。」

ルシフェラは続けるも、これには言葉を遮り即答する。

「オヌシ、我が儘な奴じゃのう。」

呆れた表情で言葉を吐き出すルシフェラ。

「しかし、ふむ……つむ、決めた！」

続けて何事が考え込む仕草をしたと思うと徐に顔を上げて言い放つ。

「オヌシ、儂のモノになれ……！」

「……はあー？」

ルシフェラの突拍子もない言葉に今度は宗太が呆然となる。

「儂はオヌシの願いを聞き届けよう。今後の人間共の国への侵攻は中止する。そうなれば人間共も脅かされずに済むし、オヌシも儂と

戦わずに済むじゃね? 代わりにオヌシも儂の願いを聞け、といつ
事じや。」

説明を続けるルシフュラに混乱しながらもそれを聞いている宗太。

「で、その願いってのが…。」

「儂のモノになり儂を楽しませり、とこう事じや。」

「……はあ。」

満面の笑みを浮かべるルシフュラに対し、宗太は溜め息しか出なか
つた。

「…また勝手にその様な事を決めて宜しいのですか?」

どこか呆れと諦めが入り混じったような声と共に、薄紫の髪の少女
がルシフュラの横に現れる。

ルシフュラと同じく一本の角と羽、尻尾が生えており、清楚な侍女
服にその身を包んでいる。

「つかつーーー？」

突如現れたメイドさんに驚愕の声を上げる宗太。

「紹介しよう、こ奴が脇間にあつた連れ、儂の侍女のリースじや。」

「お初にお目にかかります。ルシフュラ様に仕えておりますリースリット・ノエルと申します。リースとお呼び下さい。以後お見知り置きを。」

優雅な仕草で挨拶をするリースリット。

「あ、どうも」「寧に。ソウタ・アカツキと言います……って、そうじやなくて！」

つられて挨拶を返すが思い出したかの様にツツ「ハミを入れる。

ルシフュラとリースリットは揃つて小首を傾げていた。

「俺には突然現れたよに見えたんだけど、どうなつてるの？」

「あれは『シャドウ・マービング』といって、影から影へと移動出来る闇の上級転移術じゃ。儂がオヌシの後を追つてこの公園に来たのもこの魔術を使ってじやの。」

「影から影へつて、壁とか障害物は…？」

ルシフュラの説明を聞いて浮かんだ疑問を訊ねる。

「光があつと無かると、闇があるなら行けぬ所は無い。無論結界の中でもじや。但し、色々と発動が難しく扱える者は少ないがの。」

「それじゃあ窓を破つて侵入する必要は無かつたんじやあ…。」

「何を言つ、賊は窓を破つて侵入する必要は無かつたんじやあ…？」

そもそも当然と言わんばかりのルシフュラにガックリと膝を着く。

その様子をリースリットが同情を多分に含んだ表情で見ていた。

（ああ、この人も苦労してるんだうつな……。）

リースリストに親近感を覚えた宗太だった。

「さて、儂等は少し国に戻るかの。」

そんな宗太を余所にルシフェラが言つ。

「何か予定があつたのか？」

「うむ、侵攻準備の取り止めなどをせねばならんのでな。では、また後程会おう。」

その言葉と共に二人は影に溶けて消えていった。

一人取り残された宗太は溜め息を吐き宿に戻る事にする。

夜中に叩き起こされてそのまま戦闘。

折れ曲がった大剣の修理には一体幾らかかるのだろうか……。

「お帰り。」

足取りも重く宿に戻った宗太をおかみさんが笑顔で迎え入れた。

「アンタの部屋から大きな物音がしたと思つて部屋に行つたら、アンタは居ないし部屋は滅茶苦茶だし…。どこのに行つてたんだい？」

身体からはもの凄いプレッシャーを撒き散らしている。

正直、魔王のルシフェラより恐い。

「…えっと、寝てたら賊らしい人に襲われまして…。」

ルシフェラな訳だが正直に言つ訳にもいかず、ボカして答える。

「で、賊は？」

「…逃げられました。」

折れ曲がった大剣や頬の切り傷などから納得してくれたのだらう。

「…ハア、仕方ないね。でも壊れた備品なんかは弁償してもいいつよ？」

「…幾ら程でしじうつ？」

恐る恐る訊ねると、おかみさんは少し悩む。

「うーん、職人に聞かなきゃ判んないけど、ベッドに机、窓と壁、床で…大体4万エリーくらいになつまうかねえ。」

現在全財産が26・360エリー。

「…後払いでもいいですか？」

ガックリと膝を着きながら提案する。

「それで良いよ、後で依頼でもこなして返しておくれ。とりあえず別の部屋を用意しといたからそつちに移つて休みな。」

おかみさんも金が無いのを理解してくれたのだひつ。

苦笑しながら部屋の鍵を渡すと、自分の部屋へと戻つていった。

宗太は礼を述べてから荷物を新しい部屋に移し、再び眠つていつくのへりにいたつた。

「……ん。」

窓から差し込む朝の日差しを受けて意識が浮上する。

「んー、まだ眠いや……。」

昨夜は夜遅くに一躍動きたため、疲れが抜けきつていない。

傍らの抱き枕を抱いて一度寝する事にする。

人肌の温もりが気持ち良い。

(…ん、抱き枕?)

ふと脳裏に浮かぶ疑問。

ここに来たのは着の身着のまま、買い物も服と剣しか買っていない。

当然、宿に抱き枕なんて置かれてなかつた筈。

意識が急激に覚醒していく。

「のわあああああつーー！」

抱き枕だと思ったのはいつの間にかベッドに潜り込んでいたルシフ
エラだった。

「…んむ、何じや朝つぱらから騒々しい。」

田が覚めたルシフューラが瞼を擦りながら不満そうに呟く。

「ビ、ビビビビして……！」

「ソータ様、寝起きはお静かに願えますか？」

宗太の疑問の声は背後から聞こえた声によつて止められる。

恐る恐る視線を背後に移すと宗太に寄り添つて横になるリース
リットが居た。

「リ、リース！？何故ここに……？」

「それは……。」

リースが答えようとしたとき、ドタドタと廊下を走る音と共に勢い
良く扉が開け放たれた。

「ソータさん、どうかしましたか！？…ってルシフューラさん？」

宗太の叫びを聞きつけて来たのであらうアンジエリーナだった。

「ア、アンジー？」これはその……。」

「おお、オヌシは昨日の……。」

「ソータさんが、ルシフェラさんと美人のお姉さんと……きゅうつ。

」

宗太とベッドに寝ていたルシフェラとリースリットの二人を認めた
アンジェリーナが顔を真っ赤にして倒れてしまった。

「ちょっ！アンジー！」

慌てて駆け寄り抱き起こす宗太。

アンジェリーナは目を回して気絶していた。

第5話 続・買い物と魔王襲来！（後書き）

5話目でやつとタイトルの内容を出せました。
さてこれからどうじよつ。

実はこの小説、あらすじ文だけ思い付いた状態で書き始めたのでプロットとか無かつたりします。o_r_n

設定とかも書きながらその都度：（森とか街、公園、人物その他諸々）。

とつあえずアンジエリーナをヒロインに格上げしてハーレム目指すか…。

その場合、このまま初心でちょっと積極的なのと、ニースに煽られてかなり積極的になるのとどちらが良いのでしょうか？

こんな行き当たりばつたりな小説ですが、お気に入り登録して下さる方もいて嬉しい限りです。

これを励みにこれからも続きを書いていこうと思いますので、どうか宜しくお願ひします。

第6話 勇者の説明と依頼受注

「それで、何で俺のベッドに潜り込んでたんだ？国に戻るとか言ってなかつたっけ？」

アンジェリーナが目を覚ました後、必死に事情を説明して納得して貰つた宗太達は食堂で朝食を取つていた。

正直、リースリットが上手く口裏を合わせてくれて助かった。

「うむ、国には戻つたぞ。侵攻の中止を指示した後そのままオヌシの元に転移したんじやが、寝床が無くての。」

「後処理を命じられた大臣達は今頃泣いていると思いますが…。それで私達も睡眠を取る為に、ルシフュラ様の『ご提案で』一緒にさせて頂きました。」

ルシフュラの説明に一言突つ込んでからリースリットが説明を引き継いだ。

主人に対してツツコミ入れる侍女というのもどうかと思うが、ルシフュラも気にしていない様子なので問題無いのだろう。

「これも信頼の表れといつものなのだろうか。しかし……。

（やつぱり他の人達も泣かされてるのか……。）

自分の先行きが不安になった宗太だった。

「ところで、タベ言ってた勇者とか魔王って何なんだ？」

氣を取り直してタベから氣になっていた事を質問してみる。

「む？…ああそつか、オヌシはイーヴルースの森で目覚めたとか言うておったかの。」

「どうやらルシフュラもその事を思い出したようだ。

「では、魔王と勇者という関係の成り立ちから説明するとしようかの。もつともこれは魔族に伝わる文献によるモノじやが……。」

ルシフュラは一言加えると、お茶を一口飲み語り出す。

「嘗てこの世界には闇の魔力属性を持つ魔族ともう一つ、光の魔力

属性を持つ神族という存在がおつたのじや。

魔族と共に上位種族と呼ばれ、魔族と唯一対等な力を持つ種族じやつたらしい。

しかし、何時しか神族はその数を減らし、上位種族は魔族のみとなつてしまつた。』

ルシフェラは一度言葉を区切り続ける。

「そして時は流れ、繁殖力の旺盛な人間がその数を増やした頃じや。力のある人間達によつて国が生まれ、争いが増加した。

魔族は当初これら争いには非干渉の立場を貫いておつたそうじやが、遂に奴らは魔族の暮らす場所まで侵略してくるようになつた。当然、そんな事は認められる筈も無い。

侵略には抵抗し、何時しか魔族を纏める者を魔王、そして魔族の暮らす地域を魔族の王国、魔王国と呼ばれるようになつたのじや。』

お茶を飲み、一息つくるルシフェラの説明をリースリストが引き継いだ。

「魔王国による抵抗が激しくなると、困るのは人間でした。

領土は欲しいが下位種族である人間では上位種族である魔族にはどう足掻いても適わない。

そこで、魔族に対する手段として当時考えられたのが『どこかに消えた神族を呼ぶ』という事でした。

そうして、光属性を持つ者を無作為に呼ぶ大規模な召喚魔法陣が組まれ、勇者がこの世界へ呼び出されるようになりました。

結果として『神族を呼ぶ』という目論見は失敗したものの、人間は勇者を担ぎ上げ魔族に対抗する力を得たのです。

その後も勇者が死ねば新たな勇者が呼ばれ、召喚陣の改良が行われながら一進一退の攻防戦が繰り広げられ、何時からか『魔族は世界を滅ぼす存在』、『勇者は世界を救う存在』と尊される様になり現在に至ります。

最も、これは当時の王侯貴族達が自分達の侵略を正当化するために流した噂とも言われていますが、

リースリットはお茶を飲むと口を閉ざす。

「神族とか光属性とかは良く解らない。けど……。

「勇者とか良いながら、まるで体の良い使い捨ての道具じゃないか……。」

宗太にはそう言つ事しか出来なかつた。

「ハハハッ、使い捨ての道具か、言い得て妙じやの。人間の欲望が生み出した偶像の英雄じや。」

ルシフェラは宗太の言い回しが気に入ったのか楽しそうに笑う。

「そして、先代魔王 儂の父上を倒した勇者を儂が倒し、新たな勇者として呼ばれたのがオヌシという訳じゃ。」

「何で俺が勇者だつて…。それに入城時に属性を調べられたら風と土だつて言われたぞ?」

宗太にとつては当然の疑問だらう。

「オヌシが目覚めたというイーヴルニスの森は大半が魔王国領での、さらに魔物の巣窟とあって殆どの者が近寄らん。更に、国に戻つて得た情報じやが…四日前この国で勇者召喚の儀式が行われたそうじや。結果は失敗。それにオヌシからは僅かじやが光の属性を感じられるのじや。」

そういうと側を通つたアンジェリーナにお茶のおかわりを頼む。

お茶を受け取りアンジェリーナが仕事に戻るのを確認してから話を続ける。

「勇者は皆光の魔力属性を持つて召喚される。それが元々の力なんか神代の神々の加護なのは、諸説あつてはつきり解つてはおらんのじやがな。オヌシの属性が間違われたのは、光の属性が覚醒しきつて無い所為じやろ?」

「魔力って覚醒とかで現れるものなの？判別する水晶は？」

「判別の魔導具は要はその者の魔力の表面をチラシと見るだけのモノじゃ。

魔力とは本人の属性と同質、若しくは相反する魔力を流し込み、体内で存在を理解して初めて魔術として使えるようになるのじゃ。故に魔術師を目指す人間は魔術師ギルドへ加盟して目覚めさせるのじゃよ。

あそこなら基本四属性は揃つておるし、引き続き魔術を学ぶ事も出来るからの。」

魔術師ギルドなるものまであるとは知らなかつた。

「じゃあ、俺も魔術師ギルドに入つて学べば良いのか？旅に出るなら覚えておきたいし。てか人間以外はどうしてるんだ？」

宗太の質問にルシフェラは手をヒラヒラ振りながら答える。

「あそこに入るのは止めておくがよい。現在光属性を唯一目覚めさせられるのは闇属性だけじゃし、勇者とバレれば王城に強制連行で魔族と戦わされるのは確定じゃ。人間以外は大抵種族内で子供に教えていく事になるの。」

それを聞いてイヤそうな顔をする宗太。

「それは…、勘弁だな。それじゃあ今までの勇者はどうやって覚醒させたんだ？てか、俺が現れないと新しい勇者が召喚されるんじゃ？」

「大昔に闇属性の魔力を封じ込められた魔力石があるのじゃ。その現存する最後の一つをこの国が保持しているのじゃよ。複数の勇者については召喚出来ぬようじや。世界が存在を許さぬらしい。」

ま、幾ら来ようが物の数ではないがのと言いながら笑う。

「旅に出るなら儂らが魔術を教えてやろ。良い暇つぶしにもなるじゃらうからの。」

「ソータさん旅に出かけますか！？」

ルシフェラがお茶を飲み干し立ち上がると、話を聞いていたのかアングリーナが詰め寄つて来た。

「…え？「うん、何時かはそつなるかな…と。」

宗太が勢いに圧されてそう答えると、アンジヒーラーは何事か考え出した。

「ん、その時はあたしも連れてって下さい。」

暫く悩んでいたと思つたら、顔を赤くしながらそうお願いしてきた。

調理場からは皿の割れる音とおかみさんの怒鳴り声が聞こえてきた
のだが、聞こえなかつた事にする。

「しかし、旅は危険ですよ？何の力も無い子供のお守りをしながら
出来るモノではありません。」

宗太がどう説得しようかと悩んでいた、リースリストが助け舟を
出してくれた。

「な、なあたしにも魔術を教えて下さー。」

尚も食い下がるアンジヒーラーに対してリースリストが言葉を続け
よつとした時。

「つむ、良じじやハハ。」

ルシフーラの一言が全てを台無しにした。

思わずテーブルに突つ伏す宗太とリースリットを尻目に、はしゃぐアンジエリーナと得意気に頷くるルシフーラ。

宗太は目から汗が流れそうになるのを感じた。

断じて涙では無い。

「ではアンジーの参加も決まった所で早速講義を始めるとするかの。

」

「…あ、今からは無理だ。ちょっとギルドで依頼受けて金稼がないと。」

宗太としては思い出したくない現実ではあるが、早急にビビにかないといけない問題があつたのだった。

「…？何故じや？」

意気揚々と歩き出したルシフュラだが、宗太の一言で歩みを止め振り返る。

「…壊れたベッドとかの弁償と折れた剣の修理代。」

「「……あ。」

ビリヤーラルシフュラとコースリットも思い出したようだった。

話し合いの結果、結局魔術はギルドの依頼をこなしながら教えて貢う事になった。

宿泊客ではない二人分の朝食と、四人分の弁当代は宗太が払う事になつたのは別の話。

といふか、外出許可を出す代わりにアンジェリーナの弁当代も請求する辺りおかみさんもちやつかりしている。

「先ずは儂らもギルドに登録せねば。」

「え？ 登録には都市発行の証明書が必要らしいけど持つてるの？」

何気ない会話をしながらギルドへ向かう四人。

「つむ、ちゃんと城門で審査を通してから都市に入つておつたから
の。ホレ。」

そつと滞在許可証を出すルシフェラ。

審査では魔力属性も調べられるんじゃ無かつたのだろうか…。

「我々程にもなれば簡易な判別魔導具など簡単にごまかせます。さ
らに、魔族には角等もご覧の通り隠す魔法も伝わっています。」

リースリストが小声で教えてくれた。

笊過ぎるぞ入城審査。

モーリスさんに教えてあげた方が良いのだろうかとい考へてしま
つた。

「儂ら三人、ギルドに登録したいのじゃが。」

ギルドに着くとルシフェラが受付に行き登録を始める。

「アンジーも登録するの？」

「はい！ママも冒険者だつたそりで、話したら市民証を出してくれました。」

そつと一枚の紙を取り出すと受付に渡した。

元冒険者とは、どうりで怒つたら恐い訳だ。

リースリットもそれに続く。

「ルシフェラ・レストール様、アンジェリーナ・メナード様、リースリット・ノエル様ですね。確認のサインを…。それでは三名様で登録料6000ヒリーになります。」

「ソータ（さん）（様）」「ソータ（さん）（様）」

何故か三人揃つてソータを見る。

宗太はうなだれながら角金貸を出す。

弁償の前にどんどん金が減つていてる気がするも、小心者の宗太には言い出せなかつた。

ギルドの説明を断ると、カードが発行されるまでの時間に依頼を確認しておぐ。

「えーと…、南部の森で薬草採取、北部の山脈が薬草と鉱石採取と魔物討伐、商団の護衛依頼とかもあるのか。」

「しかし、『』の依頼はどれも往復で数日はかかってしまいますね。」

リースリストが教えてくれる。

世間知らずな宗太にとつてこの優しさはありがたい限りだ。

「うーん、それは困るな…。明日の夕方にはコニスさんと『』に行かないといけないし。」

「『』まで受けられるなら、『』なんかどうじゅ？『』西の森周辺の草

原でマッド・ハウンド10体の討伐』犬つこう10体で4万エリー
じや。素材も入れれば金貨一枚にはなるぞ。』

ルシフェラが一枚の依頼書を剥がして持つてくれる。

「マッド・ハウンドって?」

「大型の犬のような魔獸です。性格は凶暴で単体ではランクC程度
ですが群れで行動する為連携して襲つてくるのが特徴ですね。素材
として利用出来る部位は皮くらいですが、割と良質の魔素石が回収
出来ます。」

魔素石といつのは魔獸が体内に魔力を溜めて置く為の、宝石の原石
に似た器官だそうだ。

コレを精製した後、魔術を併用して鍊成する事で様々な魔術媒体や
魔導具として利用出来るらしい。

この依頼を受けようと受付に向かおうとした時だった。

「オイオイ、嬢ちゃん。新米がそんな依頼受けるのかよ。」

「そつちの兄ちゃんなんか折れ曲がった剣背負つてんじゃねえか。」

「てか、ここはガキの遊び場じゃねえんだぞ？」

「紫髪の姉ちゃんなら俺達が手取り足取りじっくり教えてやるつか？」

「いやいや、銀髪のガキもなかなか…。」

「お前そっちの趣味かよ！」

「ギャハハハハッ！！」

ギルド内の一角、テーブルの一つに陣取った冒険者パーティーらしい一団から冷やかしの声が上がった。

「一体どこのヤンキーだ。

一日連続でガラの悪い人達との遭遇である。

治安が良いと言つ話は一体どこの行ったのだろうか…。

ルシフェラはそんな冷やかしなどまったく気にする事なく受付に向かう。

宗太も怯えているアンジェリーナの肩に手を置き、落ち着かせるようにながら受付へと歩き出す。

「オイ、無視すんなっての！」

無視されたのが瘤に触ったのか、冒険者の一人が一番後ろを歩いていたリースリットの肩に手をかけた。

瞬間、男はリースリットに腕を掴まれ投げられる。

宙に浮いた後、背中から床に叩きつけられ、更に雷の魔術のオマケまで貰った男は白眼を剥いて気絶していた。

（えげつない…。）

宗太は投げられる前に鳩尾に肘まで入れられていた男に心の中で黙祷を捧げながら、この人は絶対に怒らせてはいけないと本能で理解した。

「て、テメエ……！」

仲間をやられて逆上した冒險者達^{ヤンキー}が一斉に襲い掛かるが、実力差など周りから見ても一目瞭然。

瞬殺された男達は部屋の隅に積み重ねられる事になった。

余談であるが、この件を目撃していた一部の冒險者及びギルド職員の間で『紫電の侍女^{メイド}』と呼ばれ、本人の知らぬ所で密かに人気を博する事となつたのだった。

第6話 勇者の説明と依頼受注（後書き）

全体は短いのに説明が長つたらしくて「めんなさい。

次回は魔法の説明になる予定…。

それと次話を投稿したら宗太、ルシフェラ、リースリット、アンジ
エリーナのキャラ紹介でも投稿する予定です。

第7話 魔術の説明と魔導書と。ですよー。(前書き)

サブタイアンジョリーナVer.

アンジョリーナ中心の話といつ訳ではありません。

第7話 魔術の説明と魔導書と。ですよー

「「」の依頼を受けよ。」

ルシフエラは背後の騒動には一切目もくれず受付の前まで歩み寄ると受付嬢に依頼書を渡す。

「えつ！？…あ、はい、えつとルシフエラ様ですね。」ちらがギルドカードになります。」

リースリストの無双状態を呆然としながら眺めていた受付嬢だったが、ルシフエラに声を掛けられ我に返ると業務に戻った。

同時に冒険者を止めようとして近付いたが、結局一何も出来ないまま眺めていた（役に立たなかつた）男性職員や他の冒険者達も本来の目的に戻つて行く。

「依頼の内容は…。…申し訳ありませんが、ルシフエラ様のランクは「です」のでコチラの依頼を受注する事は出来ません。」

依頼書を確認した受付嬢がそう言つて頭を下げる。

「いや、受注するのはそこにいるソータじゃ。確かランクの高い者がメンバーにいれば、そのランクで受注する事が出来るのじゃろう？」

そう訊ねてから宗太を呼ぶ。

宗太は促されるまま受付に行くとカードを提示した。

「はい、それでしたら可能です。カードを拝見させていただきます……、ランクDのソータ・アカツキ様……つてまさかあのウワサのソータ様ですか！？」

受付嬢はルシフュラの質問に答えた後で宗太のギルドカードに目を通すや否や、いきなり声を上げて驚愕の表情で宗太を上から下まで観察するように見る。

途端に辺りからざわめきが聞こえてくる。

一体どんなウワサが流れているのだろうか。

何故か碌でもないモノの様な気しかしない。

正直言つて知りたくない。

「ほほう、どんなウワサなのじゃ？」

宗太の内心など知る由もなく、受付嬢の言い方に興味を覚えたたるシフエラが訊ねる。

「え、えっと……私は人伝に聞いただけなので……。怒らないで下さいね？」

「良いからさつさと話さぬか！」

と、前置きをしてから上田使いで宗太を見てくる受付嬢に、焦れたルシフエラが先を促した。

「は、はい！えっと……私が聞いたウワサは曰わくロングホーン・ボアを一人で持ち上げる怪力の持ち主である、曰わく実は一子相伝の暗殺拳の使い手でその修行の為に入ったイーヴルニスの森でロングホーン・ボアを素手で屠った、曰わく地面を殴つて地震を止めた……、というモノです。」

頭が痛くなつてきた……。

恐らくロングホーン・ボアを持ち上げていた事に尾ひれが付いたのだろう、…が。

「暗殺拳云々は絶対リードさんだ…！」

妙な確信を持つて理解する宗太だった。

「アハハハハハハツ！ソータ、オヌシ一体何時から人間を辞めておつたのじゃ！ハハハハハツ、ヒー…、ヒー…。」

後ろでは目尻に涙を溜めて笑い転げるルシフェラと、宗太とルシフェラを交互に見やりながらオロオロしてゐるアンジェリーナ。

リースリストまで顔を俯かせ、肩を震わせていた。

「はあ…、取り敢えず暗殺拳も地震を止めたつていうのもウソですから。」

誤解を解くために訂正しておく。

世紀末覇者にも地上最強の生物にもなつた覚えは無い。

「じゃが、ロングホーン・ボアを素手で屠つて持ち上げたところは本当なのじゃな？」

「……」

誤解を狙つてワザと曖昧に訂正したのに余計な事を。

「と、とにかく、その依頼を受注します！」

言葉に詰まる宗太を見かねて、話の流れを変えようとアンジェリー
ナが受付嬢に言つ。

「あ、はい。それでは西の森周辺の草原で目撃されたマッド・ハウ
ンド一〇体の討伐で、期間は三日間になりますが宜しいでしょうか
？」

「はい。」

受付嬢の確認に頷く。

「愚昧ました。それではお気をつけていらっしゃませ。」

アンジエーナとリースリットもカードを受け取りギルドを後にする。

「やう言えば、ルシフーラの苗字ついてレストールついて書つただな。アンジーの苗字も始めて聞いた。」

ギルドの登録になつて初めてルシフーラとアンジエーナの本名を聞いた気がする。

「むへ……ああ、やう言えばちやんと名乗つておらんかつたか。儂の名はルシフーラ・ヒメイン・レスト・ローディアス。魔王國正式にはローディアス魔王國の王じや。本名では色々と面倒事が起るやも知れぬのでな。」

どうやら問題を避けるために偽名を使つてていたようだ。

「やうへ、お前なーアンジーが聞いて……。」

名乗つてくれるのは嬉しいが魔王といつのがバレたら拙いんじやなかろうか。

「別に問題無かる。じつやう宿での会話にも聞き耳を立てていたよ、じゅじゅしの。」

そつとアンジェリーナを見る。

「えつ、そつなの！？」

「…あ、ごめんなさい。ルシフェラさんが魔王様で、ソータさんが実は勇者様だつて事とか…、聞いちやいました…。」

申し訳無をそつに肩を窄めるアンジェリーナ。

「いや、俺としては他言しないつて約束してくれるなら問題無いけど…。魔族つて人間からは恐れられてるんじゃないの？」

「はい、約束します！それに、人から聞いてた話だと恐い人達だつて思つてたんですけど、ルシフェラさんもリースさんも良い人ですしづ。」

だから他の人には内緒にしますと言つてこやかな笑みを見せるアンジェリーナ。

「つむ、物分かりの良い人間は好ましいの。」

セツの言つたルシフーラとコースリストもどこか嬉しそうに微笑む。

「アンジー？ こんな所に何の用だ？」

外出手続きの為に西門の詰め所に寄ると、勤務中らしくロイドがアンジーリーナに話し掛けてきた。

「あ、お兄ちゃん。」

「お兄ちゃん！？」

衝撃の事実だ。

まさかロイドとアンジーリーナが兄妹だつたとは。

「ん？ ああ、アンタはこの前の。何でアンジーと一緒に西門なんだ？」

宗太に気付いたロイドが訊ねてくる。

「ソータさんはウチのお客さんなの。ギルドの依頼でイーヴルースの森の方に行くから手続きお願ひ。」

宗太の代わりにアンジェリーナが答えると、ギルドカードを提示する。

宗太達もそれに続く。

「ちよつ、ちよつと待て！ 何でお前が冒険者ギルドに登録してんだ！？ 父さん達は知ってるのか？」

まさかまだ十歳の妹が冒険者になつていいとは思わなかつたのだろう。

カードを確認したロイドが物凄く慌ててくる。

「ちやんとママから市民証を貰つて登録したんだよ。ほら、解つたならちやんとお仕事しないと…。」

「いや、しかし…。」

尚も食い下がるつとするロイドにアンジエリーナは追い討ちをかける。

「今日はソータさんに譲つて貰つから大丈夫！お仕事サボつてたつてママに言つちゃうよ？」

「…はあ、解つたよ。依頼書を見せてくれ。」

がつくりと肩を落とすロイドに宗太は依頼書を見せる。

「…大変、ですね。」

「ははは…。妹を頼むよ…。」

慰めの言葉をかける宗太に乾いた笑いで返すと、依頼書と一枚の紙を宗太に渡す。

「コレは…？」

「ん？ ギルドで説明されなかつたか？ 通行書だ。
戻ってきた時に衛兵に返せば通行税が免除される。

冒険者、ギルドに登録してれば通行税は幾らか安くなるんだが、もしどの街に行くなら護衛依頼を受ければ通行税分安く済むぞ。尤も目的の街までの護衛依頼が見つかるかは運次第だがな。」

「そうなんですか…。」

宗太は登録した時の事を思い返すもそこまでは説明されていなかった。

といつか書き忘れ…ゲフンゲフン。

「ありがとうございます。」

四人はそれぞれロイドに礼を言って門を潜り、イーヴルースの森へと向かう。

「では、時間の節約のためにも魔術については歩きながら説明するとするかの。」

森までは徒歩で一時間以上かかるてしまう。

無駄に時間を浪費する事も無いだろう。

宗太とアンジェリーナはルシフェラに頷いて答えると説明を待つ。

「全ての生物は多い少ないの差はあれど、身体の内に魔力を持つておる。

コレは特殊な魔導具を使えば別じやが、普通は目に見える事は無い無色透明な力じや。

魔術とは、この魔力を己の適性を持つ属性に変化させ、呪文の詠唱と魔術陣の形成により指向性を持たせて世界に現象として顕現させる術の事を言う。

現象の規模が小さいモノなら少量の魔力で済むが、規模が大きくなるに従つて世界の拒絶を回避する為に消費魔力も多くなつていいくのじや。」

「世界の拒絶つて存在を許さないつてヤツか？それにしても呪文つて全部覚えるのは大変そうだな。それに魔術陣の形成つて一々地面に描くのか？戦争に参加するなら描いてる内にやられちゃいそうだけど。」

流石に戦いの最中に長時間立ち止まつていては恰好の的になつてしまつ。

ルシフェラはそんな宗太の質問に笑つて答える。

「つむ、一説では世界のバランスを崩さぬ為の修正とも言われておる。

呪文といつのは魔力の指向性を個人が明確に意識するためのモノじや。

別にこの魔術にはこの呪文、と決められておる訳ではない。

魔術陣については、個人で行使する魔術は放出される魔力によって形成されるので地面に描く必要は無い。

但し、魔力不足で複数人でないと行使出来ない様な大規模魔術では、認識の齟齬をきたさぬよう共通の呪文と物に描かれた陣を使うがの。

それも戦争では陣が描かれた厚手の布等を広げて行うのが普通じやな。」

「どうやら長時間立ち止まって描く必要は無いらしい。

それについても、持ち運びの出来る魔術陣とは…。

「属性とは基本四属性が火・水・風・土、そして特殊一属性が光と闇じや。

特殊二属性は神族と魔族のみが持つ属性じやな。

更に基本四属性の内、複数属性持ちの者が使える複合属性というものがある。

コレは火と風で雷、水と風で氷、火と土で金、水と土で木となる。複合属性は魔力の消費量が基本属性より多い為、人間では余り使える者はおらんの。」

「属性って人によつて数とか変わつてくるんですか？」

質問したのはアンジェリーナだ。

ルシフェラは満足そうに頷くと答える。

「うむ、良い質問じゃ。属性は種族によつて大体の傾向があるが、
基本的には人それぞれじゃ。

複数持つ者もおれば一つしかない者もある。

例えば、魔族でも儂は闇の他に基本四属性全てを持つておるし、リ
ースは闇・火・水・風の四つ。

また闇と基本属性一つの計二つしか無い者もあるのじや。」

「傾向つて言つのは？」

「魔族であれば皆闇属性を持つ。

エルフであれば風、ドワーフならば土、獣人は比較的風が出やすい
といつた感じじゃの。

人間と鬼人族、龍族はこれといった偏りは無いが、龍族は神龍と呼
ばれる長以外は一つの属性しか持たぬ。

基本四属性の内大抵の者が一つの属性、才能のある者で二属性、三
属性以上を持つ者は奇跡と言つて良いの。」

三つ持つリースリストが奇跡なら四つのルシフェラは一体何なのだ

るつ。

「持つてる属性以外は使えないんですか？パパもママも火を起こす時は赤い石の付いた棒を使った魔術でやつてましたけど。」

宗太が考えを脱線させていると、アンジェリーナが質問する。

「属性が違う魔術も魔導具の補助があれば可能じゃ。しかし、普通よりも多くの魔力が必要になるため大魔術は難しくなる。ま、種火を起こす程度なら一般人でも可能じゃよ。…と、こちらで良いか。」

道も半ばに差し掛かった頃、ルシフェラが街道から外れて歩き出す。

宗太達もそれについて行く。

「何でこんな所に？」

「無いとは思うが、街道近くでは人に見られる可能性もあるからのか。さて、リース、城から判別の魔導具を持ってきてくれぬか。」

「畏まりました。」

街道からも程良く離れた場所で止まると、リースリストに指示を出す。

リースリストは一礼すると影に沈んで消えた。

「え、えつー…どうなってるんですかー…？」

シャドウ・ムービングを初めて見たアンジェリーナはかなり驚いている。

「さうか、アンジーは見るのは初めてじゃったの。あれは『シャドウ・ムービング』という闇属性の転位魔術じゃ。影から影へと移動する事が出来る。」

ルシフュラの説明にアンジェリーナはしきりに感心していた。

「お待たせしました。」

そんな話をしていると、リースリストが台座に乗つた一つの水晶玉を持つてルシフュラの影から現れる。

「それは？」

「オヌシも入城時の審査で使つた判別の魔導具の上位版といった所かの。右の玉が属性の判別、左の玉が魔力量の計測じや。それぞれ台座の水晶板に結果が表れる。」

見るとそれの台座に縦三センチメートル、横六センチメートル程の薄い透明な板が付いている。

「ではソータから測るとするかの。左右の手のひらをそれぞれ乗せるが良い。」

宗太が興味深そうに眺めていると、ルシフュラに促された。

宗太は言われた通りに水晶玉に手を乗せる。

「属性が光・火・水・風・土。魔力量が… 2800万じゃと…？」

水晶板を確認していたルシフュラが、信じられないものを見たといつた風に驚愕の叫びを上げる。

宗太には驚きの理由が解らないのだが。

「…そ、それってそんなに凄いの？」

「先代の魔王様が約230万、同じく先代勇者が約250万と言わ
れてましたから、早い話がバケモノですね。」

リースリットがさらりとヒドい事を言つてきた。

「ルシフェラとリースはどれくらいなんだ？」

バケモノ呼ばわりされてヘコんだ宗太が一人に訊ねる。

「……3500万じゃ。」

「……175万です。」

「……。」

宗太、ルシフェラ、リースリット三人の沈黙が場を支配した。

「…ええい、バケモノやうはうでも良い！次はアンジーの測定じやー！」

沈黙に耐えられなくなつたルシフュラが叫ぶと、アンジエリーナに向き直る。

「は、はーー！」

アンジエリーナが返事をして水晶に手を乗せる。

「…なんと。」

水晶板を確認したルシフュラが絶句する。

リースリストも皿を見開き、口に両手を当てて驚きの表情を浮かべている。

「え、えつと…、もしかしてあたし魔術を使えないとか…ですか？」

そんな一人の様子を見たアンジエリーナが不安そうだ。

「…逆じゃ。属性が水、風、土の三属性、魔力量に至っては魔族やエルフに並ぶ52万。はつきり言ってコレは人間としては前代未聞じゃ。」

ルシフェラは信じられないといった風でなんとか口に出す。

「じゃ、じゃああたしも旅に出られるんですね？」

アンジエリーナはとても嬉しそうだ。

「つむ、これからどれだけ魔術を究められるかじゃが、先ず勝てる人間はおらなくなるじゃろうな。旅も問題なかろう。」

僅か十歳にして人間最強。

世の魔術師達が聞いたらそれこそ嫉妬に狂いそうだ。

アンジエリーナは上機嫌で今にも鼻歌を歌い出しそうな程ニコニコしている。

「それでは時間も良い事じやし、続きは昼食を取つてからにするかの。」

ルシフュラの言葉でリースリットが昼食の準備を始める。

バスケットからシートを出して広げ、宗太達が座ると皿とコップを渡していく。

（食器まで持ってきてたのか…。）

用意が良いと言つか、流石リースリットと言つべきなのか。

昼食はサンドイッチとビンに入れられた果汁だった。

コップはこのための物だったのか。

魔獣退治の依頼と魔術の特訓の筈がまるでピクニックである。

「それで、この後はどうするんだ？」

サンドイッチを食べながら、宗太はこの後の予定について訊ねる。

「うむ、次は魔力の覚醒 つまりは知覚じゃ。

魔力を体内に流し込み、純粋な魔力、属性変換された魔力の双方を覚えて貰う。

ソータは儂が、アンジーはリースに頼むかの。
アンジーの土属性だけはソータの後に儂がやろう。」

「畏まりました。」

「よ、宜しくお願ひします！」

ルシフュラの決定にリースリストが頷き、アンジエリーナは姿勢を正してお辞儀する。

皆が食べ終わり、少し休憩をした後リースリストが後片付けをする。

いよいよ魔力知覚の訓練だ。

「この訓練は先ず、お互いの手のひら同士を合わせるように両手を組むんじゃ。」

宗太は自分の右手とルシフュラの左手を指を絡めるようにして組み、逆の手も同じようにする。

「それでは儂の右手から純粋な魔力を少量流すからの。オヌシは感覚を掘んだら同じように右手から儂に流し込むのじゃ。」

そう言って右手から魔力を送るルシフェラ。

宗太は左手から身体の中に何かが流れて広がっていくのを感じた。

例えるなら水の中に注射器などで更に水を流し込んだ感覚だろうか。

「な、何これ！？」

宗太は今まで感じた事の無い奇妙な感覚に戸惑う。

「判ったかの？それが魔力じゃ。左手から広がった魔力の流れに合わせて体内の魔力も巡らせるようにせよ。」

言われた通りに体内に意識を集中する。

魔力の流れに合わせ、体内に沈滞していた魔力を動かそうとする。

すると最初は動いていたのが怪しく思う程弱い流れだつたものが、徐々に速くなつて行くのが判つた。

「おお、段々と速く…。」

「それが魔術を扱う初歩の初歩、魔力の循環じや。動かぬ魔力では体外に出す事は出来ぬから。…では、儂が流した魔力と同量を右手から流し込んでみるが良い。」

言われた通りに右手から送り込む。

「多すぎるぞ、魔術で辺り一面を消し飛ばす氣か！魔術の発動に魔力を流し込み過ぎれば思わぬ被害を及ぼす事にもなるのじやぞ？」

そう言つて宗太に魔力を戻すルシフェラ。

この魔力の制御といつもの、想像以上に難しい。

体内を勢い良く流れる魔力からほんの少量の魔力だけを放出しなければならないのだ。

ほんの一瞬だけ放出したつもりでもルシフェラに指示された量の倍

以上になってしまつ。

横を見るとアンジーハリーナも苦戦しているので、リースリットニア注意されている。

「集中を切らすでない！」

「うーうめえー！」

ルシフニアに怒鳴られて意識を戻す。

見るとルシフニアは何時もの気楽な態度を微塵も窺わせない真剣な表情をしていた。

それだけ重要な事なのだろう、宗太も集中して行う事にする。

それから暫く、ルシフニアの指示を受けながら細かい魔力量の調整が出来るまでになると、漸く練習の終了を告げられた。

「……うむ、ここまで出来れば取り敢えずは良いじゃう。魔力量の調整は終わりじゃ。」

「……はあー。」

宗太は大きく息を吐きへたり込んだ。

「但し、これ位は無意識でも出来るように今後も反復練習あるのみじやぞ。

魔力量が少な過ぎれば相手に有効なダメージは『えられぬし、魔術自体が発動せぬ事もある。

逆に多過ぎれば暴発や威力の高すぎで周囲にまで被害をだしてしまおそれう虞おそれがあるからの。」

「が、頑張るよ……。」

魔力とは魔術毎に勝手に消費されるモノでは無いよつだ。

失敗すると周囲にも被害が出てしまつとなればルシフェラが真剣だつたのも納得出来る。

「では、次は属性の認識じや。儂が流し込んだ属性変換された魔力を認識したら、同量の魔力を変換して儂に流してみるが良い。先ずは火属性からじやな。」

ルシフェラから魔力が流し込まれる。

すると宗太の内側で、まるで眠っていたモノが目覚めた様に何かが大きくなるのを感じた。

初めての感覚であるが、元から自分の中にあったもののように自然と収まつた。

「コレが火の属性」。

宗太が感覚を掴んだのを見て取つたルシフェラが魔力を引き戻す。

「内側のその感覚を経由させると変換させられる。同じようにやってみるがよい。」

言われた通りに魔力を流し込む。

すると、今まで無色だった魔力が変化した気がする。

そのまま少量をルシフェラに送り込む。

「ふむ、大丈夫なようじゃ。そのまま魔力を掴んで引き戻すようにすれば自分の中に魔力を戻せるぞ。」

魔力を掴むとは中々抽象的な表現だ。

「うーん…、もっと分かり易い表現の仕方つてない？」

「魔力とは生物の身体に元より備わる機能のようなモノじゃからの。オヌシは手や指の動かし方を詳しく説明する事が出来るのかの？」

そう言われてしまつては返す言葉が無い。

黙つて戻しやすい感覚を掴むために色々と工夫をしてみる。

色々と試した結果、放出するのとは逆に掃除機のように吸い込むようにするのが一番しつくり来た。

「出来たようじゃの。今度は純粹な魔力の属性変換とは逆に火属性の魔力を経由させるようになれば純粹な魔力に戻せる。」

言われた通りに属性変換の工程を巻き戻すように火属性の魔力を動かすと、無色の魔力に戻り体内の循環に戻つていつた。

「魔力は体外に出て暫く放置すると霧散して消えてしまうが、今のように体内に戻す事も出来る。

魔術陣を途中でキャンセルした時などで、魔力の無駄遣いをしたくない時などには有効じや。

但し、魔術陣を完成させて発動させる段階まで行くと戻す事は出来ぬのじや。

その場合は素直に発動させるか、魔術陣の構成を破棄して魔力を霧散させるしかない。

気をつけるが良い。」

「体内から無くなつた分はどうしたら戻るんだ？」

「減つた魔力は先の訓練のように純粹な魔力を他人から分けて貰うか、大気に存在する魔素マナを体内に取り込む事で自然と回復するのじや。

但し、一度に大量の魔素を魔力に変換する事は普通出来ぬ。

危険域にまで魔力が減るとそれ以上使えなくなるので魔力切れで死ぬ事は無いが、身体能力を十全に發揮出来なくなるから注意が必要じや。」

魔力は使つても自然に回復するのか。

宗太が頷くと次は水属性じやの、と言つて認識の特訓を続ける。

その後も風、土と続け、最後の光属性の認識の番になる。

「光属性は基本四属性とは違い、現在この世界で持っているのはオヌシだけじゃ。その為に認識には闇属性を使つ。今までの認識と違ひ、反発し押し返そうとする感覚に集中するが良い。」

ルシフュラの手のひらから魔力の塊が流れてくる。

しかし、先の四属性と違い僅かな不快感を感じる。

「う…、何か変なカンジ…。」

「それに反発してあるのが光属性じゃ。」

そつ言つてルシフュラが魔力を引き戻す。

代わりに宗太が光属性に変換をし、ルシフュラに流し込んだ。

「…うむ、確かに光属性じゃの。これで属性の認識は終了じゃ。」

宗太が魔力を引き戻すと、ルシフュラは少し前に終わっていたアンジェリーナの元へ行く。

最後の土属性の認識をするのだろう。

暫く待つとアンジェリーナも全ての属性の認識を終えたようだ。

「では、最後に魔術の発動についてじや。」

アンジェリーナが宗太の側まで来ると、ルシフュラは一人に向き直る。

「魔術の発動には呪文の詠唱と魔術陣の展開が必要じやという事は先にも言つたの。

詠唱で必要なのは主に属性、形状、対象、そして術の名称じや。

これらを口にする事で、目的の術の内容をより明確にする事になる。また、詠唱文を長くする事で詠唱時間も掛かるがより強力にする事も出来る。

そして魔術陣。コレは内部に詠唱内容の他、範囲や魔力制御用の術式等を書き込み発動を安定させる目的があるのじや。

宗太と、おそらくアンジーも注意されたであろう魔術の暴発とは、基本的に制御術式の許容量を超えた魔力により魔術が制御不能となり、意図せぬ結果をもたらす事を言つ。」

だからこそルシフエラはそこまで魔力量の調整訓練にこだわったのだろう。

そこでルシフエラが「朔夜」と言つて、ルシフエラの影が伸び上がり宗太を襲つた時に持つていた漆黒の大剣が現れる。

アンジエリーナは突然の出来事に目を丸くしていた。

「詠唱は魔術の発動に媒体となる魔導具を仲介する事で短縮する事が出来る。

この魔剣月夜のように高位の媒体ともなれば詠唱自体の破棄も可能じや。

少しでも速い詠唱を求められる戦闘時には有利に事を運べる様になるのじやが、普通の詠唱より魔力の消費が多くなつたり術の完成度が下がる場合もあるのが難点じやの。

では、リース。」

ルシフエラが呼ぶと、意を汲んだリースリットが少し離れた場所まで移動する。

「では実演じや。

ストック

貯留、燃え盛る炎よ
数多の火球となりて
かの者を焼き尽くせ！

『ファイヤー・ボール
火炎球弾！』

ルシフェラが右手を前に翳し呪文を唱え出す。

すると、ルシフェラの右手から溢れ出した紅い光が細い紐のように伸び、円の内部に幾何学模様と何かの文字が書き込まれた魔術陣になつた。

魔術陣は詠唱後も魔術を発動させることなく、ルシフェラの手のひらの先に浮かび上がつたままだ。

「詠唱は判つたけど、何で魔術は発動しないままなの？」

宗太はその事を不思議に思い質問する。

「コレは遅延呪文ディレイ・スペルという技術じゃ。

詳しい説明は後程しようかのう。

属性は詠唱の他、魔術陣の色でも判別する事が出来るのじゃ。

例えばこの紅い光ならば火、蒼ならば水、緑なら風、茶なら土、薄紫なら雷、蒼白なら氷、薄茶なら木、黄色なら金、そして白が光で黒が闇となつておる。

この魔術陣は、アンジーは読めぬじやうが内部の文字が制御術式や火炎球の数の指定等になつておるの。」

「…すまん、俺も読めないんだけど。」

宗太がおずおずと手を挙げる。

「…はあ…？」

それを聞いたルシフェラが素つ頓狂な声を上げた。

「オヌシは阿呆か？勇者は召喚後にキチンと意思の疎通をはかれる様、言語や文字を理解出来る様になる術式も組み込まれてある筈じやぞー？」

「…そんな事言われてもな。確かに言葉は解るけど、文字は全然。これまで文字が解らなくても何とかなってたし…。」

阿呆呼ばわりされてちよつとムツとする宗太。

いきなり見ず知らずの文字なんか読める筈もない。

「いや、待て…。そうか、そり言えばオヌシの召喚は完全では無かつたんじやったの。恐らく召喚場所がズレた他に言語に関する術式にも異常が出たんじやう。コレは他にも不備があるやも知れんの

う。」

少し考える仕草を取ると、召喚の失敗に関して思い出したよつで推測を述べる。

「…先ずは魔術の説明を終わらせようかの。

魔術はこの様に呪文と体内で属性変換させた魔力で魔術陣を描く事で完成する。

そうすれば後は顯現させるだけじゃ。

発動。^{テイク}」

ルシフェラの宣言と共に紅い魔術陣が一際輝くと、拳大の火球が五つ現れリースリットに向かって飛んで行く。

それに対しリースリットも何事か呟くと、前方に黒い魔術陣が展開し火球は見えない障壁に防がれ散つてしまつ。

火球を防ぎきつたリースリットは宗太達の元まで戻つて来た。

「先の術は展開後発動せずに残つておつたが、普通は詠唱と魔術陣双方の完成と共に発動するのじや。」

ルシフェラが発動のタイミングについて補足説明をする。

タイミングをズラすのが遅延呪文という事なのだろうか。

「アンジーは武器を持つておらんのじゃったな？」

「は、はい。」

ルシフュラの確認に頷いて答えるアンジエリーナ。

「…ふむ、ソータも魔術文字は読めんようじやしのひ。暫く待つて
おれ。」

そう言って影に沈んで消えるルシフュラ。

宗太とアンジエリーナはリースリットに手伝つて貰い、魔力調整の
練習をして時間を潰す事にする。

「おお、魔力量調整の特訓か。感心感心。」

暫くそうしていると、ルシフュラはその手に白と黒、一冊の本を持
つて戻ってきた。

一冊共、厚手の表紙には紅、蒼、緑、茶の煌めく糸のよくなモノで豪奢な装丁が施されている。

「それは？」

「コレは遙かな昔、それぞれ神族と魔族が作った最高位の魔導書じや。

この黒い魔導書が『メフィストの魔導書』。

レイティア・メフィストと言う魔族が作った魔導書で、儂が魔剣月夜を継承する以前に使っておった物じや。

白い魔導書は残念ながら今まで契約出来た者がおらんのでな、詳細は不明なのじや。

然し、どちらも制作者の意識を持つと言われており、契約さえ出来れば魔術の補助をしてくれる筈じや。

そう言つて宗太に白い魔導書、アンジェリーナに黒い魔導書を手渡すルシフェラ。

「契約つてどうすれば良いんだ？」

「その魔導書に純粹な魔力と自身の持つ全ての基本及び特殊属性に変換した魔力を流し込めば良い筈じや。」

宗太は教えられた通りに魔力を流し込む。

火、水、風、土、そして、光。

次の瞬間、宗太は真っ白な空間に立っていた。

前後左右、上下すらも一面真っ白。

平衡感覚を失つてしまいそうな錯覚を覚える。

「　アナタが私を呼んだの？」

宗太が何とかフラつかないように頑張っていると、突如背後から声を掛けられた。

そこに立っていたのは足首にまで届く白い髪に金色の瞳、色白の肌を白いドレスで包み背からはこれまた純白の天使のような羽を生やした美少女だった。

歳は16くらいだろうか？

リースリストとそつ変わらないように見える。

身長は歳相応だと思うが、ある一点は残念なサイズだった。

「キミは…？」

「私はリリス、リリス・ホワイトグレイル。この魔導書の意識だよ。そいつがキミは？」

白い少女 リリスは手を後ろで組んでどこか楽しそうに名乗る。

「あ、俺はソウタ・アカツキ。よろしく。」

「うん、よろしくーソータ、か。変わった名前だねー。キミって人間でしょ？光属性とスゴい魔力量だからビックリしちゃった。」

リリスは興味津々と言つた様子だ。

宗太はどう答えたものかと一瞬悩んだが、正直に教える事にする。

「実は俺、別の世界からコツチの世界の人間に勇者として召喚されたみたいなんだよね。何でも魔族を倒す為に、居なくなつた神族の代わりとしてらしいんだけど。」

「人間が魔族を？何でまたそんな事を。」

リリスが不思議そうに聞き返す。

「ルシフェラが言つには　あ、ルシフェラつて言つのは俺に魔術を教えて白い魔導書を渡してくれた娘なんだけど、国の領土を広げる為とか言つてた。」

「そつなんだ。全く、弱い力でも生き抜く為の知識が欲望にすり替わるなんて人間も仕様がないわね。あ、それとこの白い魔導書は『ホワイトグレイルの魔導書』って言つのよ。因みに私が制作者ね。」

「

リリスが親切に魔導書の名前を教えてくれた。

「なる程、リリス・ホワイトグレイルだから『ホワイトグレイルの魔導書』なのか…。つて、ええ！？製作者つて遙か昔の神族だつて…。」

「そ、私はリリスの意識だもん。私の本体は死んじゃってるのよ。それにしても、キミが光属性を持つてる理由は判つたけど、キミに加護を与える筈の神様の力を考えるところと加護が弱い気がするのよね。」

リリスが小首を傾げながら考える素振りをする。

「加護を与える神様ってそんなの判るの？」

「うん、まあ大体は。パスが完全には通つてないのかな。何か心当たりとかある？」

「えっと、何か召喚に失敗して文字の知識とか召喚場所に関する術式に異常があつたらしい。ルシフェラの話だと他にも問題があるかもしれませんって事だけど……。」

リリスの質問に先のルシフェラの推測を教える。

「そつかそつか、なる程ね。召喚魔術の術式がお粗末だったか発動するときに無茶をやらかしたのかしらね。」

リリスは呆れ顔だ。

最高位の魔導書を製作するほど魔術に優れているリリスとしては、そんな失敗をする事自体が有り得ないのだろう。

「それで、文字が解らないんだっけ？魔術を使う為に私と契約したいのかな？」

「うん、俺と契約出来ないか？」

宗太としては契約をして貰いたい。

しかし、今まで使えた人が居ないというなら拒否される可能性の方がのだろう。

断られたら揉み倒しても契約をお願いするつもりである。

「うん、良いよ。」

「そこを何とか…って、良いの…？」

まさかの即答に若干拍子抜けした宗太だった。

いや、嬉しいのだが。

「うん、キミと居ると楽しそうだし。それに神様の加護が不完全なまま放り出すのも可哀想だしね。」

そつと宗太の目の前まで来ると、宗太の顔を両手で挟み込む。

そして若干前屈みになつた宗太の顔にリリスも顔を近付け 唇同士を触れさせた。

「…ツー？」

一瞬頭が真っ白になつた宗太だったが、唇に触れる柔らかな感触に意識が戻ると見る見るうちに顔が赤くなつて行く。

何を隠そう、宗太にとつて生まれて初めてのキスだったのである。

「な、な、な…！」

「ふふー、ご馳走様！これで契約完了、私とのバスも繋がつたし魔術文字も理解出来る筈だよ。それじゃあまた後でね！」

困惑する宗太を余所に、リリスがそれだけを言ひと無に浮上する感覚に包まれる。

次の瞬間には元の草原に立っていた。

「…あれ？」

「おお、ソータ。ビリジヤ、契約は出来たか？… って、顔を赤くしてどうしたのじや？」

ルシフエラの『契約』といふ言葉に先ほどの事を思い出し赤くなる宗太。

ルシフエラは怪訝そうな顔で宗太を見る。

「あ、ああ。契約は出来たよ。『ホワイトグレイルの魔導書』って言ひじし。」

「… そりか、それなら良い。アンジーも無事契約出来たよ、ビリジヤしの。」

アンジエリーナの方を見ると嬉しそうに魔導書を抱えていた。

「では、最後に遅延呪文の説明をしようつかの。^{ディレイ・スペル}

遅延呪文とは魔術を留める為と発動させる為の鍵となる単語を設定し、任意のタイミングで魔術の発動を遅らせる事が出来る技術じゃ。魔術 자체を体内に戻し、一単語での即時展開、発動をする事も出来る。

使いこなせば戦術の幅が一気に広がるのじや。しかし問題もあってのう、意識から外すと即座に発動してしまつし、体内に戻した状態で爆発させると大惨事じや。」

サラリと怖い事を言うルシフュラ。

便利な技術ではあるが良い」とばかりでは無いといつ事か。

アンジエリーナも顔を蒼くしている。

「まあ、ソータとアンジーには魔導書がある。手伝つて貰いながら習得してみるが良いじゃろ。」

ルシフュラはそつと笑うと森に向かって歩き出す。

次は魔獣の討伐依頼だ。

宗太達も後に続いて歩き出した。

第7話 魔術の説明と魔導書と。ですよー（後書き）

やつひまつた… oren

通行税の話を3話で書き忘れていたのに気付いて急遽入れました。

ロイドとアンジェリーナが兄妹だつていつのは元からの設定ですよ?
…ホントだよ?

今回は魔術の説明でしたが、投稿が遅くなつてごめんなさい。
設定をまとめのにエラい時間が掛かってしまいました。

説明漏れがあつたらその都度入れて行きます… oren

といひで今更なのですが、ルビはちゃんと振れてるんでしょうか?
携帯だと確認出来ないのでヨコの方、教えて頂けると助かります。

では次回は主要キャラクターの紹介になります。

キャラクター紹介その1

アカツキ 真太

年齢：17

身長：178cm

体重：62kg

種族：人間

魔力属性：光（+基本四属性）

魔力量：28000000

武器：聖煌輝剣アカツキ、ホワイトグレイルの魔導書

黒髪黒眼、顔は中の上といった所。要は平凡。

性格は周囲や状況に流され易い。

しかし、真面目とは言い難いがやる事はちゃんとこなす。

召喚の失敗により、加護を与えている神とのパスが中途半端に繋がっている状態であり、聖剣を完全な状態で創り出せない他、魔力も本来より少ない。

聖剣とは光属性を持つ者が望む事で現れる、現在使用可能とされる唯一の創造魔法に分類されるモノ。そのまま装備し続けたり、必要な無い時は消す事も可能。

加護を受ける神の違いか、創造者によって名前、形状、威力も変わつてくる。

アカツキは長めの日本刀の様な形状。

本来最高位の魔術媒体となるが、宗太の力が不完全なためそこまでの能力は無い。

ホワイトグレイルの魔導書は遙か昔の神族、リリス・ホワイトグレ

イルが創造魔法で生み出した魔導書で、内に創造者の意識を持つ。魔術の高位媒体及びリリスの持つ豊富な魔術知識による発動補助や、新たな魔術の情報を魔導書内に保存する『自動書記』^{オート・セグレタリ}などの機能を持つ。

リリスはぺたん娘。

ルシフェラ・エメイン・レスト・ローディアス

年齢：128

身長：142cm

体重：ヒミツ

種族：魔族

魔力属性：闇（+基本四属性）

魔力量：350000000

武器：魔剣月夜^{ツキヨ}

銀髪紅眼、髪は左右後ろで結び縦ロール。

見た目12歳程で残念なお子様体型。

遙か昔の魔族の特徴である煌めく銀髪と真紅の瞳、高い魔力量と五属性を使いこなすことから、一部の考古学者等からは「先祖返り」「月の姫君」と呼ばれている。

見た目に反して知識は豊富である。

気が強く、面白い事が好き。

気を許した存在には優しくするが、興味の無い存在にはトコトン無関心、気に入らない存在には残虐な一面を見せる等性格は割とハッキリしている。

今一番のお気に入りは宗太。

冒険者ギルドではルシフェラ・レストールという名前で登録している。

魔劍月夜は魔王剣とも呼ばれ、歴代の魔王に引き継がれる武器。

神代の昔、一人の闇の神が創造したとされる。

最高位の魔術媒体でもあり、詠唱を完全に破棄して魔術を発動させる事が出来る。

持ち主の力量で形状を変化させる事が出来るが、今まで使いこなせた者はルシフェラ以外居ない。

これも歴代最強と言われる理由である。

魔劍月夜・朔夜

サクヤ

月夜の基本形、漆黒の刀身を持つ両手剣。

超重量の破壊力を持ち、並の防御力なら防御ごと叩き潰される。

歴代の魔王はこの形状しか使いこなせなかつた為、これを指して魔王剣と呼ばれた。

魔劍月夜・纖月

セングツ

漆黒の大鎌。

鎌ならではの特殊な攻撃に加え、間合いを取つた相手に対し斬撃を飛ばし攻撃する事も出来る。

ルシフェラは対人戦闘では比較的コレを好むようである。

魔劍月夜・破月

ハゲツ

魔劍月夜の遠距離攻撃形態。

魔劍の形状としては一種異様な弓形態。

構えて弦を引くと魔力による矢が形成され、それを撃ち出す。

魔力、魔術を打ち出す魔弓の為、射程距離は通常の弓矢の比では無いが、やはり視認出来ない距離では命中率は低い。しかし、ルシフェラは索敵魔術と組み合わせる事で命中率の問題を解消している。

無詠唱で魔法陣を開き、範囲魔術を矢として放つ事も可能。

弭槍となつており、咄嗟の近接戦闘にも対応する事が出来る。

魔劍月夜・望月・不知夜月 モチヅキ イザヨイヅキ

魔劍月夜の中距離攻撃形態。

チャクラム

魔劍月夜は直径20cm程の円月輪を最大5個生み出す。投擲すると直進し、同じ軌道で戻ってくる。若干ならば曲線を描かせる事も可。

魔劍月夜の状況が脳に直接届けられる 感覚を共有する自身の分身のような存在とでも言うべきもの ので、周囲にバラ撒けば死角はほぼ無くなると言つて良い。不知夜月は魔劍月夜の派生技とでも言うべきか。

魔劍月夜を投擲した後、本来の軌道を無視しての遠隔操作が可能で、縦横無尽に相手を切り刻む。

魔劍月夜の特性上背後えの攻撃も可能だが、自身を含め最大6つの情報を処理する事になるためにかなりの情報処理能力が要求される。

魔劍月夜・暁月 ギョウゲツ

魔劍月夜の最終形態。

白銀の刃を持つ。

アカツキに酷似した形状だが能力、アカツキとの関連など全て不明。何か条件があるのかルシフェラも解放出来ていない唯一の形態である。

リースリット・ノエル

年齢	114
身長	157
体重	ヒミツ
種族	魔族
魔力属性	闇(+火、水、風)
魔力量	1750000

武器：魔剣 シップウ 疾風・迅雷、風雪の腕輪 ジンライ

薄紫の髪と瞳を持つルシフェラの侍女。

自由奔放なルシフェラに振り回される苦労人。
見た目16歳程だがルシフェラより年下（現在の魔族としてはこれが普通）。

生まれつき魔力量が多く、歴代魔王並みにある。
物静かで落ち着いた雰囲気ではあるが、時たまさり気なくツッコミを入れる事も。

武器は遙か昔魔族とドワーフが共同で鍛え上げた魔剣で、対の双剣。
疾風は風属性、迅雷は火と風の複合属性である雷属性及び火属性の魔術媒体となる。

切れ味自体も良い名剣。

風雪の腕輪は水と風の複合属性である氷属性及び水属性の魔術媒体となる。普段は侍女服の袖で隠れて見えない。

アンジェリーナ・メナード

年齢：10

身長：135

体重：ヒミツ

種族：人間

魔力属性：水、風、土

魔力量：520000

武器：メフィストの魔導書

宗太の泊まつた宿屋の娘。

茶髪に茶色の瞳で、肩甲骨の辺りまで伸ばした髪はその日の気分で

髪型を変える。

宗太に一日惚れし、何かと世話を焼いてくれる。

人間でありながら水、風、土の三属性と魔族、エルフに並ぶ驚異的な魔力量を持つが、今まで本人に魔術師を目指す気が無く調べなかつた為に誰も才能に気付かなかつた。

才能で言えば伝説の魔術師として歴史に名を残すのが確実なレベルである。

宗太と共にルシフェラとリースリットに師事し、魔術を学ぶ。

メフィストの魔導書は遙か昔の魔族、レイティア・メフィストが創

造魔法で生み出した魔導書で、内に創造者の意識を持つ。

魔術の高位媒体及びレイティアの持つ豊富な魔術知識による発動補助や、新たな魔術の情報を魔導書内に保存する『自動書記^{オート・セクレタリ}』などの機能を持つ。

キャラクター紹介その1（後書き）

現時点での主要四キャラクターの紹介です。
設定としては主人公の宗太よりルシフェラの方が早く出来ていたといつ…。

考え無しで書いてるのでコレから設定が増えたりするかもです。

聖剣アカツキ、魔剣暁月、滅んだ神族など色々伏線張つてみてるけど果たして回収出来るのだろうか…。

要望とかあれば次のキャラクター紹介の時にリリスとか入れようかなと考えております。

それではまた次回の更新で。

第8話 勇者召喚魔術の秘密？と犬つじの退治じゃ！

「魔術の基礎は教えたことじゅし、犬つじの退治には魔術を使つてみてはどうじゅ？」

森に向かつて草原を歩きながら、ルシフュラがそう提案してくれる。

「で、でもあたしはまだ魔術陣を描くなんて出来ませんよ？」

そんな提案にアンジエーラが不安そうに返す。

確かに宗太達は魔術陣の細かい構成などは教えて貰つていないので。

いきなり実戦といつのは酷と言ふるだろ。

口には出さないが宗太も内心では不安を感じていた。

しかし、ルシフュラはそんな二人の不安も一笑に付す。

「オヌシ等…、一体何のための意識持ちの魔導書じゅと思つとるんじゅ？元は今の魔族では束になつても適わぬ最高位の魔術師じゅぞ。

呪文の詠唱から魔術陣の展開まで指示を出せば色々と補助してくれ
るじゃんつ。』

話し方がフレンドリー過ぎて流石にそこまで凄い娘だとは思わなか
つた。

『その娘の言つとおりだよ。』

「うわつ……？」

「ソータさん？って、え、レイティアさん！？」

いきなりリリスの声が聞こえて驚いた宗太。

アンジェリーナにもレイティアの声が聞こえたのか驚いた顔をして
いる。

『あー、今私とバスが繋がつてるのはソータだから、声に出す
と危ない人だよ？他の人に私の声聞こえないし。心の中で私に語り
掛ければ会話出来るから。』

宗太は言われた通りに心の中で会話を試みる。

(…えっと、コレで良いのか?)

『うん、良好良好。良く聞こえるよ。』

頭の中でリリスを思い浮かべながら語り掛けると、どうやら通じた様でそんな答えが返ってくる。

(それで、ルシフュラの言つとおつゝのは?てか、リリスには皆の声が聞こえるんだな。)

『細かい魔術の設定を教えてくれればサポートするよつていう事。意識体として音を聞いたり周囲を見たりとかは出来るんだよ。でも意識体の姿は基本的に人に見えないし、声はバスが通じた人にしか聞こえないの。実体化出来れば別なんだけど。』

リリスの溜め息が聞こえる。

リリスとは契約で意識同士が通じたから、頭の中で会話する事が出来るのである。

それよりも気になる事が…。

(実体化って…、そんな事出来るの?)

『 召喚魔術って元々精神体を呼び寄せて魔力で肉体を持たせ使役する術だからね。私用に改良すれば可能だと思つ。本来は直ぐに元の場所に戻るんだけど、キミを召喚した術式は言わばその亞種だね。』

(へえ、便利なもんだな。どれくらい実体化出来るんだ? てか、直ぐに戻るって前の勇者も戻れなかつたみたいだけど。)

本来の召喚術が元の場所に戻れるなら、亞種とはいえ戻る方法もあるのかも知れない。

しかし、前回の勇者がルシフェラの父親を倒し、その後即位したルシフェラに倒されたという事から望みは薄いかもという不安もある。

『 精神体を実体化させる場合は送られる魔力が尽きるまでだよ。んー…、肉体を持つて召喚したっていう事は、キミの場合は魔力の制約を無くす為何だろうけど…。前の勇者が死んだ後、死体がどうなったかルシフェラちゃんに聞いてみて貰える? 』

リリスは考え込むよつて一拍程間を空けてからそう切り出した。

（分かつた。）

宗太はリリスに言われた通り、ルシフェラに質問してみる。

「なあ、ルシフェラ。お前に倒された前回の勇者ってその後どうなつたんだ？」

「む？ 何じゃ唐突に。」

リリスの声が聽こえて無いという事を失念していた。

ルシフェラは急に話題を振られて小首を傾げている。

「いや、リリスが勇者の死体がどうなつたのか、ルシフェラに聞いてみてくれって。」

「リリス？ ああ、オヌシの魔導書の意識か。先代勇者の遺体なら宣戦布告の使者を送ると共に送り返してやつたぞ。」

宗太が言い直すと、得心がいったという風に答えてくれる。

『…………。』

(コリス?)

黙り込むリリスにビックリしたのかと声を掛けるが、何事が考え込んでいるよつて返事は無い。

「しかし、何故今さら先代勇者の死体なのじゃ？」

すると、今度はルシフュラから質問をしてきた。

「ん？ああ、ちょっとリリスに召喚魔術について教えて貰つてね。本来は魔力が切れたら直ぐに元の場所に戻れるらしくて……」

「何じゃと？しかし、歴代の勇者は死後この国で国葬されてあるそうじゃぞ。じゃから先代の遺体も送り返したのじゃ。」

深夜の寝込みを襲撃し宿の部屋を破壊するなどぶつ飛んだ行動をしたかと思えば、宗太やアンジェリーナに対して面倒見が良かつたり、自分の命を狙つた勇者の遺体をわざわざ送り返してあげたりとか、一ルシフュラの性格が掴みきれない宗太だった。

『…死体は消えなかつたのね?』

「え?」

「何じゃ、何か問題でもあるのか?」

いきなりリリスに話し掛けられ声が出てしまつた。

ルシフエラは自分が遺体を送り返した事が信じられないと言われた様に感じたか、若干不機嫌そうになる。

宗太はルシフエラの不機嫌オーラを敏感に察知し弁明を試みる。

「あ、いや…、問題じゃなくてだな。リリスが『死体は消えなかつたのか?』って質問してきて…。」

「…クククツ、そんなに必死になつて弁明する事も無いじゃろ?」
遺体は消えなかつたぞ。リースも勇者が死んだのを確認しておる。
のう?」

そんな宗太の態度が面白かったのか、笑いながら答えるとリースリ

ツトに確認をする。

「はい、念のため脈や心音、呼吸、魔力等も確認しましたのであの場での死は確実かと。」

何という徹底振りだらうか。

確かに「実は生きてました」で再度狙われるのも嫌だらうが。

「何で魔力まで確認するんだ?」

「あらゆる生物には魔力があるとは教えたじゃ るうつへ。しかし、死ぬとその体内の魔力が大気中の魔素マナへと溶けて消える。つまり死体に魔力は残らぬ故、死亡確認が必要な時には魔力を覗るのじや。戦場の魔素濃度は凄まじいぞ?」

『…ルシフェラちゃんの話でハツキリした。ソータ…、多分キミは元の世界に戻れない。』

リリスはルシフェラから聞いた話と自分の知っている魔術の知識からの推測を述べる。

「元の世界に戻れないって何で？」

宗太はルシフュラも話の内容が解るよつに声に出して会話する」とにした。

ルシフュラも宗太の意図を理解したのか、黙つて宗太を見上げている。

何故か魔力制御の訓練と同じくらい真剣な顔をしているが。

『別世界から召喚された対象の場合、魔力が切れればこの世界から拒絶されて元の世界に返されるの。元の世界と細い糸のよつなモノで繋がってるからね。』

「召喚も魔力で世界の拒絶を回避してるのか…。元の世界と繋がってる糸のようなモノってのは？」

魔力が足りなくて魔術が発動しないのと同じことか。

『糸つて言つのは物の例え。

精神、魂というものはその「世界」の一部だから、どれだけ引き離しても幾らでも伸びて離れない。

だから別の世界に喚ばれても、その世界に拒絶されるんだよ。

でもソーラの場合は別。

最初は肉体のせいで魔力が尽きないからだと思つたけど、キミは元の世界との繋がり自体を断ち切られてる。』

「元の世界との繋がりが断ち切られてる？ 魂と世界との繋がりは幾らでも伸びて離れないって言つたじゃないか。」

言葉の矛盾に混乱する宗太。

ルシフェラは宗太の少ない言葉からも意味を察したようで、驚愕に目を見開き息を呑んだ。

『糸はハサミで切れるでしょ？ 多分ソーラの繋がりは召喚魔術で切れちゃつたの。だから先代さんは死んで魔力が尽きても消えなかつた。そして、どこの世界とも繋がりが無い、「勇者」という存在が現れた事でこの世界が内に取り込んだ。神の加護も、この世界に属する神族以外で光属性を持つ存在だからと思つ。』

宗太は僅かだが荒くなつた語氣で、リリスが怒りを押し殺しているよ／＼に感じた。

「…なる程、戻れないってのは召喚の効果で元の世界からこの世界に繋がりが移つたからって事か。」

宗太としてはこの世界に来てからの慌ただしい毎日が幸いしてか、あまり衝撃を受けなかつたのだが。

「…何じゃそれは。自らの欲望を満たす道具として喚んだばかりか、役目を果たして尚縛り付けるのか…！」

代わりにルシフェラが怒りを吐き出すよつに弦く。

ルシフェラと、盗み聴きしていたのかリースリットが凄まじい怒気と魔力を発している。

いつの間にか一人共角と羽が出ていて、宗太が怒りを向けられている訳でも無いのに怖じ氣を感じる。

唯一意味が解つていなかつたアンジェリーナも、レイティアから教えて貰つたのだろう。

顔を真つ青に染め、悲痛な面持ちで宗太を見ていた。

宗太の事で他の仲間が怒つてくれるのは、嬉しいよつな困つたよつな複雑な気分だつた。

「リース、城に戻つて命令。全軍を以てこの国を滅ぼすべし。」

「畏まりま…。」

「ちよつと待つたああああああ！…！」

いきなり大事になつて焦る宗太だつた。

「何じや、大声なんぞ出して。」

「いや、怒つてくれるのは嬉しいがいきなり滅亡」はやり過ぎだらー。」

やつぱりルシフュラは魔王だつたと改めて認識せられた。

何だかんだで勇者の仕事をしてゐ事になるのだろうか？

「國の滅亡」回避的な意味で。

「むう…、当事者のオヌシがそつとつになら仕方が無いの。リース、命令の撤回じや。」

「 畏まつました。 」

ルシフェラが命令を取り下げるヒースリットもそれに応じるが、二人共未だ怒りが覚めやらぬといった感じだ。

怒氣と魔力こそは収めているが、険しい顔で角や羽等は出たままだつた。

「 しかし、滅ぼさぬならばどうするのじゃ？ オヌシが死んだ後、新たな勇者が召喚され続ける事になるのじゃぞ？ 」

ルシフェラの懸念も当然だつ。

宗太は魔族に敵愾心など持つてはいない為、今は勇者の脅威を考えなくて済む。

しかし、宗太は不老不死では無い。

いざれは死に、その後はまた勇者から魔族や国を護る為に戦つ日々が訪れるのだろう。

それは宗太も望む所では無い。

「んー…、まあそつちの方はおいおい考へるとして、取り敢えずは依頼の方を片付けよ。」

今考へても直ぐに良い案が出る訳でも無いだろ。」

なれば今はやる事をやつて、その後でゆづくと考へれば良い。

「…、それもそつじやな。急いで事を仕損じるとこつのも詮無き事か。」

ルシフロはやれやれといった感じで苦笑する。

「それでは犬つひの退治でもするところつかの。」

「マジド・ハウンドだつけ〜どの辺りに居るのかね。」

宗太は森の中を注意深く見るも、木々に遮られて姿は見えない。

先ほどのルシフュラとリースリットの怒氣と魔力に当たられて逃げられてなければ良いのだが。

当たるを幸いに森の中を探す訳にも行かないだらう。

「少しばかり待つておれ……。

仄暗き闇よ

光に反する影達よ

何人も逃れ得ぬ宿命で以て

逃げ惑う贊さだめを我の手に

『影の探索』

ルシフュラが呪文を詠唱すると、黒い魔術陣が弾ける。

しかし、何も起こらなかつた。

「…何をしたんだ?」

「一定範囲内の影から対象を探し出す。闇の探索魔術の一つじや。北西に一キロメートル程の位置に目標と思われる影が十あつた。では行くとするかの。」

簡単な説明をして歩き出すルシフュラに皆で付いて行く。

（闇属性って便利なモンだなー…。）

『転移やら探索やらと魔術の多様性に感心させられる。

『一応他の属性でも探索は出来るよっ。』

（え、そつなの…）

『じつやから無意識にリリスと一緒に考えていたよっだ。』

『うん、どの属性も要は使いよつなんだよね。特に光属性なら闇と表裏一体だし、大抵同じような事出来るよ。』

光というのが想像し難かったのだが、まさかそんな便利属性だとは思わなかつた。

（それじゃあ、影から剣を取り出したりとかも？）

『出来る出来る。まあ光属性の場合は影じゃないけどね。』

何でチート属性と思いながらも内心ガツツポーズをする宗太だった。

物を仕舞えるなら荷物の量を考えなくて済む。

旅で大荷物は大変なので助かる能力だ。

「…ソータよ、何を浮かれておるのかは知らんが、そろそろ戦う準備をせんか。近いぞ。」

ルシフェラに注意され我に返ると、何時でも戦えるように意識を集中する。

すると、向こうもコチラに気付いたのだらう。

前方から遠吠えが幾つも聞こえて来た。

「ククツ、犬っこりが無駄にやる氣を出しそう。」

ルシフェラが口の端を歪めて魔剣を影から取り出すと、宗太達の後ろに下がる。

リースリットも双剣を抜き同じく下ると、前方から草や枯れ葉を踏みしめながら疾駆する大型犬のような魔獸が姿を現す。

大きさは宗太と同じ程か。

黒い毛並みに赤い眼、牙の生え揃つた口は開きヨダレを垂らしている。

魔獸達は宗太達を認めると、取り囲むように散開し周り込む。

「背後の奴らは任せて存分に練習するが良い。」

ルシフュラはそう言い放ち、一瞬で魔獸との距離を詰めると大剣で頭から叩き斬る。

「『ウイング・アーマー』
『風鎧』」

リースリットも一言呟くと、身体の周りに風の鎧を纏わせて魔獸に切りかかる。

魔獸も反応出来ない速さで翻弄し、双剣で切り裂くリースリット。

返り血は全て風の鎧に防がれ、魔獣は断末魔の悲鳴を上げて倒れ伏した。

「すげえ…。」

『見とれてる場合じゃ無いでしょ。』

「あ、ああ、ごめん。」

リリスに注意されて意識を魔獣に戻すと、リリスに使う魔術を教えて魔力を変換させる。

「猛き炎

紅蓮の業火

全てを焼く槍となりて

かの者を貫け！

『^{フレイム・ランス}紅蓮の剛槍』！』

宗太の詠唱と共に、リリスが魔術陣を展開する。

すると、紅い魔術陣から燃え盛る炎の槍が出現し一体の魔獣に突き刺さる。

魔獸は体内を焼く業火に暴れ回るが、直ぐに動きを止めると肉の焼ける匂いを放ちながら地に伏した。

アンジエリーナが気になり横を見やると、三体の魔獸が土に足を埋もれさせ、ルシファラに止めをさされていた。

おやじく土の魔術なのだろう。

魔獸でも止めをさせない辺りがアンジエリーナらしさと言つか。

気付けば魔獸は早くも残り一體になつていて。

「ソータ、後一體じゃー！オヌシに任せゆぞー！」

「分かつた！奔る水よ

吹き荒ぶ風よ

凍つくる氷よ

数多の飛礫となり

かの者達を貫け！

『氷の弾丸』！

ルシフュラに言われ、残りの魔獣に向き直ると詠唱する。

水と風の複合属性である氷による弾丸。

無数の拳大の氷の飛礫が魔獣に突き刺さり、肉を抉る。

やがて二体共に力尽き、立っている魔獣が居なくなる。

二属性の魔力量調整が思ったより難しく、まさか成功するとは宗太も思わなかつた。

細かくサポートしてくれたリリスのお陰だらう。

ルシフュラとリースリットは目を丸くしている。

「…まさかいきなり複合属性を使うとは思わなかつたぞ。良く成功したのう。」

「凄いですよ、ソータさん！」

「リリスが必要な魔力量まで教えてくれたからね。俺だけじやどの

魔術も出来なかつたよ。」

戦いながらの魔術行使の難しさを実感させられた宗太だった。

おそれく魔術陣の構築まで入ると発動すら無理だろ。

「まあ、それは実戦を繰り返せば慣れるじゃろ。アンジーも中々
じゅつたしのう。」

ルシフュラは笑いながらそつまづ。

いきなりの実戦であれだけ使えれば、後は経験で幾らでも伸びるも
のだ。

「…ルシフュラ様、魔獣が一体足りないようです。」

宗太達が話しあつてると、魔獣を確認していたリースリットから
そつ報告される。

「む?…確かに九体しかおらんの。」

宗太も数えてみるも、確かに一体足りない。

ルシフェラの探索魔術では確かに十体と言っていた筈なのだが。

「逃げたのか？」

宗太がそう言った瞬間。

「ガルルルルルツ」

唸り声を上げながら森の奥から近付いて来た魔獣は。

「…ちょっとデカくないか？」

思わず宗太がそう呟いてしまう程の大きさだった。

第8話 勇者召喚魔術の秘密？と犬つじの運治じや！（後書き）

ヤバいやばいやばい、執筆ペースが段々遅く…。

てか、呪文考えるの面倒くさいマジで…。

第9話 駄犬の王と聖剣と。 やす

「コレは……、ギルド職員の前にいるやつだ。」

ルシフニアは呆れ顔で呟く。

目の前にマッシュ・ハウンドより遙かに大きな体躯。

体高は三メートルを超えるだろ？

漆黒の毛並みが木々の間から差し込む陽光に僅かに光る。

先の魔獸とは格が違うと見る者全てに理解させるような威圧感を放つていた。

「……やっぱり、さっきまでの魔獸とは違うん、……だよね？」

念のため確認をしてみる宗太。

「ヘル・ハウンド。先程のマッシュ・ハウンドの上位種です。特徴はその巨躯に似合わぬ俊敏さと口から吐き出す火炎、厚く堅い体毛に

より刺突は若干有効ですが、斬撃、打撃によるダメージは軽減されます。ランクはAですが、その中でも上位に位置します。」

リースリストが魔獸からは田を離さず、丁寧に説明してくれる。

ヘル・ハウンドは威嚇するように状態を低く屈め、低い唸り声を上げている。

「大方他の犬つこのボスでもしてたんじゃろ？。よもやコヤツを見間違える阿呆が居るとは思わなんだ。」

そう言いつつ、ルシフェラは漆黒の大剣を大鎌に変化させる。

「こんなのがどうやって倒せってんだ？」

宗太の武器は折れ曲がったツヴィアイ・ハンダーのみ。

本来の性能ならば刺突による貫通力はかなりのモノを持つのだが、曲がった刃先では十分に威力を乗せられない。

打撃すら軽減されてしまつとなると、こんな物では口クにダメージも与えられ無いだろう。

残るは魔術だが、慣れていない現状では詠唱中に隙が出来る上に甘い狙いだと避けられてしまう可能性が高い。

宗太は冷たい汗が背を伝つのを感じた。

「ソータとアンジーは下がっておれ！コヤツは今のオヌシ等が相手にするには少しばかり手に余るじゃろ？」「

宗太とアンジエリーナの力量を良く理解しているルシフェラが一人に指示を出す。

「……っ！分かつた！」

「わ、分かりました！…………きやつ！」

この中での一番の実力者はルシフェラだ。

ならば「」は素直に従うべきだろ？。

そう判断し、宗太は魔獣に注意を払いつつ後退りする。

アンジエリーナも同じように下がったのだが、魔獣に注意を払い過ぎた為か足元が疎かになり木の根に躊躇込んでしまつ。

それを好機と見たか、それまで低い唸り声を上げながら様子を窺っていたヘル・ハウンドがアンジエリーナに向き直ると牙を剥いて飛びかかった。

「あやあああああつー！」

アンジエリーナは咄嗟の事に身動き取れず、叫び声を上げながら目を瞑り身を竦ませる。

「戯け！ オヌシの相手は儂じやろうがー！」

それを見たルシフェラは怒声と共に鎌を一振りする。

すると、鎌から放たれた複数の斬撃が空中にいたヘル・ハウンドの脇腹に吸い込まれ横に吹き飛ばす。

しかし、その斬撃も堅い体毛に阻まれダメージを防ぎられなかつたようだ、直ぐに立ち上ると体勢を直す。

だが、ルシフェラとしてはその僅かな時間で十分だった。

ヘル・ハウンドが体勢を立て直した頃には既に、リースリストがアンジエリーナを抱えて後方へと移動させていた。

宗太も直ぐにそちらへと移動する。

「さて、戯れよつかのう? 犬つこりよ。」

ルシフェラが酷薄な笑みを浮かべながらそう言い放つ。

リースリストも双剣を構えると風鎧を開け、ヘル・ハウンドの退路を断つように回り込む。

「ガアアアアツー!」

ヘル・ハウンドが唸り声と共に前足を振るうと、ルシフェラはバックステップで回避する。

続け様にルシフェラの着地点に向かって噛み付くが、ルシフェラは

自分の影に沈み込んでさりに回避する。

すると、目標を見失つて辺りを見回すヘル・ハウンドの下、影の中から大鎌と共にルシフュラが飛び出しへル・ハウンドの腹部へと刃を突き刺す。

それと同時に、リースリストが右手の剣に雷、左手の剣に風を纏わせると高く飛び上がり、ヘル・ハウンドの背に双剣を突き刺す。

「ガアアアアツー！」

ヘル・ハウンドは内から雷に身を焼かれ、風で肉を切り裂かれ暴れ回る。

「フツー！」

ヘル・ハウンドの下から抜けたルシフュラが短い気合いと共に顔目掛けて鎌を振り下ろすが、しかしこれはヘル・ハウンドが身を捩り避けた事で左首筋を軽く斬るに留まる。

ルシフュラの着地を狙い、ヘル・ハウンドが左前足を地面に叩き付けると地面が大きく抉れた。

しかし、既にその場にルシフェラは居らず、ヘル・ハウンドの右前足が鎌で斬られ、脇腹を双剣で裂かれていた。

ヘル・ハウンドが溜まらず口から炎を吐き出して距離を取るも、ルシフェラとリースリットは一瞬で防御壁を展開し防ぎきると、次の瞬間には影に沈みヘル・ハウンドの下に移動すると迫撃を掛ける。

「すげえ…。」

ルシフェラとリースリットの息の合った連携と圧倒的な攻撃の嵐に、宗太とアンジェリーナはただただ見惚れるばかりだった。

だが、見惚れていて気を抜いたのがいけなかった。

ヘル・ハウンドはルシフェラとリースリットの二人との実力差を悟ると獲物を変更する事にした。

ヘル・ハウンドは自分の周り、広範囲に炎を撒き散らすと、突つ立つたままのアンジェリーナに向かつて駆け出す。

ルシフェラとリースリットは炎を防御壁で防ぐが、炎に視界を遮られ反応が遅れてしまった。

「…え？」

突然襲い掛かつて来た巨大な魔獣の脅威に、アンジェリーナは動けず立ち尽くしたままだった。

「アンジー！」

一瞬早く反応した宗太がアンジェリーナを突き飛ばした。

「ガツ…！？」

ヘル・ハウンドの噛み付きは何とか身を捩つて回避した宗太だったが、体勢を崩した状態ではその後の体当たりを避ける事は出来ずに吹き飛ばされる。

地面を転がり、仰向けに倒れた宗太の身体をヘル・ハウンドが前足で押さえ込む。

「ソーター！！」

「ガツ！？あああああツ！…」

「…ツ…？」

宗太を助ける為に踏み出そうとしたルシフュラだったが、宗太の叫び声で留まる。

ルシフュラの動きを察知したヘル・ハウンドが牽制の為に宗太を踏む力を強めたのだ。

下半身の骨が軋む。

苦痛に悲鳴が口から漏れる。

吹き飛ばされた衝撃か、意識が震む。

ルシフュラ達の叫び声が耳に届くが、何を言っているのかが分から
ない。

死。

近付いて来るヘル・ハウンドの獰猛な口を見て宗太がそう意識した時。

「…………」

脳裏に浮かんだ名前を無意識の内に叫んでいた。

「…………な、何じゃ！？」

思わずルシフェラが困惑の声を漏らす。

宗太の叫びと共に、宗太の身体とヘル・ハウンドの口との間に強い光を放つ白い魔術陣が展開されると、それは宗太の右手に収束していく。

コレは自分の武器だと直感で理解する。

「コレでも…喰らつてろー！」

宗太は、突然の光に怯み身を引いたヘル・ハウンドの頭に光を叩き込むと、そのまま意識を手放した。

そう言いながら身体を起こすと、若干痛みを感じて顔を顰める。

「何で森の中で野宿を……？……ツー」

アンジエーナは向かいで毛布にくるまつて寝息を立てていた。

ジツやら火の番をしていたようだ。

宗太に気が付いたルシフィエラが声を掛けてきた。

「おお、田が覚めたようじやの。」

「……ん。」

宗太が田を覚ますと、そこは暗い森の中だった。

「まだ無理をするでない。犬っこらから受けたダメージがまだ抜けきつてはおらんじやろ。」

それを見たルシフェラは苦笑しながらも優しく声を掛ける。

「…！ そうだ、あの魔獸は！？」

宗太が氣を失った後は一体どうなったのか。

生きているという事は倒せたのは間違いないのだろうが。

「説明の前に食事を取られてはいかがですか？ 食べられないようではたら無理にとは言いませんが。」

そう言いながらリースリットがパンとスープ、干し肉を渡してくれる。

「あ、ありがとうございます。」

礼を言ひて受け取ると、宗太は食事を食べ出す。

昼間に激しい戦闘をしたせいか、動く気力こそ無いものの食欲だけはあった。

「ヘル・ハウンドの件じやが…、その様子だと覚えてはおらんよつじやの。」

宗太が食べ始めるのを確認してからルシフエラがそう切り出す。

「うん、まあ、あの時は必死だったからね。何か叩き込んだのは覚えてるんだけど。」

宗太は気絶する前の事を思い出そうとする。

しかし、肝心な部分の記憶があやふやで思い出せない。

「ふむ…、では順を追つて説明するとしようかの?」

ルシフエラは焚き火に枯れ枝を足すとリースリットからお茶を受け取り話し始める。

宗太もお茶を受け取ると一口飲み、食事を続けながら聞く事にする。

ところが、ポットはどうから持つて来たんだろ？

「あの時、儂とリースがヘル・ハウンドの吐いた炎で視界を遮られ、反応が遅れた隙を突いてヤツがアンジーに襲い掛かったのじゃが。」

「それは覚えてる。アンジーを突き飛ばしたらアイツの突進を受けたんだよな？」

今なら吹き飛ばされたのは理解出来るが、意識が飛びかけたのかその後がはっきりとしない。

「つむ、オヌシを吹き飛ばした後、ヤツはオヌシを前足で押さえつけおった。助けようにも、動こうとすればオヌシを踏む力を上げられ儂もリースも身動き出来んかった。済まんの……。」

ルシフュラは俯き、申し訳なさそうに謝罪する。

リースリストも同じように俯いてしまつ。

「いや、気にしないでよ。元はと言えば、ルシフュラ達に任せっきり

りで気を抜いてた俺の自業自得だつたんだし。」

「しかし、のう…。」

「自分の失態でルシフェラ達が落ち込むといつのは嫌なんだよ。」

尚も気に病む様子のルシフェラにそう言ひと、ルシフェラは苦笑しながら顔を上げる。

「オヌシがそう言つのなら、うむ、今回の事はもう言つまい。…それで、じや。ヤツがオヌシに噛み付こうとした瞬間、オヌシが何事か叫ぶと白い魔術陣が現れたのじや。」

ルシフェラはお茶を一口飲むと説明に戻つた。

「白い魔術陣…？光属性のか？」

「うむ、その後現れた剣をヘル・ハウンドに突き刺しオヌシは気を失つたのじや。オヌシの横にあるじやろつ？」

ルシフェラが指差した方を見ると、宗太の横に長大な一振りの刀が置いてあつた。

全長は160センチメートルを超えるくらいか。

どちらかと言えば反りは小さく、幅の広い打刀といった形状だ。

野太刀と言つた方が正しいのかは刀剣にあまり詳しくない宗太には判らないのだが。

薄い蒼の柄と鞘には橙と金で綺麗な装飾が施されている。

軽く鞘から抜くと、白銀色の刀身が炎の光を反射し仄かに輝いてい る。

「おそらくはそれがオヌシの持つ聖剣じゃねつな。銘は何と言つの じや？」

ルシフェラが聞いてくるが、宗太も覚えてはいないのだった。

『聖煌輝剣アカツキだよ。』

宗太が返答に窮していると、リリスから助け舟が出された。

「…聖煌輝剣アカツキらしい。」

「らしい、とは何じや。オヌシの聖剣じやろ?」

宗太の曖昧な返答にルシフュラは若干呆れ顔だ。

「し、仕方ないだろ!? 最後の方は覚えて無いんだし!」

「ま、セツジヤナ。仕方ないじやルーツのづ。」

ルシフュラは向きになつて反論する宗太を笑いながらからかう。

「フフッ…、ソータ様はまだ体調が万全では無いのですから、そろそろお休みになつてはいかがですか? 火は私が見ておりますので。」

宗太とルシフュラのやり取りを見ていたリースリットが、微笑を浮かべながらそう提案してくる。

リースリットの自然な笑みを見たのは初めての気がする。

「む？それもセーフィヤな。火は儂ヒースで交代で見れば良い。」

「アラ？ それじゃあお願いするよ。」

せつかくの二人の好意を無碍にするのも悪いと思つたので、ソーハは素直に甘えておくことにする。

「それじゃあ、二人共お休み。」

「つむ、ゆつくつと休むが良い。」

「お休みなさい、ソータ様。」

二人の声を聞いた宗太は、直ぐに眠りへと落ちていった。

第9話 駄犬の主と聖剣と。です（後書き）

サブタイはリースリットver.な訳ですが、アンジエリーナとの区別が付き難いですかね？

しかし、漸く聖剣出せましたよ。

聖剣を出すためだけのヘル・ハウンド戦でしたよ。

今回の書き始めの構想では「ルシフュラを助ける為に」な筈だったんですが、「チート魔王様を危機に陥れる魔獣つてどんなだよ？」つて事でこんな感じに…。orz

あ、アンジエリーナでも良かつたのか…。

幕間1 とある者達のお話（前書き）

宗太達が犬退治をしている辺りのお話です。

幕間1 とある者達のお話

「遅れてしましましたかな？」

そう言いながら一人の壮年の男性が室内へと入ってくる。

その部屋は華美な装飾が、しかし派手とは感じさせない絶妙さで施され、床には毛足の長い立派な赤い絨毯が敷き詰められていた。

天井には豪華なシャンデリアが吊され、室内を明るく照らしている。

そこはローティアス魔王國王城の一室である会議室だった。

その室内、中央に据え置かれた黒く重厚な木製の長机には老若男女、十数名の人物が着席していた。

男性が室内へと足を踏み入れると、彼の背後、廊下に立っている二名の兵士が恭しく室内に一礼し、扉を閉める。

「いえ、まだ時間までは余裕がありますわ。どうぞ、お席にお着き下さい。」

長机の左右九つづり置かれた立派な木製の椅子、入り口から向かって右手の一番奥に着席していた少女が来訪者に向かつて良く通る澄んだ声を掛ける。

上座に座るその少女は、腰まで伸びた青みがかつた銀髪に同色の瞳を持ち、歳は15程だろうか。

まだ幼い顔立ちをしている。

「それは良かつたです。皆様お早いお着きでしたな。」

男性はホッと息を吐くと、失礼しますと言つて自分の定位置、向かって左手の中ほどにある空席へと着く。

「皆様お着きになられた様ですので、少々早いですが本題に入りたいと思います。」

右手最奥に座る少女、が皆の着席を確認するとそう切り出す。

「本日のお話は、他でもないお姉様 魔王陛下直々の『J命令をお伝えするものです。』

そつ言うと、少女 ローディアス魔王国第一王女ミリア・エメイ・レスト・ローディアスは右斜めに置かれた椅子に視線を向ける。

長机の最奥、一同を見回せる位置に置かれた一際立派な造りの椅子には、主の姿は無い。

他の出席者は皆一様に姿勢を正し、真剣な顔付きになると、妹姫の次の言葉を待つ。

ミリアは視線を一同に戻すと、今朝方のルシフエラの言葉を伝える。

「 魔族軍は、現在進めている侵攻準備を即刻中止、先の戦で我が国の領土となつた地域の復興に務めよ。尚、今後は命あるまで他国への侵略はその一切を認めぬ。」以上です。」

言葉が終わると同時に室内はざわめきに包まれる。

そんな中でも、ミリアとその向かいに座る宰相、左に座る魔王国軍総大将の三人は落ち着いた様子で座っている。

この三人は早朝にもかかわらずルシフエラに叩き起こされ、説明を受けていたためこの命令には納得済みなのであつた。

その後他の貴族達への説明を丸投げされ、三人で頭を悩ませたのであるが。

結局命令をそのまま伝え、質問や異議があればその都度説明しそうという事に決まって現在に至るのであつた。

「私の領地には人間も暮らしております。もし他国への侵攻が中止されるというのであれば、今後の統治もし易くなりこの決定は大変ありがたい事です。その様に領民へとお触れを出しても宜しいのですな？」

最後に入室した壮年の男性が確認の為に質問をする。

元々領民に人間も抱える彼は、他国への侵攻には消極的だったのだ。

今回時間ギリギリにやつて来たのもその意思表示の様なものであった。

「ええ、ファルスト卿。尤も、終戦宣言を受けて他国がどう出るかにもよると思いますが、陛下の方針としては決定事項のようです。」

ミリアの答えに男性と、その他の戦争消極派の面々はホッと息を吐く。

元々魔王国に暮らす人間はともかく、先の侵攻で得た領土に暮らすのは殆ど人間なのだ。

そこを『えられた貴族にとつても、これ以上の戦争の継続はありがたくない事であった。

しかし、戦争の終わりを喜ぶ者がいる一方で、それを認められない者達も当然ながら存在した。

「ミリア王女！陛下が即位されてから我が国は連戦連勝を重ねてあります。何故この様な時に…！」

下座に近い席に座る一人の男性が立ち上がると、声を荒げてミリアに意見する。

「陛下が即位されてから早三年。以前の領土を奪い返した他にも、度重なる侵攻で周辺国の領土をも吸収し以前にも増して國土は広がった。それでは不満かね？」

その声を途中で遮る様にして魔王国軍総大将アーハム・ウイクト・

イベルト公爵が発言を被せる。

白髪が混ざり始めた薄緑の長髪を後ろに撫でつけ、歳による衰えを微塵も窺わせない初老の偉丈夫は、口元に蓄えた髭を撫でながら眼光鋭く発言者を睨め付ける。

「し、しかし、国を富ますには…。」

睨み付けられた男性は顔を青くしヒツと短く悲鳴を上げるが、尚も食い下がろうと発言を続けようとする。

今まで大した活躍が出来なかつた彼は、領地を増やす事が出来なかつたのだ。

「…」で戦争が終わつてしまえば最早領地を増やすのは絶望的だらう。

「戦をすれば人的、金銭的問わず莫大な損害が出るのだよ。当然、戦場となつた領地の復興にもな。復興を遅らせれば治安が悪化し都市の生産性が落ちるばかりか、元人間領であれば反乱すら起きかねん。鎮圧に更に損害を重ねるのかね？ 一切の損害を出さず、領地を治め、更に他国を侵略出来るという案があるならば考えぬでもないが…。卿が単騎で進軍でもするかね？」

続く言葉は今度は宰相デイラン・ロット・マグナクト公爵に遮られる。

濃紺の髪と同色の瞳を持つこの壯年の宰相は、しかし文官とは思えぬ引き締まつた体躯を持つている。

『健全な精神は健全な肉体に宿る』が持論のデイランは、心身を鍛える為と政務の合間に武術の鍛錬にも励み、彼を知らぬ者が見れば武官と間違えてしまうだろう。

政治手腕にも優れ、文武両道を地で行く故にアーハムと仲も良く、ルシフェラやミリアにも信頼を置かれている魔王国の重鎮である。

「し、しかしですな！今日は召喚に失敗したようですが、この後万が一にもエルトリア王国が勇者を召喚しようものなら、我が国の被害は甚大なものになるのですぞ…」

二人の重鎮に言葉を封じられた男は、顔を赤くしながらも続ける。

しかし、その言葉はその場の人物にも不安を与えたようで、室内が再びざわめきに包まれる。

それを見た男は一矢リと口の端を歪ませ話を続ける。

「ナリならぬ為にも一刻も早く攻め滅ぼすべきですー。」

得意氣になつて言つ野にミリアは小さく溜め息を吐くと、ルシフロウからもたらされた情報を伝える。

「陛下からもたらされた情報によると勇者の冒険なら成功しているそうですよ。何でも、陛下に並ぶ力量を有しているとか。」

そのミリアの言葉に室内は騒然となる。

「やはり早々に攻め入るべきだー」や、「いやいいは様子を見るべきだー」等の意見が聞こえてくる。

「静瀧」

騒がしくなつた室内を一声で黙らせるヒューランは説明を始める。

「先日、陛下が訪れた都市で召喚に失敗したと噂された勇者と出会われたそうだ。しかし勇者は魔族と事を荒立てるを良しとせず、魔族が人間へ害を加えぬ代わりに魔族に対しても害を加えぬ事を陛下と約定されたそうである。陛下自らされた約定を臣下が破るは陛下、

ひいては魔族の誇りに泥を塗る」といふ。「

室内に集められた一同は皆困惑の表情を隠せないでいる。

先程の男も言葉を失っていた。

無理も無い、トニアは内心溜め息を吐く。

何しろルシフエラから直接説明された時は、不敬と思いつつも三人共俄には信じられなかつたのだ。

その誠実さから三人からも信頼を置かれているルシフエラの侍女、リースリストもそれを認めた為に何とか事実であると理解出来たのだ。

主君であるルシフエラより侍女のリースリストの言葉の方が信用されるというのもどうかと思うが。

男は次の言葉を告げられず、顔を歪ませながら席に着く。

「この約定により人間や勇者に危害を加える事はありません。複数の勇者を召喚出来ない状況で、もし魔族に理解ある現勇者が亡くな

ればどうなるか。事の重大さはお分かりですね？他に意見はござりますか？」

男が席に着くのを確認し、ミコアが話を進める。

しかし、侵攻派もこゝまで言われてしまっては反論を述べる事は出来なかつた。

消極派は口には出さずとも、この約定については歓迎だ。

勇者の脅威に晒される事も無く、侵攻も無ければ領地での政に一層専念出来る。

「意見が無い様ですのこれにて解散とします。お疲れ様でした。

ミコアがそう言つて、皆挨拶を述べて席を立ち部屋を後にする。

後にはミコア、ディラン、アーハムの三人が残された。

「…そして、これからどうなるのでしょうか。」

他の面々が退室するのを待つてミリアが口を開く。

「これから、今回の会議の様子から今後の予定を考えなければいけない。」

「侵攻消極派の貴族はほぼ全てがこの決定に従つと考へて良いでしょう。誰も進んで領内に火種など抱え込みたくは無いでしょうからな。」

ミリアの言葉にアーハムが答える。

「ならば侵攻推進派をどうするべきか、なのだが。

「推進派の連中の動向は私の部下に探らせましょう。情報収集中に長けた人材がありますのでな。」

推進派の動向調査にはディランが名乗り出る。

優れた施政者でもあるディランは情報収集力に長けた人材も密かに育てている。

その事実を知っているのはルシフュラ、ミリア、アーハム、リース

リットのみなのだが。

「ではティラン、よろしくお願ひします。集めた情報は纏めつつ、逐一お姉様に報告という事に致しましょう。幸いリースリットお姉様はこまめに戻つて下さるそうですので。」

幼い頃からルシフェラの侍女として教育され仕えているリースリットは、ミリアにとつて友人であり姉のような存在なのだつた。

こうして、ルシフェラの急な決定による会議は終わりを告げた。

「準備は出来たか！」

エルトリア王国王城にある玉座の間で、国王コーリスは目の前で片膝を付いている魔術師団長レイファスに確認をする。

コーリスは端から見ても判るほど焦つていた。

魔族の侵攻が近いと報告されているの」「三日前の召喚の失敗。

それだけならまだ良かった。

攻められて領土を僅か奪われても、次の侵攻までの間が出来る。

失敗した当初はその間に再度召喚の準備を整えるつもりであった。

しかし、今では事情が変わってしまっている。

箝口令を敷いていたにも関わらず、周辺国にまで情報が回ってしまっていた。

この事が魔族にまで知られればこれ幸いと一気に攻め込まれかねない。

現魔王ならばそれ位余裕を持つてやってくれるだろう。

「ハツ、仰せの通りに。魔術師も先代勇者様を召喚した当時の人員と魔術師団でも屈指の者達を揃えました。」

レイファースは片膝を付いたままコーリスへと報告をする。

コーリスの懸念はレイファースも考えていた事であるため、人員の選別も必死に考えた。

魔術師団長の名にかけても今度こそは失敗してなるものかという意気込みもあった。

「良し、今度こそ儀式を成功させるのだ！」

コーリスの命令を受け、最後の確認をする為に儀式の間に向かうレイファース。

コーリスも儀式を見る為に玉座の間を後にする。

「今回は万全を期す為、意識を統一する為の訓練をし魔力量も先代勇者様を召喚した時と同量と致します。」

レイファースは儀式の間に現れたコーリスにそつ説明をすると、儀式の最終確認に入る。

呪文の確認に始まり各自の魔力量、立ち位置に至るまで慎重に確認をする。

全ての確認を終えると、コーリスに儀式の開始を告げる。

「始めよー。」

コーリスの命令と共に呪文の詠唱が始まる。

魔法陣に魔力が流し込まれ、魔法陣が輝き出す。

儀式が進み流し込まれる魔力が増えると、魔力が魔法陣を中心に渦を巻き魔力の嵐が再び広間を襲う。

間近で魔力の激流にあてられた魔術師達の顔色が蒼白になり、額には脂汗を浮かべているが今回は倒れる者は居なさそうである。

儀式が進むにつれ、魔法陣は一層輝きを増し、魔力の嵐は室内を蹂躪する。

そして、最後の呪文が唱えられると溢れていた魔力が魔法陣に収束し、魔法陣の光が爆発する。

（「、今度こそやったぞ……」）

目を瞑つても防ぎきれない圧倒的な光量に包まれながら、レイファスは今度こそ儀式の成功を確信した。

やがて光は收まり、視力を回復させたコーリスと魔術師達は恐る恐る魔法陣を確認する。

そして、魔法陣の中心には

またしても誰も居なかつた。

「何故だ!? 一体何がいけない!」

思わず叫んでしまつレイファス。

今回は完璧だつたはずだ。

人員は先代勇者召喚に関わった経験者と、足りない分は大規模魔術の行使にも慣れた熟練者で補つた。

呪文の確認や意識の統一も一日間とは言えみつちりと訓練を繰り返した。

魔力量も許容量は超えていないはずなのだ。

失敗する理由が見当たらなかつた。

周りを見回すと、他の魔術師達も呆然と魔法陣を眺めている。

「失敗…、なのか…？」

声のした方を向くと、ユーリスが呆けた顔で魔法陣を眺めていた。

そこには以前の精悍さは微塵も感じられなかつた。

「も、申し訳ございません！我々の力不足で…！」

レイファスを初めとした魔術師達は膝を付いて謝罪をするが、ユーリスは聞こえなかつたかのように反応せず、ふらふらと儀式の間を後にする。

儀式の間は沈黙だけが支配した。

「お父様…、ビウしたのかしら？…あつ…！」

王城の最上階にある一室で、窓際に置いた椅子に座つた少女が呟いた。

ピンクの髪をサイドアップで纏め、大きな眼は城下の街並みを移している。

フリルがふんだんに付けられた薄ピンクの可愛らしいドレスを着た少女 エルトリア王国第一王女イリス・ユーリア・イヴァリア・エルトリアは、先程すれ違つた父王ユーリスの変わり果てた姿を見て疑問に思うも、直ぐに原因に思い至つた。

「…ああ、勇者様の召喚にまた失敗したのか…。『今度…』
つて意気込んでたものね。」

イリスは苦笑しながらせりふ呟く。

しかし、イリスとしては内心ホッとした事だった。

姉が先代勇者に嫁ぎ、先代勇者亡き後、次代の勇者に嫁ぐべく教育
を施されて来たが、イリスはまだ14だ。

自分でも結婚はまだ早いだろ?と思つ。

しかも会つたことも無い人物との結婚なんて認めたくは無いのが乙
女心と言つものではないか。

そんな夢見る乙女な王女様は。

「…さて、いい天気だし—城下をお散歩(お城を脱走)してこよう
かな!」

にこやかに笑いながら脱走宣言するのだった。

フォートリア大陸西にあるギロード山脈は、大陸を南北に走る巨大な山脈である。

その山脈の一部にある巨大な洞窟の中、これまた巨大な石造りの玉座に、小柄な少女が座していた。

見た目十歳程度の少女の真紅の髪には蒼、緑、黄色が混じったような不思議な色合いをしており、瞳の色は黄金だった。

「ほひ、エルトリア王国が再び勇者の召喚をしようとした…？ククッ、先日失敗したばかりと書つに懲りぬの？」

少女は目の前にいる配下の報告に苦笑をする。

「はっ、如何なさいますか？神龍様。」

配下は片膝を付いたまま長に訊ねる。

「ククッ、何時も通り放つておけ。どうせ失敗じゃあいいの。」

「は…、失敗と申しますと…？」

配下の男は長の言葉の意味が今一理解出来ていなつだ。

「まあ、気にせねばかり。直に判るじゃねえ。下がつて屁こべ。」

長が話しあは終わりとばかりに手を振ると、男は意味を理解しよつと頭を捻りながらも一礼し、退室する。

「魔王國のじやじや馬王女　いや、魔王に即位したんじやつたな。あ奴も面白に動きをしこりみじやのつ…、ククッ。」

少女は東の方角に視線を向けながら今度は楽しそうに笑うのだった。

幕間1 とある者達のお話（後書き）

後々登場するかも知れない人物達が出てきました。

どう話に絡んで来るかは作者にも不明ですが。
キャラとかこの話考えたの今日なんで…。

しかしユーリス王の道化ヒロつぶりがどんなにも無い事に…。

そして神龍様が妖怪キャラ被り…。

主に喋り方。

因みに口りが多いのは作者の趣味です。

お姉様系が欲しい方は言つて下さい。

頑張つて考えますんで。

それではまた次回の更新です。

第10話 街への帰還と不機嫌な魔王様

森の木々の隙間から差し込む朝日を浴びて、宗太の意識が浮上する。

重い瞼を僅かに開くと、数日前にも見た蒼と白、そして緑。

「…知らな…。」

「お田覚めですか？ソータ様。」

最早色んな所でテンプレ化しつつある台詞を呴こうとしたが、宗太が起きた事に気が付いたリースリットによつて遮られてしまった。

（悔しくなんか無いもん…コレは心の汗だもん…）

目から熱い液体をこぼしながら、そう心の中で言い訳する。

「…お早う、リース。」

「お早うございます、ソータ様。もう少しで朝食が出来上がりりますので、もう暫くお待ち下さい。」

宗太が挨拶をすると、リースリストも返してくれる。

見ると朝食を作つてゐる最中のようだ、焚き火の上に鍋を固定し、お玉で中身をかき混ぜていた。

食欲を刺激する良い匂いが漂つてくる。

固くなつた身体を解す為に伸びをしようと、身を起こそうとする宗太だったが、左腕が動かさずに再び倒れ込んでしまう。

「な、何だ！？」

突然の事に混乱する。

左腕に意識を向けるが、動かない所か感覚すら無かつた。

「…んん、むー…。」

それでも必死になつて左手を動かそうとした宗太だったが、次いで聞こえてきた甘い呻き声に思考を停止させる。

恐る恐る視線を左腕に向けると、毛布の一部が盛り上がっているのが目に入る。

何事かと寝起きで回らぬ思考で必死に考えていると、不意に左腕の膨らみが「ゴソゴソ」と動き出す。

「…んん、朝かの。お早う。」

「…お早う。」

「…やら今朝もルシフュラが潜り込んでいたようだ。」

腕の感覚が無かつたのはルシフュラに血管を圧迫させていたせい。

ルシフュラが動いた為、血が巡り始め腕が痺れる。

「…何で今日も潜り込んでんだ？」

宗太は痺れを取るように左腕をさすりながら訊ねる。

「…んむ？」

ルシフュラは未だ寝ぼけているようで、皿を擦りながらぼつぼつしている。

「申し訳ありません。毛布が一枚しかありませんでしたので、ソータ様ど」一緒にさせて頂きました。アンジエリーナ様から毛布をお借りするのも可哀想ですし…。」

寝ぼけているルシフュラに代わってリースリストが宗太の疑問に答える。

アンジエリーナの方を見ると、寒く無いようじつかりと毛布にへるまれている。

なる程、朝は微かに肌寒い。

まだ幼いアンジエリーナから毛布を剥がすのも可哀想だ。

しかし、宗太は異性として見られていないのだろうか？

そう考へて若干悲しくなるのだった。

「それなら別に俺は毛布無くても良かつたんだけど。」

「そういう訳にはいきません。ソータ様はお怪我をされていたのですから、身体に障ります。」

宗太が気を取り直してそう言つたものの、それは即座にリースリストに否定される。

「それはそうと、お身体の方はもうよろしいのですか？」

リースリストに訊ねられ、宗太は身を起こして伸びをすると身体を軽く動かしてみる。

毛布を敷いていたとはいえ、固い地面に寝ていたため少々身体が固いが特に問題は無さそうだ。

「うん、もう大丈夫みたい。痛みも全く無いし。」

「全く呆れた回復力じゃのう…。」

宗太がそう答えると、寝起きの頭からようやく回復したルシフュラが呆れ顔で言つてきた。

宗太自身そう考えていた為何も言い返せなかつた。

「それは良かったです。それでは朝食に致しましょう。」

リースリットは微かに笑つてそう言つと、アンジェリーナを起こしに行く。

何やらタベからリースリットの表情が柔らかくなつてゐる気がする。

今まで表情を顔に出さない事の方が多かつた気がするのだが、打ち解けられたと考へても良いのだろうか。

ルシフュラもそれに気付いてゐるのか、笑みを浮かべてリースリットを見ていた。

「で、これから街に戻るんで良いんだよな?」

リースリットから渡されたパンとスープを食べながら、今後の予定

について質問する。

「つむ、昨日の内にマッシュド・ハウンドから素材は剥ぎ取つておいたしの。」

同じく朝食を食べながらルシフーラが答える。

リースリットがアンジェリーナを起こした後は少々大変だった。

宗太を見たアンジェリーナが抱き付いて泣き出してしまったのだ。

昨日もアンジェリーナを庇つて傷付いた宗太に対して、自分を責め続け宥めるのが大変だつたらしい。

再び自分を責め出したアンジェリーナを三人で宥め、先程ようやく泣き止んでくれたのだつた。

朝食を食べている今も若干目が潤み、腫らしている。

「マッシュド・ハウンドは良いんだけど……、アレは？」

宗太が指差した方向には二メートルを越す巨体が横たわっている。

所々傷があり、流れた血は固まっているようだ。

首から頭頂にかけて風穴が空いているのは、宗太の聖剣によるものだろう。

「む？ ああ、アレはこのままギルドまで運ぼうと思つ。」

ヘル・ハウンドの死体をチラリと見やつたルシフュラがそう答える。

「んな！？ あんなの持つてつたら街中で軽くパニックが起くるぞ！？」

一体ルシフュラは何を考えているのか。

宗太は起ころうと騒動を考えて頭が痛くなるのを感じた。

「ククク、騒動などギルドの連中にどうにかさせれば良い。あ奴等の怠慢でコッチは怪我人まで出たのじゃ。宗太だつたからこそ軽い怪我で済んだが、他の冒険者連中だつたら確実に死人が出ていた問題だつたんじやぞ？ あれがアンジーだつたら…。Bランク程度の冒

険者パー・ティーなら全滅すらあり得た。」

そう答えるルシフェラは不機嫌そうだった。

リースリットも今回は文句も無いようで、静かにスープを飲んでいる。

こちらも表情にこそ出してはいないが、怒っているような雰囲気を出していた。

宗太としても、こういった問題が起きなくなるならそちらの方が良いと考えた。

ヘル・ハウンドから受けた突進の衝撃を思い出し、本当にアンジェリーナが無事で良かつたと思つ。

食事が終わると、リースリットが魔術で出した水で鍋や食器を洗つ。そのまま焚き火に水をかけて火を消すと、鍋や食器、毛布を影に収納させる。

魔術便利過ぎるだろ。

「で、コレを運ぶのか…。」

宗太は試しにヘル・ハウンドを押してみる。

動かせなくは無いが、ロングホーン・ボアと比べると大分重い。

といふか、重量よりも前が見えない方が問題か。

「1Jの程度、三人で持ち上げれば訳ないじゃ ろ。」

ルシフュラはそう言つて、頭部を掴むと持ち上げる。

リースリストも後ろ足の方を掴み、同じ様に持ち上げた。

一体どんな筋力をしているんだろうか。

宗太は疑問に感じながらも、脇腹の下に潜り込むと肩に乗せるように持ち上げる。

確かに三人なら問題は無さそうだ。

アンジエリーナはその様子を目を丸くして見ていた。

「では、行くとするかの。」

ルシフュラの命令と共にハーベルに戻る為歩き出した。

「お、おい、お前等！何だソレは！？」

城塞都市ハーベルの城門に近付いた頃、不意に前方から声をかけられた。

宗太が何事かと視線を向けてみると、数人の衛兵が困惑した表情で立っていた。

彼等はイーヴルニスの森から近付いてくる黒い塊を確認して、待機していたのだった。

中にはモーリスとロイドの姿もある。

「見て判らぬのか？ヘル・ハウンドの死体じゃが。」

ルシフュラが事も無げに答える。

「そういう事を聞いてるんじゃない！ソレをどうあるのかと聞いてるんだ……。」

衛兵達は困惑を強めて問い合わせをする。

こんなモノが街中に持ち込まれれば、市民が混乱するのは確実だ。それ位判るだろ？』、ルシフュラは何が問題なのかと言いたげな表情をしているのだ。

『ギルで受けた依頼での、『マッシュ・ハウンド一〇体の討伐』。その素材を貰い取つて貰うのじゃよ。アンジーの兄上殿は知つておるじやろ？』

宗太達はヘル・ハウンドをその場に下ろし、ルシフュラがロイドを見ながら衛兵に答える。

衛兵達の視線がロイドに集中する。

「あ、ああ…。確かに昨日依頼書を確認したが、どうしてヘル・ハウンドが…？」

ロイドはそれを認めるが、困惑の表情はそのままだ。

「マッシュ・ハウンドを9体倒した後、その群れのボスだったヘル・ハウンドに襲われました。お陰で初心者のアンジェリーナ様が危険に晒されました。ソータ様が身を挺して庇われた為大事には至りませんでしたが、コレは依頼内容の確認を怠ったギルドへの抗議の意味でもあります。どうかこのまま入城を認めて下さい。」

リースリットが一步前に進み出ると、そつそつとお辞儀をする。

「アンジー…、怪我は無かつたのか！？」

「う、うん、ソータさんが護ってくれたから。」

リースリットの言葉を聞いたロイドが、顔を青くしてアンジェリーナに詰め寄る。

アンジェリーナはビックリしながらもうつ答えた。

一方モーリスは信じられないモノを見たような表情をしていた。

ヘル・ハウンドはAクラスの熟練冒険者でも十数人、一般兵なら五十人以上で漸く討伐出来るような魔獸である。

それをたった四人、しかもDクラス一人にFクラス三人という新米冒険者パーティーが討伐したという。

更には男女三人でその巨体を運んで来たのだ。

「お前等は一体…。」

「なに、只の新米冒険者じやよ。」

モーリスの呟きにルシフェラはさうだけ返すと、通行書を渡す。

「では、コレはこのまま運ばせて貰うぞ?」

ルシフェラはそう言って再びヘル・ハウンドを掴む。

宗太達もそれに続いて持ち上げると、畠山としている衛兵達を横目に城門を潜る。

衛兵達は呆然とそれを見送っていた。

ギルドまでの道のり、西門から続く大通りに居る人達は、皆一様に宗太達を見て目を見張っていた。

高ランクの魔獣をたつた三人で持ち運び、しかもその内の一人が少女なのだ。

気にするなという方が無理だろう。

「クククッ、皆注目しておるよつじゅのう。」

そんな中、ルシフェラは楽しそうに笑っている。

宗太としてはここまで反応とは予想外だった。

何せモーゼよろしく人の波が割れて行くのである。

進みやすくなるのだが、奇異の視線が刺さつてイタい。

「あう…、恥ずかしいです…。」

アンジェリーナは耳まで真っ赤にして、恥ずかしそうに毛皮に顔をうずめてこむ。

割れた人垣の中央を歩いていくと漸くギルドに辿り着く。

ギルド前には騒ぎを聞きつけた職員が数人立っていた。

職員は顔を青ざめさせてヘル・ハウンドを眺めている。

「ギルドの職員じゃな?」の魔獸を買いたいのじゃが…。

」

ギルド職員の姿を認めたルシフューラがそう話しかける。

「…、ココですか…?」

ギルド職員が恐る恐るとこつた風に訊ねてくる。

「つむ、昨日受けたBランクの依頼の素材、じゃ。」

ルシフュラがBランクという部分を強調して答へると、職員はギヨツとして慌て出す。

「か、買取りの交渉等は中止」対応をさせて頂きますので、ビリヤーナチラへ。」

「では、せうせむと貰つてしまつかの。」

ギルド職員はにこやかに対応するが、額には汗をびっしりと浮かべていた。

対するルシフュラは意地の悪い笑みだ。

職員に促されるまま、素材搬入出用の裏口から中に入る。

「…それで、Bランクで受注した依頼で何故かヘル・ハウンドが出てきたんじゃが、どういう訳か説明しては貰えるのかの?よもやヘル・ハウンドのランクが下げられた訳ではあるまい?」

ギルドの買い取り室の床にヘル・ハウンドを置くと、ルシフェラが手を組めて腕を組み問い合わせる。

「そ、それは…。」

「確かに依頼内容の確認はギルドの義務じゃったよな?森の入り口におつたのはヘル・ハウンドを入れて丁度10体じゃった。ヘル・ハウンドの討伐はAからSランクに分類されておつたと記憶しておるのじゃが。『チラはオヌシ等の怠慢で危うく死人が出る所じゃった。』

「

ルシフェラからフレッシャーといつか最早殺氣といつても戻いモノが放たれる。

フレッシャーに近づかれギルド職員達は顔を青ざめさせてくる。

やはりリースリットも止める気は無いようだ。

無作為に放たれてる所為でアンジョンーナまで顔を青くしているのだが。

「ルシフュラ、ちょっと落ち着け！」

仕方がないので宗太が止めに入る。

ギルド職員はびりでもいいが、これ以上はアンジェリーナが心配だ。

「…む、」

ルシフュラは口を尖らせながらも落ち着きを取り戻す。

ホッとしたのか、数名の職員はへたり込んでしまっていた。

本気じゃないとは言え魔王の殺意を受ければ当然か。

「えっと、そちらのミスで我々が危険に陥ったのは事実ですので、今後この様な事が無いように徹底して頂きたいのですが。」

宗太が出来るだけ柔らかくそう言いつと、職員達に一斉に謝罪された。

その後、職員にギルドカードとマッド・ハウンドの素材を渡し、査定等が終わるまで表の椅子に座り待つ事にする。

「しかし、話し合いで殺氣を撒き散らすってのははどうよ？アンジーまで巻き込んでたぞ。」

「…ふん、アレでも大分手加減してやつたのじゃぞ。」

宗太が苦笑しながらルシフュラに言つと、不機嫌そうな答えが返つてきた。

「しかし、アンジーまで巻き込んでしまつたのは儂の不注意じゃつた。済まんかったの。」

「いえ、気にしてません！ソータさんやあたしの為に怒つてくれたのは嬉しかつたですし。」

姿勢を正したルシフュラの謝罪に、アンジェリーナは笑つて答える。

注意はしたもの、宗太としても大事に思つてくれているのだと感じられて嬉しかつた。

宗太達が話していると、女性職員がテーブルへと近付いてくる。

そちらに向くと、職員は一礼してから話し始める。

「お待たせ致しました。買い取り金額と依頼報酬ですが、金貨八枚になります。口チラの不備で皆様にご迷惑をお掛けしてしまった為、本来の報酬相当額に少しばかり上乗せさせて頂きました。」

そう言ってコインの入った袋をテーブルの上に置く。

「次にランクの方ですが、皆様をAランクにするべきとの意見も出たのですが、なにぶん前例の無い事ですのでそれぞれ2ランクアップという事にさせて頂きました。」

今度はギルドカードが四枚置かれた。

宗太が自分のカードを確認してみると、ランクがBになっていた。

まさか依頼一回でBランクになるとは…。

「今後この様な事が無いように徹底させて頂きます。申し訳ありませんでした。」

最後にもう一度礼をする職員は、もつ氣にしていないと言つて席を立ち、ギルドを後にする。

ユースとの約束までまだ時間がある。

少しゆつくりと休みたいと思いながら、宗太は暫く宿屋に戻る事にしたのだった。

第10話 街への帰還と不機嫌な魔王様（後書き）

今回はあまり話しが進みませんでしたね、済みませんです。
え、何時も通り？

最近携帯のバッテリーがヤバい事に…。

ネット接続すると二十分経たずに電源切れます。
出先で投稿後の修正が出来ないorz

まだ一年しか使って無いのに…。

愚痴ばかりでもアレなので、嬉しかった事を。

今日確認したらお気に入りが60件越えていました！
読んで下さってる方々ありがとうございます！

それではまた次回の投稿で。

第11話 パパの暴走と短剣の購入です！

宿屋の前、扉を開けるのを躊躇い宗太はつい立ち止まってしまった。

「む、む、何とも陰湿な気配が漂つて来ておるのう。」

ルシフエラも扉を見ながら若干引き気味だ。

今後の予定は宿屋に戻つてから決めようという事になり、ルシフエラ達から魔術の応用技などを教わりながらギルドからの帰路についたのだが、宿屋の入り口からは何とも暗いオーラが出ていた。

通行人も異様な雰囲気に宿屋の前を避けるようにして歩いている。

「何か凄く開けたくないんだけど……。」

「うむ、何やら扉の前に居るだけで不幸になりそうじやのう。」

「こうよりも嫌な予感が犇々と……。」

一同が躊躇つて居ると、ドタタタと何かが走つてくる音がし、バタ

ンと扉が吹き飛びそうな勢いで開け放たれた。

「アンジー……」

現れたのは宿の親父さんだつた。

皿の下には隈が出来ている。

おそれりくタベは睡眠を取つていないのであります。

「アンジー、何故タベは無断外泊なんて……心配したんだぞ……」

「パ、パパ！？ ちょっと落ち着いて……！」

親父さんは扉を開け放つた勢いそのままに、アンジェリーナを抱き締めるとまくし立てる。

何という親バカつぱりだろ？。

アンジェリーナは突然の出来事に困惑している。

「ちゅうと落ち着いてトセー。」

話が進まないと感じた宗太は、とりあえず親父さんを落ち着かせる事にする。

「お前は……。」

漸く親父さんは宗太の存在に気付いたようである。

「……そ、うか、貴様がアンジーを誑かして……。」

そつまつと、包丁を握り締め宗太に向き直る。

とこりか、包丁なんて何処に持つていたんだ？

「お、親父さん！？」

「貴様なんぞに義父呼ばわりされたくないわっ……！」

「意味が違う！？」

宗太が頬を引きつらせて一歩後ずせると、親父さんが田をせりつかせて切りかかって来た。

目が血走つて恐い。

てか、本氣で切りかかって来た。

親父さんも元冒険者だったのだろうか、宗太は繰り出される鋭い斬撃を必死になつて避ける。

ルシフュラとリースリットは親父さんの動きを感心した様に見ている。

見てるだけじゃなくて止めて欲しい。

「そ、ソータさんに酷い事しないでつて言つたでしょ！？パパなんて大っ嫌い！」

不意に我に返つたアンジェリーナが叫ぶ。

すると、親父さんは包丁を振り上げた体勢のまま固まってしまった。

やはり溺愛する娘の一言の威力は絶大だつたよつだ。

「いい加減にしな！－！」

追い討ちをかける様に「ゴツ」と鈍い音が響き、親父さんが地に倒れ伏す。

いつの間にか親父さんの背後に居たおかみさんが、手にお盆を持つて立っていた。

それにして、お盆の角でフルスイングとまねげつない…。

親父さんは頭から血を流してピクピクと痙攣していた。

「ううむ…、とんでもない親バカつぱつじゅのう…。いや、バカ親か…？」

ルシフュラが顎に手を当て親父さんの評価を下す。

「先代陛下も似たようなモノでしたが…。」

リースリットの言葉は明後日の方に向いて聞き流すルシフェラだつた。

「全く、ウチのバカ亭主が済まないね。怪我は無かつたかい？」

「いえ、大丈夫です。それより親父さんが…。」

おかみさんの言葉に苦笑いで返すと、親父さんの方に視線を向ける。

流れる血の量に比例して痙攣も弱々しくなつていて。

…死なないよな？

「あつはつは、コレくらいじゃこの人は死にやあしないさ。それより依頼の方はどうだつたんだい？一日で終わらなかつたつて事は結構苦労したのかい？」

宗太の心配を笑い飛ばすと、おかみさんが訊ねてくる。

親父さんは心の中で手を合わせておへりとする。

「いや、ソータがヘル・ハウンド戦で少々負傷しての。大事を取つて一晩休んでおつたのじや。」

「ヘル・ハウンドだつて…？奥へ無事に戻つて来れたね。」

ルシフニアの返答におかみさんは驚愕に皿を開く。

「ソータさんがあたしを庇つてくれて…。ヘル・ハウンドを倒したのもソータさんなんだよ！」

アンジエリーナの言葉におかみさんは感心したような表情で宗太を見る。

アンジエリーナは毎度の事ながら頬を染めて見ていた。

「いや、咄嗟の事で…。それにアンジーも凄かつたんですよ。マッシュ・ハウンド三体に怯む事無く立ち向かつてましたから。」

宗太は羞恥ずかしさを覚え、頭を搔きながらアンジエリーナを讃める。

「つむ、アンジーも現在の力量はBランクに相応するじやつだ。
経験をえ積めばA、いやSにも直ぐに届くじゃねつ。」

ルシフュラも昨日の戦闘を思い返し、やつ語する。

宗太とルシフュラに誉められ、アンジエリーナは氣恥ずかしそうに、
しかし嬉しそうに笑みを浮かべる。

「やうですね。確かにアンジエリーナ様がロランクと云うのは過小
評価が過ぎると思います。ギルドの決まりと言われれば仕方の無い
事ではありますか…。」

「へえ、アンジーはロランクになつたのかい？…ああ、ヘル・ハウ
ンドとマッシュ・ハウンドの群れを討伐したなら数ランクアップも當
然かねえ。」

リースリットの言葉におかみさんは驚き、しかし納得したという風
にアンジエリーナの頭を撫でている。

嬉しそうに頬を緩めて撫でられているアンジエリーナに、その場に
和やかな空気が流れれる。

：地面の親父さんを除いて。

「おお、そうじゃった。儂等もここで宿を取りたいのじゃが、部屋は空ておるかのう？」

ルシフェラが思い出したよにおかみさんに訊ねる。

「空いてるよ。一人部屋が角銀貨五枚、二人部屋は八枚だけどっちにするんだい？」

「二人部屋で頼む。代金は…、ソータ、頼めるかの？」

「そう言えばまだ報酬を分けていなかつたなと思い、宗太が代わりに代金として角銀貨一枚を支払う。

「はい、確かに。アンジーが世話になつたんだ。今夜はご馳走を作らせて貰つよ。」

おかみさんはにこやかにそう言つと、親父さんを引き摺つて宿の中に戻つて行つた。

「…哀れな親父殿じやの。」

その様子を見て、ルシフュラがポツリと呟く。

場には微妙な空気が流れた。

四人は宿に入ると、少し早めの昼食を取りながら今後の予定について話し合つことにした。

「報酬だけど、きつちり金貨八枚だから一人一枚ずつで良いかな?」

宗太は報酬の入った袋をテーブルの上に置く。

「いや、儂等はどうせ一緒に旅するのじや。纏めておいても良いじやわつ。アンジーは…。」

「あ、あたしはそんな大金受け取れません!それに倒したのは皆さんだし…!」

ルシフュラの言葉にアンジーリーナは慌てて答える。

外食で一食100エリー前後、一泊一食付きで500エリー程度なのに20万エリーとなれば確かに大金だわ。

因みに一般人の月収は凡そ4万エリー、実に五ヶ月分である。

「でも、アンジーも頑張ったんだしあんと報酬は分けないと。」

「じゃあ、必要になるまで預かって下わー。」

アンジエーナはこの場では受け取る気が無いようである。

「…ふむ、そういうの。では必要になるまで預かっておくとするかの。」

ルシフエラは何かに気付いたのか、ニヤリと笑つと呟ついた。

「うーん…、それじゃあ一人金貨一枚ずつで、残りはリース。預かって貰えるか?」

今後何か必要になるかもしないので、報酬は半分ずつ。

残りは管理がしつかづかしそうなリストに預けておへ事にする。

「異なりました。」

リストは了解するし、残りの金貨の入った袋を影に収納する。

いつ見ても便利な能力だ。

「それじゃあ、俺は」の後ロードさんの所に寄つてからロードさん
の店に行くよ。」

「誰じや、それは？」

宗太が今田の予定を話すと、ルシフホラが質問する。

「コードセセセセは私器皿セセセセ、コードセセセセはお洋服セセセセなんです。」

「

ルシフホラの質問にはアンジホリーナが代わりに答える。

「武器屋に洋服屋か。では、儂等も着いて行ひつか。勿論アンジ
ーカジ。せじ。」

ルシフュラの言葉にアンジエコーナは不思議そうに首を傾げる。

「アンジーには魔導書があるが、それ以外にも護身用の武器が必要
じやいひ。咄嗟の危機回避にはそういう物の方が有効な場合もあ
るしの。」

ルシフュラがそう言つと、アンジエリーナも納得したようだ。

「はーー！それじゃあ、あたしもー一緒にしますー。」

「それじゃあ随で行ひつか。」

今後の予定も決まった事だし、さつと昼食を食べ終える事にする。

「コードとやらがどんな人物なのじや？」

武器屋への道すがら、ルシフュラが訊ねてくる。

「うーん…、何というか、山賊の頭…？」

未だに山賊というイメージが抜けきっていない宗太だった。

「ソーラさん、そんな事言つたらリードさんが可哀想ですよ。変わつた人ですけど、武器の田利きは確かだつて言われてる人です。」

宗太の評に苦笑して、アンジェリーナが代わりに答える。

「山賊で変人…、何とも関わり合いになりたくないような人物じゃのう…。」

ルシフェラは両方のダメな評価を受け止めたらしい。

「あ、此処です！」

武器屋の前に着くと、アンジェリーナが扉を開け入つていく。

宗太達も後に続いた。

「ね、アンジー。今田せどりしたんだ？」

武器屋に入ると、変な山賊こと店主のリードが四人を出迎えた。

「ソータさんが武器の修理の依頼で、あたしは護身用の武器を買いました。」

「…確かに山賊じゃの。」

「…ですね。」

リードを見たルシフ^{ルシフ}とリースリットも、宗太の評価に納得した様子だった。

「山賊じゃねえ！元冒険者だ！」

リードは出でい頭の暴言に若干怒つたよう返す。

「しかし、ボウズはもつ剣を壊しやがったのか？」「うんなんでも早過れるだろ。それにこの嬢ちゃん達は誰なんだ？」

リードは氣を取り直して話しあを進める事にしたようだ。

「… うょっと依頼でヘル・ハウンドとやつ合つ事になつまして。この二人はルシフュラにリースリスト。冒険者の仲間です。」

正直にルシフュラに折られましたなどと言える訳も無く、ヘル・ハウンドに罪を被つて貰つことにする。

ルシフュラはバツの悪そつた顔をしていた。

「ヘル・ハウンドだあ？ ボウズはまだそんな依頼を受けられるワソクじやなかつただろうが。」

「ギルドの確認ミスで、Bランクの依頼のマッド・ハウンド達のボスがヘル・ハウンドだつたんですよ。」

宗太は苦笑しながら両手剣を渡す。

「そりや災難だつたな。… 」りやウチじや直せんな。」

リードは剣を受け取ると一頻り確認し、眉を顰めてそつと呟つた。

「直せる人は居ないんですか？」

「うーむ、背中の長刀じゃ駄目なのか？まあ、直すなら北のガルズ山脈の麓にあるルーベックって鍛冶の街に居るグストってドワーフの親父を訪ねな。」

そう言って宗太に剣を返す。

ルーベックって何処だろ？

後でルシフェラ達と相談するしかなさそうだ。

「んで、アンジーは護身用の武器だつたか？」

リードは次にアンジエリーナに向き直る。

「は、はい！あたしでも扱えるような武器つてありますか？」

「… そうだな。用途が護身用のみなら短剣辺りが良いかもしけねえな。」

そつと置いて店内を移動し、手に数本の短剣を持つて戻ってきた。

「これらが無難だろう。握つてみてしつくり来るモノを選びな。」

カウンターの上に六本の短剣が置かれる。

どれも装飾は少な目で、実用性を重視したモノなのだろう。

アンジェリーナは一本ずつ手に取ると、鞘から抜き重さや握り心地を確かめていく。

暫く確認を続け、二本の短剣に絞り込んだようである。

選んだ短剣は根元が櫛状になつている方刃の所謂ソードブレイカーと呼ばれる物と、同じく方刃だが反りの大きな短剣だった。

「こいつの短剣は重さが丁度良いんですが、握り心地が少し…。こつちは握り心地は良いんですがちょっとバランスが。」

「握りなら柄の革紐を調整すればどうにでもなる。使い易い方にし

な。」

「歎むアンジオリーナはソードが助かる。

「われじゅあひかひつあ。」

リードの助言を受けて、アンジエリーナはソードブレイカーを使つ
事にしたよつだ。

「えじゅ、せき調整するかひ。」ひて來な。

リードはアンジオリーナの手を握り方の癖などを調べてこく。

「早めに調整は終わらへから、また後で来てくれ。代金はその
時で良い。」

一通り調べ、メモを取つた後リードは去られる。

「あつがとひります。それじゃあ、また後で取つに来ます。」

アンジエリーナはソード 礼を言つ。

「やつちの嬢ちやん達の武器は無いんのか？」

「儂等は既に持つてるからのう。新たな武器は不要じや。」

ルシフェラがリースリストの双剣を示して答える。

「ほら、こりゃあ見事な魔剣だなー。」

リードは軽く見ただけでリースリストの双剣の価値を見抜いたらし
い。

武器の目利きが優れているといつのは確かなようだ。

「それじゃあ、そろそろ失礼します。」

宗太達はそれぞれ挨拶をすると、コニースの店に向かつ為に武器屋を
後にした。

第11話 パパの暴走と短剣の購入です！（後書き）

急いで書き上げたんでちょっと短いかも知れません。
ごめんなさい。

それについても親父さんやらコードやらコースやらと、我ながらおっさんキャラの扱いが…。

それではまた次回の投稿で。

第1-2話 今後の予定と面倒事じゅー

「次は服飾店じゅつたかの？」

リードの武器屋を出た所でルシフュラが確認してくる。

「ああ、でも約束は夕方だつたからまだ時間があるな。」

それまでどこかで時間を潰そつか。

しかし、宗太にはこの街の事は良く分からぬ。

「それじゃあ時間まで中央広場でゆっくりしませんか？」

宗太が悩んでいるのを見て、アンジェリーナが代わりに提案してくれる。

気配りの出来る良い娘だ。

「やつじゅ。今後の旅の予定も立てねばならんしのう。」

ルシフュラもアンジエリーナの案に乗る。

リースリストも文句は無いようだ。

ルシフュラが「旅の予定」と言った時、アンジエリーナがピクリと僅かに肩を震わせる。

「やつぱり旅に出かけますよね…。」

「つむ、一所に長く留まる訳にもいくまいて。」

ルシフュラの答えに寂しそうに肩を落とすアンジエリーナ。

しかし、直ぐに顔を上げると何かを決心したような表情となつた。

宗太はそれを別れる決心を付けたという風に捉えたのだが、それは全くの間違いだつたと後になつて知るのだった。

中央広場は今日も沢山の人々が溢れかえり、一日前と変わらぬ喧騒に包まれていた。

宗太達は売店で果汁飲料を購入すると、噴水前に丁度空いていた四人掛けのベンチに腰を下ろす。

午後の陽気の中、噴水の水音が耳に心地良く届く。

「… わて、では今後の予定について決めてしまつとするかの。」

ベンチに座ると、早速ルシフェラがそう切り出した。

席順はアンジェリーナ、宗太、ルシフェラ、リースリットの順だ。

三人の美少女に囲まれて正面に両手に花状態。

さつきから通りすがりの野郎共の嫉妬の視線が宗太に突き刺さつている。

アンジェリーナはヤケに真剣な表情で話を聞く体勢になっていた。

「… そうですね、私としては王都に赴き召喚魔法陣の破壊をすべきかと思います。」

「ふむ。しかし、まだ我が国からの終戦の使者は出ておらん。今破壊工作をするといつのはちと骨じやぞ?」

ルシフュラは難しい顔をする。

魔王國との戦争真っ最中である現状、王都は特に魔族に対する警戒が厳しいのだ。

下手をすると、王城ビニウカ王都自体に入るのすら難しいかも知れない。

「勇者が居らぬ今、終戦の申し入れは問題なく受け入れられるじやろ? しかし、現段階で向かい入城審査でソータの存在が知られれば厄介な事になるやもしれぬ。」

「ツ!…申し訳ありません、浅慮でした。」

今勇者の存在が知られれば宗太は確実に拘束されるだろ?。

追い詰められた人間がどの様な手段に出るかも分からない。

下手をするとその場で一困と事を構えることにもなりかねない。

「 そうなれば一番危険に晒されるのは、現在一番力の無いアンジエリーナだらう。」

そこまでに考へが至つたのか、リースリストはルシフェラに頭を下げる。

「 良い、確かに重要な問題じやからう。しかし、急いでは事を仕損ずるとこいつ」とじや。」

「 ……はい。」

「 ……なあ、ルーベックって何処にあるんだ？」

若干重くなつた雰囲気に後込みしつつ、宗太は気になつていた事を訊ねてみることにする。

「 ……む？ ルーベックならここから北東に馬で五日程向かつた所じやが、それがどうかしたのかの？」

難しい顔で何やら考えていたルシフュラが、顔を上げて教えてくれる。

「そんなにかかるのか…。なら一度ルーベックに寄らないか？そつち経由なら王都に着くまでに使者も着いてるかなって思つたんだけど。それに剣も直しといた方が良いかもしれないし。」

「…それなら、王都に着くまで一、三週間とこつた所か。…」
「…む、良こやもしれぬ。」

「…わづですね。それなら時間としても充分でしょ。」

宗太の提案にルシフュラは少し考えるよつな仕草をすると、賛成してくれる。

難しい顔で躊躇していたリースリストも表情を緩める。

「こつ頃出発するんですか？」

出発日はアンジュリーナにとって最も気になる事だった。

予定によつては早急に両親を説得せねばなるまい。

（お家の手伝いは…、お兄ちやんに任せよつー。）

一方、ロイドはアンジェリーナがそんな事を考えているとは露知らず、今日も今日とて西門の見張りに勤しむのであった。

「セウジヤのう、あまつ長屋はせんつもりじやが…。」

そう言ってルシフュラはチラリと宗太を見やる。

元タルシフュラ達がこの街に来た目的は都市の保有戦力や防衛の穴を探し出すためだったのだ。

侵攻を中止すると決めたからこそ最早その必要もない。

出発予定日は宗太の予定によつて決めるつもりであった。

「俺は壊した部屋の弁償さえ済めばいいでも良じよ。」

「ふむ、ならば明日にでも旅の準備を整えて、ソータの用事が済み次第出発といつ事にするかの。」

「ひつして出発予定日が決められる事となつた。

「それじゃ、そろそろゴニースさんの店に行ひつか。」

宗太は立ち上がり、三人のコップを受け取ると屋台へと返しに行く。

「君たち暇?俺らと遊ばない?」

宗太がベンチを離れると、程なくルシフュラ達にそう声がかけられる。

何事かと三人が声のした方を見やると、そこには一人の若者が笑みを浮かべながら立つていた。

二人共、腰に片手長剣を佩き、軽装の革鎧を着込んでいる所を見る

と冒険者なのだろう。

しかし、剣と鎧はどちらも素人目に見ても安価と判るような物で、そこから察するにランクは高くは無さそうである。

ルシフエラは、男達の笑顔に下心が混ざつているのを見て取り、げんなりとした表情を浮かべる。

「残念でも無いが、儂等にはオヌシ等に構つていてる暇など無い。」

「まあまあ、そう言わないでさ。見たところ君たちも冒険者でしょ？ランクは幾つ？」

ルシフエラの氣のない返答にも構わず男達は話を続ける。

自分達のビームを見て冒険者だと思ったと云つただろうか、トルシフエラは思つ。

見える場所に武器を持つているのはリースリストだけ。

ルシフエラは魔剣を影に仕舞つてゐるし、アンジェリーナの魔導書はカバンの様なブックホルダーに入れられていて外からでは分からぬだらう。

そこまで考えて、ルシフエラは答えに行き着き呆れる。

（「ヤツ等、ソータが居るのを見てたのじゃな…。）

わざわざ宗太が離れるのを待つて声をかけてくるとは。

「え、えっと…、Dランクですけど。」

「アンジー、斯様な奴らにわざわざ答へてやる必要は無いのじやない？」

困った様に眉根を下げ、身体も若干引きながらも律儀に答えるアンジエリーナに、ルシフィーラは苦笑しながらも助言してやる。

「へー、まだ小さこのにやるじやん。俺らじだからさ、もつと色々と教えてあげやつよ?」

「必要ありません。それに、ランクでしたらあなた方も見ていた私達の連れ合いはBランクですので。」

リースリストも男達が観察していた事に気付いたのだらう。

男達の下心の見え透いた提案に、全ての無表情でやつ答えた。

男達の表情に僅かに動搖が走る。

「ただいま、…ってどうかしたの？」

そんな時、タイミングが良いのか悪いのか宗太が返却を済ませて戻ってきた。

「…ッ！…何でも無いよ、テメエはすつこんでる！」

宗太の声に男達は一瞬ビクリと肩を震わせる。

しかし、冴えない宗太を間近で見てリースリストの言葉をはつたりと思つたのか、脅すように怒鳴りつける。

「…は？何なんだいきなり？」

戻ってきて早々見知らぬ男達に怒鳴りつけられ、宗太は困惑が隠せないでいた。

いつの間にか、宗太達の周りには怒鳴り声を聞いた通行人達の人だかりが出来てしまつていて、

「… やれやれ、リース。」

「畏まりました。」

しつこい男達に辟易し、溜め息を一つ吐くとルシフ・ラはリースの名を呼ぶ。

それだけで主の言わんとしている事を察したリースリットは、一言だけ返すと徐に立ち上がり男達に向き直る。

「… それではこう致しましょう。あなた方と私が闘い、あなた方が勝つことが出来た暁にはあなた方にお付き合い致します。武器を抜いても構いませんよ。」

「… へつへつ、後でやつぱり状態でしたってのは無しだからな。」

それを聞いた男達は宗太を威圧するような表情から一転、笑みを浮かべると腰に佩いた片手長剣を引き抜く。

宗太だけは展開に着いて行けず、困惑を強めるばかりだ。

そんな宗太を余所に、男の一人がリースリットに切りかかる。

上段から袈裟懸けに振るわれたそれを、しかしリースリットは半身を引く事で難無くかわす。

リースリットは両拳に紫電を纏わせると、剣を振り切り無防備になつた男の脇腹に左拳でボディブローを当てる。

すると紫電が弾け、男は一メートル程吹き飛ぶと地面を転がり痙攣する。

リースリットは殴り飛ばした男に一瞥もくれずに、もう一人に向き直る。

顔を青ざめそれでいる男の横に一瞬で移動すると、右足を男の足の後ろに引っ掛け右手で胸を押す。

バランスを崩した男はそのまま地面に倒れ込むが、その瞬間やはり雷撃をその身に受け気絶する。

白由を剥き、口から泡を吹きながら痙攣、失禁までする様は見ていて同情したくなる。

「……紫電の、侍女。」

圧倒的な力で一人の男を瞬殺するリースリットを見て、あまりの光景に呆然としていた野次馬。

その中から、ポツリとそんな事を呟いた者が居た。

その瞬間、野次馬の中の冒険者や一部の市民からじよめきが起きる。

「紫電の侍女つて……。」

「……あの、ギルドの……。」

「……『ランクで数人のランク冒険者を瞬殺……。」

「あんなに若い……。」

「可愛い顔して……。」

「ハアハア、萌え……。」

ざわめきは一気に広がり、野次馬達の間でその様な会話が繰り広げられる。

一番最後のは聞かなかつた事にしよう、うん。

「…紫電の侍女とは何じや、リースの一いつ名か！？」

突然の出来事と、意味の分からない野次馬の会話に四人はただ困惑するばかりだ。

そういうしている内にも野次馬の数は増えていき、それに連れざわめきも大きくなつていく。

「…と、とりあえず逃げよう！」

一種異様な空氣に若干引きながらも、四人は野次馬の輪を突破する事にする。

幸いにも、宗太達が近付くと人混みが割れていつた為、午前中の事を思い出しながらも抜け出すのは簡単だつた。

「…何だつたんじゃ、一体?」

「…わあ?」

人混みを抜け出し南区を暫く走った後、四人はようやく立ち止まり一息吐く。

ちなみに足の遅いアンジェリーナはリースリストが抱えて走っていた。

驚き、畏敬、崇拜、様々な感情の籠もった大量の視線はある意味恐怖だ。

宗太達は揃つて頭を振り、思い出さないよつとする。

「ユニスさんの店の近くまで走つて来たんだな。」

広場での騒動があつた為、走つても丁度良い時間のようだつた。

「あれ?閉まつてゐる。」

ユースの店の前に着くと、扉に『閉店』と書かれた板が掛けられていた。

「…お出掛けしてるんですかね？ユースさん！」

アンジエリーナが扉を叩き、声を掛ける。

暫く待つと、人の近付いてくる気配の後に鍵を開ける音がし、扉がゆっくりと開く。

「待つてたよ…。」

目の下に隈を作り、疲れ切った表情でふらふらとしているユースは、さながらガンシュー・ティングゲームに出てくるゾンビの様で宗太は若干引いてしまった。

「あ、ユースさん…? どうしたんですか？」

普段の快活な彼女からは想像も出来ない様子のユースに、アンジエリーナは戸惑いの声を掛ける。

「いや、思わず一瞬間も不眠不休で作業しちゃってね。とりあえず入りなよ。」

そう言ひてユニスはふらふらと店の奥に歩いて行く。

宗太達も店に入ると、店内でユニスを待つ。

すると、ユニスは直ぐに数着の衣服を持って戻ってきた。

「まじり、上下と下着一着ずつだ。アンタの服を参考に作らせて貰つたよ。」

そう言つて差し出された服を広げてみると、白いワイシャツに黒の詰め襟、スラックスだった。

詰め襟は厚手で、スラックスと共に肌触りの良い生地が使われている。

襟前のホックは紐になり、ボタンは木製の丸ボタンになっているといつ変更点はあったが、少し見ただけでここまで再現出来る事に驚きを隠せない。

「ふうむ、良い腕じゃのう。」

服を見たルシフーラが感心したよつこ言ひへ。

「時間が無くてボタンにまで手を回せなかつたんだけど、それに金でボタンを作るとなると金がかかるからね。余裕が出来たら細工師にでも頼んでおくれ。」

「いえ、あつがどうぞります。お幾らですか……？」

宗太は礼を言つと、恐る恐る金額を訊ねる。

ボタンが普通の物でも、ここまでの物となるとそれなりの代金になつてしまつのではないだろうか。

「わうだね、全部で9000ユニー…日本円換算で7万円程度だらうか。」

9000ユニー…日本円換算で7万円程度だらうか。

「うめで上質な服ならもつと高こと思つたのだが。

「どうも。とても良い服だったので正直もつと高いものだと思つてました。」

宗太はユニースに代金を支払つと、素直な感想を述べる。

「ははは、アンジーのオトコには少しサービスだよー。」

ユニースは楽しげに笑うと宗太の背中をバシバシ叩きながら言つ。

アンジエリーナは例の如く頬を染めていた。

「で、他に用はあるのかい？」

「いえ、ありがとうございました。」

服は四着もあれば充分だ。

しかし、詰め襟四着はかさばる。

リースリットに保管を頼めるだろうかなどと考へてしまつた。

「はーい、それじゃアタシはもう戻るといふよ。」

「おつかれ、お休めなー、とボヤくコニースに苦笑しながら最後にもう一度礼を言つと、コニースの店を後にする。

宿に戻る前にもう一度リーダーの店に寄ると、早くも柄紐の調整は終わっていたようだった。

「普通のナイフと違い、ソレは細い剣なら根元の櫛で絡めてへし折る事も出来る。扱い方ならリースに教わると良いじゃん。」

「はーい、よろしくお願ひしますー。」

宿への帰り道、ルシフュラがアンジェリーナにそう提案する。

持つてはいるだけで使いこなせなければ、護身用の武器としても意味は無い。

アンジエーナは勢い良く返事をするとリースリットに深々と頭を下げる。

「それでは、暇を見て訓練を致しましょうか。」

リースリットも快諾し、微笑みを返す。

「でも、ナイフの扱いつてそんなに簡単なものじゃ無いんじゃ…？」

「当然じゃ。練習あるのみじゃな。さて、宿に着いたし食事を取つたら今日は早めに休むとしようつかの。」

そこまで訓練する時間はあるのだろうか？

宗太の疑問にルシフェラは簡単な答えを返すと話題を変える。

宿に戻ると直ぐに夕食を取る事にした。

おかみさんが言つた通り、テーブルの上には普段の宿の食事よりも豪華な料理が所狭しと並んでいる。

だが、残念ながらせつかくの豪華な料理の数々も、調理場から飛んでくる恨みの籠もつた視線が気になりゆっくりと味わう事は出来なかつた宗太だつた。

四人での食事を終え、一服した後は部屋に戻つてそれぞれ休む事になつた。

宗太も疲れを癒やす為 主に夕食時の気疲れだが 、部屋に戻ると倒れ込むようにベッドに横になり眠りにつくのだった。

皆が寝静まつた深夜、宿屋の一室に突如人影が現れる。

「戻つたか。…で、どうなのじや？」

「はい、終戦の使者は明日には送り出すようです。」

部屋に居たルシフェラが現れた影 リースリットに訊ねると、リ

ースリストがそう報告する。

リースリストは夕食後から先ほどまで、連絡役として王城まで戻っていたのだった。

「ふむ、ならば使者がエルトリアの王城に着くまで一週間と少しといったところかのう。」

ルシフエラは魔王国からの使者が着く時間を計算し、安堵の吐息を漏らす。

それだけあれば、ルーベック経由での道程なら余裕を持って行けるだろう。

「…それと、昨日エルトリアは再度勇者召喚の儀式を行ったそうです。そして、侵攻推進派の面々で此度の侵攻中止を快く思つていな者者が居るという事です。それに関してはディラン様の配下の者が探し、逐一報告致しますとの事です。」

「…ふむ、召喚の儀式は直に解決するとして、推進派の問題も対策を考えておかねばならぬかのう。」

ルシフエラはそう言って溜め息を吐く。

次から次へと、面倒事はなかなかに無くなつてはくれないようだ。

ルシフェラは窓から見える欠けた月を眺めながら考えを巡らせるの
だった。

第1-2話 今後の予定と面倒事じゅー（後書き）

やつと更新分書けた…。

もしかしてなんですが、話のテンポ悪いですか？

今回の1-2話目で漸く宗太が召喚された時から五日間が終わつた所なんですね。

そこの所はご意見、ご感想お待ちしております。

そして、前々回更新時からかなりお気に入り件数が増えてて嬉しい

やら驚いたやら。

どうもありがとうございます！

それではまた次回の更新で。

第1-3話 出発の準備と最後の散歩です

「んー……。」

窓から差し込む柔らかく朝の日差しを受けて、宗太の意識が眠りから浮上する。

朝になつた事を未だぼんやりとする頭で何とか理解すると、上体を起こし軽く頭を振る。

せつしてこの内に、何とか意識がはつきりしてきたのを感じる。

そのまま伸びをして身体を解す。

この宿で寝起きするのも少回りともなれば、木製の寝台に薄い布団が敷かれただけの固いベッドにも慣れてきた。

しかし、同時に安物ながらコツチの物よりもずっと寝心地の良かつた自分のベッドが恋しくもなつてくる。

戻れないのだから考えるだけ無駄な事なのだろうが。

溜め息を一つ吐いて元の世界の事を頭から追い出すと、そのままベッドから這い出して着替えを始める。

ワイシャツに腕を通して、ズボンを履く。

詰め襟を手に取ったところで、まだ着る必要もないかと思いつつ、コートハンガーに引っ掛けると部屋を出る。

「お早う、ルシフィラちゃん達はもう降りて来てるよ。」

一階に降つるとおかみさんが声を掛けてくる。

食堂内に視線を移すと、壁際のテーブルの一つでルシフィラと一緒にスリット、アンジエリーナがお茶を飲みながら談笑しているのが見えた。

「お早うございます。ちょっと顔を洗つて来ますね。」

「はいよ、それじゃあ朝食の準備をしておくよ。」

毎度の挨拶を交わし、宗太はそのまま裏庭に出る。

少し肌寒い、早朝の澄んだ空気が心地良く、寝起きのダルさの残る身体に染み渡る。

井戸まで歩いて行くと水を汲み上げて桶に移し、両手でくじ上げると顔を洗う。

冷たい井戸水で一度、二度と顔を洗うと漸く意識が覚醒しきった。

「…ふう。」

タオルで顔を拭い、桶の水を流し井戸の脇に立てかけると食堂内に戻ることにする。

「お早う。」

ルシフーラ達の座つてこる席まで行くと、軽く挨拶をして席に着く。

「つむ、お早う。」

「お早うございます。」

「お早」ハヤヒコです、ソータさん。お茶を淹れますね。」

三者三様の挨拶をすると、アンジェリーナが宗太の分のカップにお茶を注いでくれる。

「ありがとうございます。…それで、今日はどうするんだ？」

宗太はカップを受け取ると一口お茶を飲み、今日の予定について話しえりつけるとある。

「…」最近で恨みから殺意に変わった親父さんの視線が調理場から放たれているが、あえて意識から外すことにある。

「ふむ、やうじやのう…。旅に必要な物はあらかた揃えたから、弁償が済むまでは自由行動にでもするかの。」

ルシフュラは顎に指を当てて何やら考えると、そう提案する。

いつ出発する事になるかが分からないため、宗太達は 家の手伝いをしていたアンジェリーナを除き 昨日、一昨日と旅の準備を整えていたのだった。

保存食や水から始まり防水性に優れたマント、毛布、天幕、薬など旅に必要と思われる物から、お茶やお菓子などの嗜好品、何故かテーブルや椅子まで。

すべて含わせると結構な量になるそれらは、しかしこの宿のどこにも置かれていない。

大荷物を抱えての旅を思い、憂鬱になる宗太を後目にすべてリースリットが影に収納してしまったのだった。

闇属性は旅人向けの属性なのではないだろうか。

宗太の持つ光属性も似たようなことを出来るという話だったが、残念ながら宗太はまだ光属性の魔術を覚えていない。

唯一使えたのは聖剣くらいのものである。

「あ、そのことでしたら…。」

「お待たせ、朝食だよ。」

アンジエリーナが何やら言いかけたが、丁度朝食を運んできたおかみさんの威勢の良い声に遮られてしまった。

「ああ、そうそう。今日部屋の修繕に職人が来るからね。多分、修繕は今日中には終わるだろうから、弁償代はその後に頼むよ。」

おかみさんはテーブルに四人分の料理を並べながら知らせてくれた。

ヘル・ハウンドを討伐して戻ってきた日から、アンジエリーナは宗太達と一緒に食事を取るようになつた。

本来であればアンジエリーナも客に見えない調理場で食べるのだが、宗太達の仲間であるし、おかみさんも認めてくれたのだ。

勿論のこと、宗太達は旅装を整える買い物の最中も昼食時には宿に戻つて食べるようになつた。

そのために準備に一日も掛かってしまったのだが。

「分かりました。」

「アンタ達ともお別れかい。旅人との別れは当たり前のことだけど、寂しくなるねえ。」

宗太が答えるとおかみさんは苦笑し、調理場の方に戻つて行つた。

「…そういうえば、アンジーがさつさにかけたのって？」

「ママが代わりに言つちゃいました。今日修繕の職人さんが来るつてことです。」

宗太は朝食を取りながらアンジェリーナが何やら言いかけていたことを思い出す。

しかし、タイミングが良いのか悪いのか、アンジェリーナが言いたかった事はおかみさんと同じ事だつたらしい。

「では、出発は明日といつて良いのか？」

ルシフエラがナイフとフォークを器用に使い玉玉焼きを食べながら皆に聞く。

この世界の食事用具はナイフとフォーク、スプーンが基本な為、ど

の人も扱いが上手い。

宗太も一応使ははするのだがやはり日本人、ナイフやフォークよりも箸を使いたいものである。

ルシフェラに聞いたところ、エルトリア王国の東の島国には食事用具に箸を使う風習があるらしい。

一度行ってみたいと思つた宗太だった。

閑話休題。

「うん、それで良いけど足はどうしようか。ギルドでルーベックまでの護衛依頼でもあれば良いんだけど。」

馬で五日かかるのなら徒歩で行くといつのは論外だろう。

どれだけ時間がかかるのか分からぬ。

「そうじやのう、ギルドで依頼を確認して、無ければ馬車でも買ひしか無いじやろうな。」

「馬車つていいくらするんだ? それに俺は馬の御し方なんて知らないぞ。」

報酬がまだまだ残つているとはいえ、あまり高い買い物だと後々心許なくなる。

それに現代日本人である宗太が馬車の扱いなど知つてているわけがないのである。

「金貨が一、三枚もあればそれなりの馬車は買えるじゃろう。それに馬ならリースが扱える。御者はリースに任せるとしよう。」

金貨で一、三枚といふと日本円換算で100万から200万円くらいだらうか。

どうやら自動車と値段は大差無いようだ。

宗太は残金を思い出しホッとする。

アンジェリーナの取り分を引いても金貨五枚は残つている。

「これなら馬車を買つたとしても余裕は残るだらう。」

「愚りました。」

リースリストは領毛、御者役を弓毛受けた。

「わづか、それじゃあ食べ終わつたら早速ギルドに依頼を見に行こ。」

「つむ。」

「はー。」

「行つてらつしゃこ、気をつけておこなう。あたしはお手伝いがあるの。」

アンジルーナだけはやめり留守番だ。

一応ギルドで金貨も両替しておいた方が良いだらう。

旅装を整える買い物の際、銀貨数枚の買い物に金貨を出したら店主

に泣かれてしまったのを思い出す。

中小規模の商店ではあまり角金貸などの大金は手元に置いてないらしい。

余裕のある分は商業ギルドか冒険者ギルドなどに預けるのだとか。

こまめに両替をするか、多めに崩しておいた方が良いだろ？

余談だが、この世界に銀行は無い。

例え銀行を作ったとしても、信用の差で皆ギルドに流れてしまうのだろう。

四人は会話もそこそこに、残りの食事を片付けることに集中するところにする。

ギルドに着くと、早速三人は依頼掲示板の内、護衛依頼が張り出されている部分を眺める。

早朝からそこそここの賑わいを見せるギルド内では冒険者、ギルド職

員問わず、ほとんどの視線が宗太達三人へと向けられていた。

ロングホーン・ボアを素手で倒し、尚且つ持ち上げて運んだ宗太。

Cランク冒険者を一度も瞬殺したリースリット。

極めつけはヘル・ハウンドをD、Fランクの四人で倒し、大人が十人掛かりでも持ち上げられないような巨体をたたた三人で運んで来たということ。

宗太達は早くもこの都市の一般市民ですからその名前を知る存在となっていた。

中にはアンジェリーナの知り合いもいて、飲みに来るついでにからかつたりしていた。

悪目立ちし過ぎたとアンジェリーナを除く三人を後悔させたのは言うまでもない。

「ないのう。」

「ないな。」

「ないです。」

掲示板眺めながら、揃って肩を落とす三人。

護衛依頼は殆どが近隣の村への買い付け目的か王都方面、もしくは南方の国外の都市へのものだった。

「仕方ない、素直に馬車を買つとするか‥。」

護衛依頼があれば、内容次第では旅費も浮かせられたのだが、無い物ねだりをしても仕方がない。

人間諦めも大事なのだ。

宗太はギルドの受付まで行くと、受付嬢に金貨の両替を頼む。

受付嬢は凄く緊張しながらの対応をしていた。

細かい金に余裕を持たせるため、両替は角金貨八枚と銀貨二十枚にしておく。

ついでに馬車を売っている場所も聞いてみる。

「どうやら南門の城門近くにあるようだ。

細かい場所は通行人にでも聞きながら探せば良いだろ」と判断し、受付嬢に礼を言つてルシフエラ達にもやさしく伝える。

受付嬢は明らかにホッとした表情をしているが、ここは気にしないでおく。

もう気にするだけ疲れるだけである。

「この辺りかのう？」

「……だと思つんだけビ。」

冒険者、ギルドを出た宗太達は、現在南門の周辺まで来ていた。

通行人や衛兵に聞きながらの店探しである。

「…ああ、あれかな？」

教えて貰つた通りに、大通りから入る比較的広い脇道を進むこと数分。

目的地と思われる店舗を発見した。

比較的じぢんまりとした店舗と、その後ろには反対に周囲の商店が軽く九軒は收まりそうな倉庫がある。

倉庫の脇にある厩には数頭の馬が繋がれている。

「いらっしゃい。」用件は？

宗太達が表の店舗に足を踏み入れると、中年男性が応対した。

頭頂部が若干禿げかけ、口髭と肥満体が何ともステレオタイプの商人風だ。

「馬車と馬を買いたいのですが。」

宗太がそう切り出すと、店主は訝しげな、そして値踏みするような視線で宗太達を見る。

まあ、あまりに若い　まだ子供と言つても良じような三人が馬車を買いたいなどと言つてくれば、疑いたくなるのも当然だろう。

宗太とリースリストは予想していたため表情には出さなかつたが、ルシフエラは若干不機嫌そうな顔をしている。

「はい、金貨四枚もあれば充分だと思うのですが、足りませんか？」

「いやいや、それだけあればかなりの物を買えるが…。」

リースリストの質問に答える店主は、しかし本当に持つているのかと聞いたげだつた。

一般人の給料を丸十ヶ月分ともなれば当然の反応と言えなくもないが。

リースリストが懐から金貨四枚を出すと、よつやく信用してくれたようだ。

「…いや、疑つて済まなかつた。付いて来てくれ。」

店主はそつと店の奥から鍵束を取ると、倉庫に向かう。

倉庫に入ると、荷馬車や幌馬車から始まり大小様々な馬車が並べられていた。

「この中から選んでくれ。金貨四枚ならどの馬車でも馬付きで買える。」

宗太は馬車や馬の良し悪しなど分からないので、選ぶのはルシフェラ達に任せることにする。

ルシフェラヒリースリットは一台一台、じつくりと時間をかけて車輪周りから内装までを調べ始める。

二人乗りから六人乗り、天井付きと天井無し、車輪が本体の前後に大きくなはみ出で付いている物など、改めて見ると本当に色々な種類がある。

「親父殿、これにしよう。」

ルシフェラが選んだ馬車は、屋根付き四人乗りの馬車だった。

旅の足として使うため、派手な装飾などは見当たらない。

实用性を重視したのだろう。

四人乗りと言つても幅は広く、ギリギリ六人は乗れるだろうか。

両側に扉と御者席の間には開閉出来る小窓、屋根の上には荷物も載せられるようになつており車両後部に梯子が備え付けられている。

「次は馬車馬を見せて貰つかの。」

ルシフェラに促され、店主の案内で厩舎に向かう。

厩舎へと着くと、再びルシフェラとリースリストが馬を一頭一頭観察し始める。

店主は何を思ったか右手を顎に当て、そんな一人を興味深そうに見

ている。

「馬はこれが良いかの。」

ルシフュラはそう言って一頭の青毛の牡馬を指し示す。

体高は150センチメートルを越え、素人目に見ても他の馬とは気品が違うように感じられる。

「…大したもんだ。ソイツは確かにウチで一番の馬だよ。牽引馬としての実力は勿論、気性は大人しい上に魔獣に襲われても動じないヤツだ。」

目利きをルシフュラ達に任せて正解だったようだ。

店主も最初と違い、今では感心したように見ている。

「それで、彼らになるのかのう？」

「そうだな…、合わせて32万エリードだ。」

金貨二枚と角金貨一枚を支払つ。

少々痛い出費ではあるが、状態の悪い馬車や馬を購入するよりマシだつ。

「引き渡しは直ぐか？」

「いや、明日の朝にこの街を出るので。その時まで預かって置いて貰えぬか？」

「分かつた、なら明日の朝に出せるように準備をしておけ。」

「つむ、よろしく頼む。」

移動の足も確保出来たことであるし、もうこの街でやることもないだろう。

三人は揃つて店を後にすると、宿に戻ることにする。

少し遅くなつてしまつたが、アンジェリーナも交えて昼食を取ることじよつ。

「ふむ、大通りや中央広場とは少し違うが、なかなか賑やかじゃのう。」

「中央広場と二つの公園はこの街の市民や旅人の憩いの場なんですよ。」

「なる程のう。」ここまで整備するのは骨じやろうに、良くやるもんじゃ。」

午後の少し強い日差しを避けるように木陰の遊歩道を歩きながら、ルシフェラとアンジェリーナが楽しげに会話を弾ませている。

宗太とリースリットはそんな微笑ましい一人を眺めながら、一人の後を静かに歩く。

宗太達は現在四人揃つて西側の公園へと続く遊歩道にいた。

何故こんな場所に居るのかと並べ、話は昼食時まで遡る。

「ついに明日出発ですか…。」

昼食を食べながらアンジエリーナは少し寂しそうに呟く。

見るとあまり食が進んではないようだ。

先ほどからナイフとフォークを扱う手が頻繁に止まっている。

「…アンジー、この前約束したの覚えてる? アンジーさえ良ければ午後は公園に散歩にでも行かないか?」

この街に来てからまだ一週間も経っていないが、随分と仲良くなつたために別れるのが寂しいのだろうと解釈した宗太はそう提案した。

「…本当ですか!?」

途端にパアッと顔を輝かせるアンジエリーナに宗太は一つ頷くと、提案してみて良かつたと思つ。

「…一人だけでかの？」

すると、それを聞いていたルシフェラが不機嫌さを滲ませながらジト目で宗太を見る。

ルシフェラは内心モヤモヤとした物を感じていたが、それは仲間なのに一人で遊びに行くことに対するものとして処理した。

実際、ルシフェラ達は都市の内部は調べていたが、それはあくまで仕事としてのものであり、息抜きなどの目的で落ち着いて探索した事はないのだった。

リースリストも何か言いたげな視線を宗太に向ける。

「…みんなで行こうか。散歩でも仲間で行つた方が楽しいもんね…。」

二人の視線に耐えきれず、若干引きつった笑顔でそう提案する。

「…」

ヘタレと言うながれ。

美少女一人の無言の抗議に抵抗できる男などいよがい？

いや、おぬまい。

アンジェリーナも嬉しそうだし良いのである。

「それじゃあ、時間も勿体ないし早めに食べちゃおう。」

こうして午後の予定は決められたのだった。

回想終了。

「ソータさん、早くー！」

「遅いぞ、ソータ！」

回想している間に先に進んでいた一人から声を掛けられる。

少し歩く速度が遅くなっていたようだ。

「「」めんー。」

宗太は謝ると、追いつくために歩く速度を速める。

しばらく歩くと公園の中央、池のある場所までたどり着く。

宗太にとつては一重の意味で思い出深い場所もある。

「む、「」は……。」

ルシフェラが何やら思い出したように呟ます。そんな表情を浮かべる。

「「」が西側の公園の中央なんですよ。……あれ? 何で石畳が「」だけ新しいんだろ。」

笑顔で説明するアンジェリーナだが、一部だけ新しくなった石畳に気づき頭に疑問符を浮かべる。

原因となつた一人は冷や汗を流しながら、リースリットは冷静な表情のまま揃つて明後日の方に向に視線を向ける。

そんな三人を見ながら、さらに小首を傾げるアンジェリーナだった。

第1-3話 出発の準備と最後の散歩です（後書き）

この間にかPV86000、ニーク5000を越えてました。
ありがとうございます。

そして日間、週間ランキングにも載っていました。
重ねてありがとうございます。

今回で実に1-1話を費やしたハーベルでの滞在も終わり。

次回から次の目的地、ルーベックを目指して旅に出る予定です。

それではまた次回の投稿で。

第14話 最後の夜と出発と

「そろそろ帰ろうか。」

「む？ おお、そうじゃの？。」

公園のベンチに座りたわいもない話をしていた宗太達だったが、ふと間に気付いた宗太がそう切り出す。

腕時計を確認すると、時刻は午後五時過ぎ。

日も沈みかけ、辺りの人影もまばらだった。

家族連れの人達は、皆もつ家路についたのだろう。

残っているのは数組の冒険者パーティらしき人達とカップルくらい。

遊歩道脇の屋台も店舗舞いを始めていた。

宗太達も立ち上がり、帰路につくことにする。

「お話しが楽しくてつい時間を忘れてちゃいました。」

「申し訳ありません、私もつい時間を忘れてしました…。」

「リースが時間を忘れるとは珍しいこともあつたもんじゃのう。」

「まあ、良い息抜きになつてよかつたんじやない?」

歩きながら恥ずかしそうにペロッと舌を出すアンジーリーナとは対に、若干落ち込んだ様子を見せるリースリスト。

ルシフエラ付きの侍女として幼い頃から教育を受け、同時に長く使ってきたリースリストにとって、時間に気付かないなどと言つことは今まで片手で数えられる程度のことだった。

それを知っているルシフエラとしては、有能な侍女のうつかりミスを見ることが出来て楽しそうに笑う。

宗太としても、パーカークトメイドなリースリストが時間も忘れて話しかけていたということが何だか新鮮で、自然に笑みが浮かんでしまう。

宿への帰り道は、主にルシフュラがリースリストをからかう時間となり、ゆっくりと進んでいくのだった。

時刻は午後五時半。

西区の商店も軒並み店仕舞いをし、喧騒の中心は酒場へと移っていく。

あるものは仕事の疲れを忘れるため、あるものはカミさんや気に入らない客の愚痴を言い合い慰め合い、またあるものは明日の依頼や旅に思いを馳せて。

開け放たれた食堂や酒場の扉の中からは、怒りや笑いなど様々な声が入り混じり、通りに昼間とはまた違った賑わいをもたらす。

そんな賑わいの一角、宗太達の宿泊している宿屋へと入る。

「おっ、将来有望な冒険者パーティのお帰りだ！」

「ガツハツハツ、あのアンジーがなあ！」

すると、入り口近くのテーブルに座った客が宗太達の帰りに気付いたようで声を掛けた。

顔を赤くし、既に出来上がり始めているようだ。

その声で他の客達も気付いたようだ、アンジエリーナの髪染みの客などは酒を片手に寄つてくる。

「聞いたぞ、初めての依頼でアランクの魔獣とやり合つたんだってなあ！」

「まだまだ子供と思つてたんだが……。」

「いやはや、子供つてのは成長が早いもんだ。」

「ウチのバカ息子なんて『有名な冒険者になる』なんて言つてた癖に一年経つてもEランクだぜ？」

「ハハハツ！アンジーとお前の息子じやあ才能が違つわな。」

「あ、あの……既せん落ち着いてくだひやつ……！？」

あつといつ間に酔っ払い客に囲まれ、揉みくちゃにされるアンジョリーナ。

落ち着かせようと声を上げるも、残念ながらアルコールを摂取しテレショーンの上がっている男達の耳には届いていないようだ。

「…何か今日は何時も以上に賑やかだな。」

普段も賑やかなのだが、今日はいつも増して騒がしい。

どのテーブルも客で埋まっている状態だった。

しばらく呆然と、アンジョリーナを囲む客と店内を眺めていた宗太達だったが、そろそろアンジョリーナを助け出そうと動く。

「あんた達、入り口で騒いでたら邪魔だよー。」

すると、店内の喧騒の中であつてもよく響く怒鳴り声が聞こえてきた。

アンジョリーナを囲んで騒いでいた男達は皆一様に動きを止め、恐

る恐るといった風に声のした方に顔を向ける。

そこには、忙しそうに給仕をしていたおかみさんが怒りを湛えた表情で仁王立ちしていた。

首を竦めてスゴスゴと席に戻つていく男達に、ようやく解放されたアンジエリーナがホツと息を吐く。

「まつたく…、最後の夜だつてのに酔っ払い共が済まないね。」

怒りから呆れの表情に変わったおかみさんが宗太達の元まで歩いてくると、溜め息を吐いて謝罪する。

「いえ、今日はいつも増して賑やかですね。…と、そうだ。部屋の弁償は幾らになりますか？」

「皆寂しいんだよ、アンジーを可愛がってくれてたからねえ。弁償は34000エリーだけど、宿泊代が13300エリー残つてるからね。20700エリーだよ。」

宗太の質問におかみさんは苦笑して返す。

それを聞いて、アンジェリーナも嬉しそうな、しかし僅かに寂しさを含んだ表情を浮かべた。

その表情を不思議に思いながらも、宗太はおかみさんに角金貨一枚と銀貨一枚を支払う。

「300エリヤのお釣りだね。…悪いけど、店内はこんな有り様だからね。夕食は相席で勘弁しておくれ。」

「はい、大丈夫ですよ。」

お金を確認したおかみさんが一言謝り、宗太達を席に案内する。

「あ…。」

案内された席　　食堂の奥、隅に置かれた円テーブルには宗太も見知った人物が一人座つており、宗太は思わず小さく声を漏らした。

「おう、ボウズ。」

「みんなお帰り。」

「リードさん、ユースさん。こんばんは。」

宗太は一人に挨拶し、席に着く。

ルシフェラ達もそれぞれ挨拶をし、同じように席に着いた。

元々四人掛けのテーブルに六人も座っているため、とても狭い。

リードは特に大柄なので、圧迫感はかなりのものだった。

左右に座つて平然としているアンジェリーナとユースには拍手を送つてあげたいくらいだ。

ちなみに席順は宗太から時計回りにアンジェリーナ、リード、ユース、リースリット、ルシフェラである。

「そういえば、リードさんは何度かお酒を飲みに来てましたけど、ユースさんはあまり来ないんですか？」

リードは一日に一遍は来ていたようだが、ユースが飲みに来たのは宗太がこの宿に泊まってから初めての事だった。

「ああ、アタシは…。」

「はいよ、夕食とお釣りの300エリーだ。」

宗太の疑問にユニスが答えようと口を開いたとき、丁度おかみさんが夕食を運んできた。

何時もは個人個人の食事だったのだが、今日は大皿でいくつか持つてきたようだ。

テーブルが狭いのでこちらの方がありがたい。

大皿の料理を置くと、取り皿とナイフ、フォークを六人の前にそれぞれ置いて戻っていく。

量が多いと思つたら六人前だつたようだ。

それぞれ料理を取り分けると、食べ始める。

「…アタシは普段は飲まないんだけどね、今日は特別。可愛い妹分

の門出を祝おうと思つてね。」

ユニスは酒を飲みながら、先ほど中断した会話の続きをする。

そう言つてアンジェリーナを見て微笑むと、他の人々も顔に笑みを浮かべる。

ただ一人、理解出来てない宗太を除いてだが。

「門出つて、アンジー何か始めるのか?」

宗太が真面目な顔でアンジェリーナに訊ねると、アンジェリーナは目をパチパチと瞬かせ、リードとユニスは「何を言つてるんだ」と言いたげな表情をする。

宗太の考えていることを理解したルシフェラとリースリットは、呆れ顔で溜め息を吐く。

『ソータ…。』

何故かリリスまでもが呆れた様子だった。

「え…、え…？」

宗太は訳も分からず五人を見回す。

「ソータよ…、アンジーが何故魔術の習得を田指したかは覚えておるかの？」

ルシフエラがこめかみに指を当てながら宗太に訊ねる。

「えっと…、確か俺達が旅に出るつて話をしてて…？」

宗太は依頼を受ける前のやり取りを思い出しながら言つ。

確かにそんな感じだったはずだ。

「そうじゃ、儂等と旅に出るために覚えたという事じや。ユニス嬢が門出と言つたのはそのためよ。」

そつとつてルシフエラは再び溜め息を吐く。

何故アンジエリーナの態度から察せないのかと、宗太の鈍感振りには呆れるばかりだ。

見た目12歳のルシフィエラに「ニース嬢」と言われたニースは苦笑を浮かべていた。

「あ……と……アンジーはまだ小さいし、宿の手伝いがあるから旅は無理だらうなと思ってた……。」

それを聞いて、一同はようやく宗太の考えを理解したようだつた。

「パパとママはルシフィエラさんが説得を手伝ってくれて、宿の方はお兄ちゃんが手伝ってくれる事になつたんですよ。」

「ロイドさんが……衛兵の仕事があるんじや？」

宗太はロイドとの宿では一度も会っていない。

以前アンジエリーナに聞いたら、衛兵の隊舎で寝泊まつしていると言っていたはずだが、時間はあるのだろうか。

「大丈夫ですよ。お兄ちゃんも初めは泣つきましたけど、隊長さん

が許可を出してくれましたし。」

「ククク、いやはや、あの呆けた顔がなんとも…。」

ロイドとも既に話は着いていたらし。

笑顔で報告するアンジェリーナと、一緒に行つたらし・ルシフュラは思い出し笑いをする。

リードとゴニスはここまで手回しが良いとは予想外だつたのだろう、ポカんと口を開けてアンジェリーナを見ていた。

『旅に出たらソータも苦労しそうだね…。』

(はは、は…。)

これから旅に若干不安を覚える宗太だつた。

夕食も終わりに差し掛かった頃、店内は一層の盛り上がりを見せていた。

客達はテーブルを移動し、話し合ひ、笑い合つ。

時折、「魔王軍は俺が倒す！」などとこつ宣言が聞こえてくるが、終戦の報せが届いていないので仕方の無いことか。

流石のルシフローラも、これには苦笑せざるを得なかつた。

「オウ、兄ちゃん。オメニさんも飲めや。」

ふと、顔を真っ赤に染め上げた客の一人が、酒を片手にふりふりとしながら寄つてくる。

「えつと…、俺酒は飲んだことないんで…。」

「なあにいー？オメニさんよう、そんな体たらでアンジーを…、守れるのかあ？」

肩を組んで酒臭い顔を近付けてくる。

絡み酒とは面倒くさることの上ない。

周囲を見ると、他の客も幾人かこちらに寄つてくる。

「ボウズ、お前も男を見せてみろ！」

「あつはつはつはつはー！」

視線で皆に助けを求めるが、アンジェリーナはオロオロとし、リードとユースは同じく酔つ払いだった。

「ソータよ、成人は皆酒くらい飲むものじゃぞ？」

「いや、俺は未成年……。」

「む？ オヌシ歳は幾つじゃ？」

ルシフエラは意外そうな顔で宗太を見る。

「…17だけど。」

「…15くらいじゃと思つとつたわ。…まあ、良い。大抵の国で成人は15じゃから、飲酒も問題ないぞ。」

「申し訳ありません。私も…。」

宗太の年齢を聞いて、一同は驚きの表情を浮かべていた。

今まで童顔などとは言われた記憶の無い宗太だったが、歳を低く見られるといつのも複雑な気分だ。

20歳も半ばを越えれば気にもならなくなるのだろうが、生憎とそこまで歳も取っていない。

「俺の居た所じゃあ、成人は20歳からなの。そういうルシフエラやリースは幾つなんだ？」

「む、儂か？ 儂はひや… 12歳じゃ。」

「私は16歳です。」

ルシフエラとリースリットの年齢を聞く限り、別に人種的なもので若く見える訳では無いようなのだが。

「『ホホホ』『ホホホ』言ひつな、成人してんなら問題ねえだろー。」

宗太達のやり取りに業を煮やした酔っ払いが、そう言いながら宗太を後ろから羽交い締めにする。

すると、別の男が宗太の口内に酒を流し込む。

「…む！？んぐっんっんー…！…？」

宗太はいきなり口内に流し込まれた液体を、思わず飲み込んでしまう。

苦味と僅かな辛味を感じた後、あつという間に顔が赤くなり、頭がクラクラする感覚がする。

「おお、イケるじゃねえか！」

男達は上機嫌で次々と宗太に酒を飲ませる。

「お、おいソータ？」

ルシフェラが慌てた声をかけるが、宗太には最早周りの声も雑音のようになにか感じられなかつた。

五杯も飲んだころ、宗太はテーブルに倒れ込むようにして意識を失うのだった。

その後、宗太はリードによつて部屋へと運ばれ、ルシフェラ達も部屋で休む事となつた。

宗太に無理やり酒を飲ませた酔っ払い達は、その後おかみさんのお盆の餌食となつたのであつた。

よい子は人に無理やり酒を飲ませてはいけないのである。

翌朝、宗太達は揃つて宿の前に居た。

宗太は一日酔いで痛む頭を抑えており、アンジェリーナとリースリットが心配そうに見ている。

宿の前には他にも親父さん、おかみさん、ロイドが揃つてゐる。

「それじゃあ、気を付けてね。あんた達、アンジーをよろしく頼むよ。」

おかみさんが爽やかな笑顔で別れの挨拶をする。

最後まで遅しい人だ。

「アンジィイイイイイイッ！！」

親父さんは地面に転がったままアンジョリーナの名前を叫んでいる。

例によつて宗太に切りかかり、おかみさんにロープで縛り上げられたのだった。

いつものじとくお盆で氣絶させないだけ、これも優しさなのかもしない。

「大変かもしれないけど、アンジーをよろしくな。」

一方ロイドは疲れきつた表情で宗太に話しかける。

鎧を着込んでこる」とから察するに、これから衛兵としての仕事があるのだろう。

「短い間でしたがお世話になりました。」

「つむ、任せられた。まあ、アンジーならそんなに心配は無こと思ひ過ぎたがの。」

「お世話になりました。」

宗太達はそれぞれ挨拶を返す。

「パパ、ママ、お兄けやん、行きます!」

アンジエリーナも元気良く旅立ちの挨拶をする。

表情こそ笑顔だが、その目には涙が浮かんでいた。

10歳の少女なのだから、悲しくないはずがない。

宗太が軽く頭を撫でると、アンジエーラは指先で涙を拭い改めて笑顔を浮かべた。

「き、貴様！アンジーから離れんかつ！アンジー？アンジー！アンジイイイイイイイッ！…」

宗太達は親父さんの叫びに苦笑しながらも、馬車を受け取りに向かう。

「おひへ、お前さん達。待つてたぞ。」

馬車商の元に行くと、既に馬と馬車は繋げられ、すぐに出発出来るよう準備が整えられていた。

車体上部の一一台には雨除けの布が被せてあり、風で飛ばされないように紐で馬車の金具に縛り付けられていた。

「つむ、感謝する。すぐに出ても良いのかのつ？」

「ああ、構わんよ。もう代金は貰つてゐからな。」

それを聞くと、早速ルシフーラは馬車へと乗り込み、宗太とアンジ

エリーナも後に続く。

リースリットは手綱を受け取ると御者席に座る。

「出して良いぞ。」

ルシフェラが小窓からリースリットに指示を出すと、馬車はゆっくりと進み出した。

ガタガタと石畳の上を走る馬車は、裏通り 大通りは既に人で溢れているため でも幅の広い道を東門に向かって走る。

ハーベルは領主の城と高級住宅街のある北区には城門が無いため、北に向かう時は東西の城門から出る事になるのだ。

東門で簡単な手続きをし、街道へと出る。

「さて、目指すはルーベックじゃの！」

二手に別れた街道を左に曲がり、馬車は鍛冶の街ルーベックを目指して進むのだった。

第14話 最後の夜と出発と（後書き）

投稿が遅れて済みませんでした。

執筆文を誤つて削除してしまい、ヘコんでおりました。
書き直したのですが、微妙な所があるかもです。
全ては無常ですね。

ようやくハーベルは終わり、次の街に向かいます。
エンラさんに感想を頂いた部分はこの辺りで挿入する予定ですよ。
新キャラも早めに登場させたくなりました（笑）

それではまた次回の投稿で。

第15話 馬車での旅と盗賊の襲撃です！

見晴らしの良い草原の中を南北に走る街道を、一台の馬車が北に進んでいる。

空はどこまでも蒼く、波間に漂う泡のように白い雲が流れしていく。

地面では時折吹く風が、緑の絨毯を靡かせる。

時たま遠くの方に村落らしきものが見えるが、街道上には人影は無く、旅人や行商人とすれ違うことも無い。

「良い天気じゃのう。」

「そうですねー。」

僅かに下部を開いた馬車の窓、その縁に肘掛け、窓の外を眺めながらルシフェラが呟く。

その隣で同じように窓の外を眺めながら、アンジェリーナが相槌を打つ。

窓からは、長閑な風景が後ろから前へと流れしていく。

代わり映えの無い草原の中に、時たま生える立ち木と遠くの森が微妙な変化をもたらす。

「う、うううう…。」

和やかな空気の車内には、ガタゴトといつ回転する車輪の音と、低い呻き声が聞こえてくる。

宗太である。

最初の内は初めて乗った馬車にテンションの上がっていた宗太だったが、次第に口数が少なくなり、最終的には乗り物酔いでダウンしていた。

ルシフェラは長旅用にと、商品の中からスプリングの利いた馬車を選んだのだが、それでも揺れは宗太の想像以上だった。

スプリングが利いているといつても、現代日本の自動車と比べると無いも同然だ。

加えて街道は未舗装なのである。

馬車の作つた轍や落ちている小石、雨風によつて窪みが出来ていたりと、馬車を揺らす要因には事欠かない。

未だ治らない一日酔いと相まって、出発から一時間ほどで宗太は限界を迎ってしまった。

今は丸めた毛布を枕代わりに、後部座席で横になつている。

「まったく、これくらいで情けないの?」

「そんな…、こと、言つたつて…、うう…。」

顔面を蒼白にしながら呻く宗太を見ながら、ルシフェラは呆れたようになじめ息を吐く。

アンジエリーナは心配そうに宗太に視線を戻した。

王族のルシフェラとその侍女であるリースリットは、元々移動には馬車を利用する事が多かつた。

馬車の質にこそ差はあるが、この程度ならまだして問題もない。

アンジエリーナも、あまり長距離は乗った経験は無いが、宿の手伝いなどで乗っていたのはスプリングなど付いていない荷馬車だ。

それに比べれば、この馬車はむしろ快適とひたば言える。

『ソータ、大丈夫？』

肉体の無いリリスは元より酔いとは無縁だ。

この世界に来てから身体能力が強化されているものの、どうやら二半規管は強化されなかつたようである。

自らの加護が馬車に負けるとは、流石の神も想定外だつた事だらう。

「もうじき休憩じゃ。もう少し頑張れ。」

「あ、ああ…。」

宗太は呻くような声で返事をすると、そのまま田を閉じる。

それから一時間程走つたといふ、ようやく馬車が停車する。

リースリストが御者席から降り、草原にシートを広げる。

ルシフ・ラ・アンジエーナも馬車から降り、シートの上に座る。

宗太は一番最後にノロノロと降り立つと、力無くシートに腰を下ろす。

「ソータ様、お食事は如何なさいますか？」

昼食の準備をしながら、リースリストが心配そうに訊ねてくる。

「いめん、干し肉一切れと水だけ頂戴。」

今の状態でしつかりと食べてしまつたら戻してしまいそうだ。

干し肉を良く噛めば空腹も抑えられるだらう。

リースリットは手早く調理を済ませ、ルシフェラ達はパンと干し肉のスープを食べる。

宗太は干し肉を少しづつかじって食事を済ませる。

食事内容としては寂しいが、食べる気力も湧かないのだから仕方ない。

「少し食休みをしてから出発しようかの。」

「そうして貰えると助かる……。」

食事を終えたルシフェラの提案にそう答えると、宗太は大の字に寝転がる。

未だ揺れているような錯覚があるが、座っているよりは余程楽だつた。

横になると、慣れない馬車での移動で思ったよりも疲労が溜まつていたのか、睡魔が襲つてくる。

「ソータよ、行儀が悪いぞ。」

そんな宗太に苦笑しながら、ルシフェラが窘める。

「ああ、ごめん。」

宗太はそれだけ言つと寝息を立て始める。

「…寝てしまったのか？」

ルシフェラが声を掛けるが、目を閉じたまま宗太の返事は無い。

呼吸と胸が規則正しく上下している。

ソロソロと宗太の側に寄るルシフェラだったが、ふと反対側から同じように近寄るアンジェリーナと視線が合つ。

「む…。」

「えつと…。」

少々気まずい空気が流れるも、宗太を挟みながら視線で語り合つた人。

やがて、お互に顔を見合せながら頷き合つた。

「ソータ。起きよ、ソータ！」

ペチペチと額を叩かれる感触と、ルシフニアの声で意識が浮上する。

毛布で枕でも作ってくれたのだろうか、後頭部に柔らかい感触がある。

「…ん、ごめん。おは、よ…？」

目を開けると、右側にルシフニア、左側にアンジエリーナの顔があつた。

挟まれて寝顔を見られてたと思つと、途端に恥ずかしくなつてくる。

ふと違和感に気付く。

屈んでいるわけでも無いのに、一人共やけに距離が近いのだ。

宗太は首を右に向ける。

すぐ目の前にはルシフェラの腰が見える。

同じよつと左を向くと、こちらはアンジエリーナの腰が。

「ソータ！」

「ソータさん！」

正面に顔を向けると、恥ずかしそうに顔を赤くした一人が軽く睨んでいる。

ここにきて宗太はよつやく思い至る。

枕だと思っていたものは一人の膝だつたようだ。

美少女一人の膝枕というのは嬉しくもあるのだが、同時に見上げた時の絶壁は仄かに物悲しさを覚えるものだった。

「ソーダ…、オヌシ何やら失礼な事を考えておらんか？」

考えていた事が顔に出ていたのだろうか、ルシフェラが訊ねてくる。

宗太を見下ろす二人の笑顔がちょっと怖い。

「い、いや、別に何も…！」

宗太は慌てて否定すると、身体を起こす。

まだ少しフラフラするが、気分は大分良くなつた。

もつとも、すぐにまた酔うことになるのだろうが。

「もう大丈夫ですか？」

「うん、大分気分も良くなつたよ。」

宗太は心配そうに見るアンジェリーナに笑って答えると、シートを置み始める。

「それなら良かつた。…といひで、リースの膝枕だつたらどの様な感想だつたんじや？」

「え？ うーん…、眼福…、かな？」

急にルシフェラに質問され、宗太は特に考えもせぬで答えてしまつた。

リースリットは僅かに頬を染め、アンジェリーナは手のひらを胸に当てて落ち込む。

「ほほほ…、やはり先程の微妙な表情はそういう事か。」

ルシフェラが再度凄みのある笑顔を浮かべる。

拳を握りしめ、頬が僅かに引きつっている。

「へ？…あ、ふぐうつ！？」

宗太はヤバいと思う間もなく、ルシフェラの正拳突きを腹部に受け地面に沈むのであった。

休憩を終え、馬車が再び走り出してから一時間程経つ。

少し前に草原は終わりを迎へ、現在は森の中の街道を走つてゐる。

日の光が森の木々に遮られてしまうため、後一時間も走れば野営の準備をする必要があるだろう。

宗太は再び酔いのために横になつてゐる。

ルシフェラは「宗太が何度か謝罪をしたもののがまだ機嫌が治らぬ様子で黙つて窓の外を眺めており、アンジェリーナがそんな二人をオロオロと交互に視線を巡らせていた。

「ルシフェラさん、機嫌を治して下さいよ。」

車内に流れる氣まずい空氣に堪り兼ねたアンジェリーナが取りなす事にする。

アンジエリーナも落ち込みはしたものの、そこはこれから成長に期待する事にしたのだった。

「…別に氣を悪くしてなどおりぬ。」

窓の外を眺めているルシフエラは、眉根を寄せ、少し唇を尖らせながら答える。

ルシフエラにとってお子様体型と云うのは密なコンプレックスだつたりする。

これでもリースリストよりも年上なのだ。

更に数年前からは妹にまで体型で負けている。

昔の魔族の成長速度は現代よりも遅く、自分が昔の魔族に近いということは頭では分かっているのだが、女としてそれを認められるかといえばそれはまた別なのだった。

「それなら…。」

アンジエリーナがそんなルシフュラに苦笑し、言葉を発しようと
た時、不意に馬車が止まる。

「ルシフュラ様。」

何事かとアンジエリーナが辺りを見回していると、御者席のリース
リットが小窓から話しかけてきた。

「つむ、囲まれておるの。大凡おおよそ二十といった所か、盜賊の類たぐいじゃろ
うな。全く人とすれ違わぬので変だと思つたんじや。」

馬車の中でもぐもぐと視線を巡らせながら、ルシフュラが予想する。

アンジエリーナも窓の外を見やるも、見えるのは木立ばかりだ。

「如何致しましょ。」

「ソータは」のザマじゅし、アンジーもあるからい。…良い、儂
が出よ。」

ルシフュラはそう言って馬車から降りると、囲んでいる盜賊が訝し

んでいるのが伝わってくる。

「魔劍月夜・モチヅキ望月」

ルシフエラは魔剣を呼ぶと、手には五枚の円月輪チャクラムが現れる。

直径は二十センチメートル程、漆黒の円盤はその外周部のみが白銀の輝きを放っている。

「盗人には運といつものも必要じゃぞ?... 魔劍月夜・不知夜月!」

「ヤリと笑つてから円月輪を投擲すると、次の魔剣の名を叫ぶのだった。

「何なんだ?... 何なんだよ、こつやあ...!...」

森の木に背を預けながら、盗賊団のリーダーが呟く。

視線を横に向けると、先程まで獲物の様子を窺っていた仲間が、全身を切り刻まれ血塗れの肉塊と化している。

「何で俺たちがこんな事に…。」

男達は運が向いていたはずなのだ。

「なのに、何で…。」

男の疑問に答えるのは、仲間の悲鳴のみだった。

エルトリア王国の北部から北西部にかけて存在する森。

この森を繩張りにしてから数週間、盜賊団『赤羽の鷹』は連日の略奪でかなりの稼ぎを上げていた。

北部と南部を繋ぐ割と大きな街道であるために割と商人が通るのだが、この場所は特に警備も無い。

もとも、領主の私兵が討伐に乗り出してきたとしても、広大な森

が姿を隠してくれるだろ？。

逃げる事など容易い。

先程も商人三人からなる商隊を、護衛の冒険者」と殲滅したばかりだった。

盗賊団の情報を出来るだけ漏らさないようにするには、例え一人たりとも逃がす事は出来ない。

入念に連携を取り効率的に目標を殲滅する様は、さながら軍隊のようでもある。

その実力からか、盗賊ギルド内でも『赤羽の鷹』は少數ながらもそれなりの地位に就いているのだった。

「コレだけありやあ、結構な額になるな。」

森の西部、切り立った崖に空いた洞窟を利用したアジトでリーダー格の男が笑みを浮かべる。

洞窟内の一室には、ここ数日の戦利品が置かれていた。

後は「これらを盗賊ギルドを通じて売り払ってしまうだけだ。

男は別の部屋へと移動すると、既に酒盛りを始めている仲間に加わる事にした。

「南部から旅人と思われる馬車が一台森に向かってきますー。」

酒盛りに加わってからしばらくして、一人の男が駆け込んできた。

馬の扱いが上手いので、見張り役を任せている内の一人だ。

「旅人だあ？ んなもん放つておけ。」

アルコールが回り、僅かに顔を赤くしたリーダーが答える。

金を持つているかも分からない旅人など、襲うだけ時間の無駄というものだ。

「それが…、外装は質素なものなんですが、造りは立派な馬車なん
で。恐らく金貨数枚はする馬車かと。」

「……ほい。」

リーダーは男の報告に耳を細める。

ボロ馬車に乗っているような旅人なら放つておく所だが、それなりの馬車に乗っているとこつ事は金持ちの外遊といった所だろうか。

それなりば、金や~~玉~~石なども持つてゐるかもしけない。

「……本当にツいてるな。野郎共、狩りの時間だ！」

リーダーは獰猛な笑みを浮かべると、仲間に指示を出す。

盗賊達は「おおっ！」という掛け声と共に手早く準備を済ませ、街道へと馬を走らせるのだった。

街道には報告の通り、質素ながらも立派な馬車が走っていた。

盗賊達は森の中を、馬車を包囲する形で馬を走らせる。

街道の反対側では仲間が同じじよつここしているだろつ。

リーダーは慎重に襲撃のタイミングを計る。

すると、いきなり標的の馬車が停止し、盜賊達も慌てて馬を止める。

今までにない動きに訝しげに見やるが、時刻は直に日が森の木々に隠れるというじろである。

大方野営の準備に入るのだろつ。

ならば好都合と仲間に手で合図をしようとした時、馬車の扉が開き中から一人の少女が現れた。

リーダーは口笛を吹きそつになるのを堪える。

現れたのは、上品な漆黒のドレスに身を包み、サラサラとした美しい銀髪に意志の強さを表すような真紅の瞳が印象的な美少女だったからだ。

まだ幼いが、そつちの趣味を持つ変態にはかなり高く売れるのは間違ひ無いだらう。

御者役の侍女と合わせれば、一体幾らになるのか。

恐らく貴族の子女のお忍びの旅なのだろうと判たつをつける。

（…）「いやあ、本格的にツイてるぜ。」

リーダーが少女を見据えたまま再び合図を出さつとした時、あり得ない現象に目を見開いて固まつてしまつ。

少女が何事か呟いたと思ったら、足元の影が浮き上がり手に五枚の円盤が出現したのだ。

「なんだ…？ありやあ…。」

少女がニヤリと笑つて円盤を投擲すると、それらは森に吸い込まれるように消えていく。

氣を取り直して襲撃しようとしたリーダーは、突如聞こえた仲間の悲鳴に三度合図を止める。

森の中に仲間の悲鳴と馬の嘶きが響き渡る。

混乱し、無意識の内に馬を一歩下がらせた時、目の前を黒い何かが通り過ぎ馬の頭を落としていった。

落馬したリーダーは、慌てて起き上がり視線を巡らせる。

すると、自分の近くにいた仲間の周りを先程の黒い何かが縦横無尽に飛び回り、瞬く間に肉塊に変えてしまった。

「一体何がどうなつて…。あのガキは何なんだ…！？」

リーダーは近くの木を背に、周囲を見回す。

幸い黒い飛行物は見当たらない。

「と、とにかく撤収し、て…？」

安堵の息を吐き、素早く撤収の方法を考えるリーダーの目の前を、自身から黒い円盤が飛び出して行った。

恐る恐る自分の腹部を見やると、横一線に鮮血が吹き出す。

「あ…、あ…？」

訳も分からず崩れ落ちる身体の上に、背後の壁にしていた木が倒れてくるのが最後の感覚だった。

盗賊達を圧倒的な力で殲滅した後、どこかに消えたルシフューラだったが、直ぐに馬車に戻ってきた。

「さて、日暮れまで近い。もう少しじだけ進んでおくとしようつかの。」

小窓からコースリストに指示を出すと、直ぐに馬車が動き出す。

「どこに行つてたんだ？」

「盗賊のアジトに、の。奴らめ、結構な額を溜め込んでおつたぞ。」

宗太の問いに、影から数枚の金貨を出しながらルシフュラが答える。

「…それって、盗賊の金を持って来たのか？なら、元の持ち主に返さないと奴らと…。」

「元の持ち主など、恐らくはもつおらぬよ。」

宗太の抗議はルシフュラに遮られる。

「おかしいとは思わぬか？ここは北部と南部を繋ぐ比較的主要な街道じゃ。それにもかかわらず商人と一度もすれ違つてはおらぬ。」

言われて思い返してみると、ずっと横になっていた宗太は窓の外の光景など見ていなかつた。

「…そう言えば、そうですね。」

がっくりと肩を落とす宗太を横目に、アンジェリーナが同意する。

「生き延びた者があるなら、街で噂になつておつても良いはずじゃ。それすら無いとなると、考えられるのは一つしか無いじゃろ？親族など探しよつもないしの」。

「ここまで言われてようやくこゝで起つていた出来事に思つて至つた宗太は、思わず黙つてしまつた。

馬車内に沈黙が流れる中、再び馬車が止まる。

「暗くなつて参つましたし、今日ほこの辺りで野営に致しませんか？」

「セツジヤの。」

御者席からそういう提案するコースリストにルシフュラが同意し、野営の準備をする。

天幕はルシフュラ達に任せ、宗太は森で薪を拾い集める。

途中何度か先程の出来事が頭をよぎるが、所詮宗太にビリーハの出来る問題でも無い。

忘れるように努める。

「ソータは初めての旅の疲れもあるじゃね。見張りは最後にして先に休むが良い。」

食事を取りながら、今晚の見張りの順番について話し合つ。

結局、アンジェリーナを除き四時間置きに一人ずつ起きて見張る事になった。

時間はまだ六時を過ぎた頃だ。

普段なら寝るには早い時間ではあるのだが、確かに疲れているので好意に甘える事にする。

「それじゃ、お言葉に甘えさせて貰つよ。お休み。」

「つむ、ゆっくりと休むが良い。」

「お休みなさい、ソータさん。」

「お休みなさいませ。」

ルシフエラ達はもう少し起きているようだ。

宗太は皆の挨拶を聞きながら天幕に入り、毛布にくるまるとルシフエラ達の談笑する声を聞きながら眠りにつくのだった。

第15話 馬車での旅と盗賊の襲撃ですー（後書き）

最近執筆速度が遅くなつてきましたね。これ

道程を長々と書くのもアレなので、次を書いたら一気にルーベックまで飛ばします。

ルーベックまで行つたら年上キャラだ！

…どういう風に出すかはまだ考えておりませんが。

話は変わりますが、「プロローグがプロローグじゃなくね?」との事なので、書き直そうかと考えております。

現プロローグは1話の冒頭に回す事になるのかな?

いつ頃上がるかは不明ですが、編集した時はお知らせします。

それではまた次回の投稿で。

第16話 夢と決意じゃ！

「……、……兄、宗兄！」

誰かが呼ぶ声で宗太の意識が眠りから浮上する。

もう朝なのだろうか、日差しが瞼の裏にも微かに届いている。

「宗兄、起きてよー！」

聞き慣れた声に、若干苛立ちの色が混ざり始める。

しかし、宗太は睡魔の誘惑には勝てないのだ。

声の主には悪いが、まだ寝させて欲しい。

そんな意味合いも込めて、ゴロリと寝返りをつつ。

「い・い・か・げ・ん・ん、しなそあああいーーー」

声の主が苛立ちも露わに宗太の布団を勢い良く引っ剥がす。

僅かに肌寒い空氣に包まれ、宗太はようやく目を開ける。

目の前には白い壁紙の貼られた壁。

少し上に視線を向けると、宗太の好きなロックバンドのポスターが三枚貼られている。

視線を反対側に向けると、机と本棚、クローゼットなどが目に入る。

よく見慣れた宗太の部屋だ。

そして、ベッドのすぐ脇には宗太の良く知る人物が、引っ剥がした布団を手に立っていた。

宗太の三つ下の妹、^{あかつきさくら}暁桜だ。

156センチメートルという家族の中では小柄な身長に、内に意志の強さを覗かせる大きな瞳。

纏まりの悪いショートカットは所々跳ねており、後ろ髪の一部を伸ばして細い三つ編みを作っている。

奇抜な髪型のよつな気もしないでも無いが、活発な雰囲気に似合っている。

宗太が普通つっていた中学の制服に包まれた細い体躯は、一見すると華奢なように思えるが、趣味の格闘技で鍛えているため見た目に反して力はある。

「何だ桜か…。どうして部屋に？」

「何だじやないでしょ、宗兄を起にじてくのよつて言われたの…。」

宗太の疑問に、桜は腰に手を当て性格とは反対に慎ましやかな胸を張る。

「見て分からんのか？俺は眠いんだ。」

「分かるわけ無いでしょ…。」

桜は呆れたように溜め息を吐くと、布団をベッドの上に置く。

「ほり、サッサと起きて朝ご飯食べちゃいなよ。入学早々遅刻なんて、笑われちゃうよ？」

そう言ってイタズラっぽい笑みを浮かべると、クルリと背を向けて部屋から出て行く。

宗太は黙つてその背を見送る。

桜の物言いに違和感を覚えたのだが、その違和感の原因が分からない。

考へても仕方の無い事か。

宗太はベッドから降りると、ハンガーに掛けあつた制服を手に取り着替える。

「おはよ。」

リビングに入ると、既に他の面々は朝食を食べ始めていた。

「あ、やつと来た。」

「宗太ちゃん、おはよう。」¹飯今用意するわね。」

リビングに入った宗太に気付いた桜の横に座っていた母、^{あかつきけんじ}暁賢治^{あかつきちかげ}が、^{あかつきちかげ}暁千景^{あかつきちかげ}が席を立ち、宗太の分の朝食を用意し始める。

軽くウエーブのかかったセミロングの髪に、おつとりとした表情が印象的だが、五歳年上だった寡黙な父、^{あかつきけんじ}暁賢治^{あかつきちかげ}に一目惚れし、猛アタックの末結ばれたというのだから悔れない。

父親はとこうと、既に出勤したようでは姿は見えない。

「おはよう、宗太。」

宗太が席に着くと、隣に座っていた姉、^{あかつきかえで}暁楓^{あかつきかえで}が挨拶してきた。

腰まで届く黒く艶やかな長髪の前髪は、目の少し上で切りそろえられている。

168センチメートルの身長にスラリとした手足、出る所は出て引っ込む所は引っ込んでいる見事な体型。

顔立ちも整つており、弟である宗太から見ても美人だと思つ。

実際に結構な頻度で男子に告白されているらしい。

そのどれもが敢え無く撃沈しているという話だ。

もつとも、本人が男を苦手としているようなので仕方のない話な
だが。

因みに口調もどこか男っぽいため女子にも人気があるが、本人にレ
ズつ気は皆無である。

「おはよつ。…姉貴、何で制服なんて着てるの?」

宗太より二つ年上の姉は近所の大学に進学したのでは無かつたか。

宗太は僅かに感じた違和感を姉

あかつきかえで
暁楓に質問する。

「は? 一体何時まで寝ぼけているんだ…。学校行くのに制服を着な
いでどうする。」

楓はやれやれと肩をすくめる。

「ほらほら、お喋りは後にして、飯食べちゃいなさい。」

何かがおかしいが、何がおかしいのかがはつきりとしない。

頭の隅に何かが引っかかったまま、宗太は朝食を平らげた。

楓と二人でやけに人の少ない通学路を歩く。

桜も途中までは一緒にいたが、中学校は方向が違うため途中で別れたのだ。

「おーっす、宗太！」

すると、後ろから岡崎が宗太の隣に走ってきた。

「よお、今日は早いな。」

「おはよー、岡崎君。」

「遅刻するなってお袋に叩き起しやれたんだよ…。おはよーい」
ます、楓さん！ 今日も綺麗ですね！」

うなだれて母親の文句を言つたと思えば、楓に挨拶されると途端に元気になる。

余りの切り替えの早さに宗太は呆れ、楓はクスクスと笑つている。

「せう言つね前も今日は随分早いじゃんか。」

「…桜に叩き起しやれたんだよ。」

そう言つて宗太は溜め息を吐く。

「二人共、夜更かしばかりして起きたくられないんだぞ。」

楓に窘められ、揃つて肩を落とす一人だった。

見慣れた教室で授業を受けている。

だが、何故か宗太には教師の言葉が理解出来ない。

『授業を受けている。』

理解出来るのはただその事実のみである。

再び感じる違和感に内心戸惑いつつも、黙つて席に座つている。

チャイムが鳴ると、生徒達は立ち上がり、幾人かは教室から出て行く。

「宗太、メシにしようぜ。」

宗太がそのまま座つていると、岡崎が近寄ってきた。

「ああ、そうだな。」

「宗太、お昼にしよう。」

宗太が返事をして立ち上がると、丁度楓が教室に入ってくる。

そのまま三人で教室から出ると、そこは屋上だった。

床に座ると宗太と楓は弁当を広げ、岡崎はパンをかじる。

「授業にはついていくてるかい？」

「ぼちぼちね……。」

「分からぬ所があれば私に聞きなさい。教えてあげよう。」

そう言って笑う楓に苦笑で返す。

男が苦手で浮いた話を全く聞かない楓だが、宗太には非常に甘いのだった。

「…そろそろ教室へ戻ろつか。」

たわいもない会話で時間を潰し、腕時計を確認した楓が立ち上がる。

もつそんな時間なのかと、宗太も立ち上がり歩き出した時。

屋上に突如亀裂が走つた。

亀裂は宗太を中心に広がり、逃げる間もなく崩れだす。

崩れた先　　そこに本来あるはずの教室や廊下は無く、ただただ闇が広がっている。

「「宗太！」」

声のした方を振り向くと、楓と岡崎が宗太に向かつて手を伸ばすのが見えた。

宗太も手を伸ばすが一人に届く事は無く、宗太は闇に飲み込まれた。

先程までの風景から一転、辺りは何もない闇に包まれている。

楓や岡崎の姿を探しもがくが、動いているのかすらも分からない。

暫くもがいでいると、やがて闇の中に小さな光が現れた。

光は徐々に大きさを増し、やがて宗太を包み込む。

「……、タ、ソータ！」

「姉貴！？……んがつ！？」

自分を呼ぶ声に飛び起きた宗太だが、額に走る衝撃に再び倒れる。

鈍い痛みに額を押さえ上を見ると、見張りの交代のために宗太を起こしにきたのだろう、ルシフェラが手にランタンを持ち心配そうに覗き込んでいた。

どうやらランタンに頭突きを喰らったらしい。

隣にはリースリストもいる。

「どうやら起ってしまったようだ。

「大分^{うな}魔^まされておつたよ^うじやが、嫌な夢でも見たのか？」

「嫌な夢……？……あつ！」

ルシフェラに言われてようやく夢の内容を思い出す。

姉、妹、母、友人、学校…、ほんの一週間程前までの日常。

…父親の出勤の早さまで現実通りというのもアレだが。

そして、突如崩れた日常…。

「…ちよつと昔の夢を見てね」

「…昔のと^ういと、元の世界のか。済まぬ、口にしなかったので、
てつきり吹つ切れていたのじやと思つておつた…。」

「何でルシフェラが謝るんだよ。…まあ、最近賑やかだつたからさ、
あまり考^うえる余裕は無かつたんだよね。」

申し訳なさそうにうなだれるルシフェラに思わず苦笑してしまう。

「儂も元の世界に戻る法を探してやるつ。……だから、泣くでない。

」

ルシフェラは宗太の頭を優しく抱きしめて決心する。

この世界の人の身勝手で、望まずこの世界に呼び出されてしまった哀れな少年を、夢で魘^{うな}されながら涙を流す少年を、いつか元の世界に返してやるつと。

最後の咳きは、本当に微かなもので。

密着していた宗太の耳にも届かなかった。

「ルルル、ルシフェラ！？」

突如抱きしめられ、狼狽える宗太。

顔に柔らかさとルシフェラの体温、そして仄かな香りを感じる。

心臓がバクバクと高鳴り、顔が赤くなっているのが自分でも分かる。

「とと、取り敢えず、俺は見張りに行くから、一人とも休めよ！」

宗太は慌ててルシフェラの腕から抜け出すると、一人にそっとだけ言つて天幕から出て行く。

（薄暗くて助かつた…！）

恥ずかしい顔を見られずにホッと安堵する宗太は、もう先程の夢を気にしてはいなかつた。

宗太が出て行つたのを確認したルシフェラは、側に控えていたリースリットに向き直る。

「…さて、今後の方針は決まつたのう。」

「はい、ですが元の世界との繋がりが切れてしまつていて以上、通常の送還では無理かと思われます。」

真剣な表情をするルシフェラに、リースリットも真剣な表情で返す。

「つむ、やはり旅をしながら探す他ないじゃろうな。レイティアとリリス殿にも協力して貰いたい。」

ルシフエラはアンジェリーナと宗太の寝ていた場所の枕元にある一冊の魔導書に語り掛ける。

ルシフエラよりも遙かに魔術の知識の豊富な一人ならば、何かしら思い付くかもしない。

『ま、ルシフエラちゃんの頼みならじょうがないわね。』

ふと、ルシフエラの脳裏に艶やかな声が届く。

「頼りにしておる、レイティア。リリス殿もな。」

どこかがぶつきた棒な物言いに苦笑しながら、声の主に語り掛ける。

契約していないためリリスの声は聞こえないが、助けてくれるものと信じよう。

「リースも済まぬな。儂の我が儘に突き合わせてしまつて。」

「王として旅で見識を広める事は重要な事です。ルシフェラ様は先代勇者の襲撃でその機会がありませんでしたから…。だからこそ、ミリア様、ティラン様、アーハム様も全力で国務を助けて下さっています。」

ルシフェラの謝罪に、リースリストは当然の事だと言葉を返す。

「そうか…、あの三人にも後で礼を言わねばな。」

思えば、信頼する友や部下には気苦労を掛けっぱなしだ。

リースリストの返答に苦笑し、ふと、最近苦笑してばかりという事実に気付き再び苦笑した。

焚き火に枯れ枝をくべながら見張りをしている内に、周囲は明るくなり始めていた。

「んー…。」

軽く伸びをして深呼吸。

少し肌寒さがあるものの、澄んだ空氣が気持ち良い。

「お早ハジマリます。」

すると、天幕からリースリットが出て来る。

朝食の準備をするのだ。「

「お早ハ、リース。タベは起しあがめじめん。」

外に出てから気付いた事だが、タベは夢を見ながら泣いていたらしい。

見られただろうか。

だとしたら恥ずかしい。

「いえ、お氣になさらず。それでは朝食の準備を始めさせていただきます。」

リースリットは軽く笑みを浮かべると、食材と器具を取り出し調理を始める。

普段と変わらないリースリットの様子に、大丈夫だったかとホッと息を吐く。

実際はしっかりと見られていた訳なのだが。

「お早う。

「お早うございます。」

暫くして、ルシフォラとアンジエリーナも起きてきた。

「お、お早う……。」

普通に接しようと/or/しても、ついタベの事を思に出しちゃう。

「ソータさん、どうしたんですか？」

アンジェリーナは明らかに拳銃不審な宗太を見て不思議そうにしている。

ルシフェラは宗太を拳銃不審にしている理由に思い至り、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると、すぐ側まで歩み寄る。

「ククッ…、また怖い夢を見たらいつでも胸を貸すぞ?」

そう耳元で囁くと、リースリストの方に歩いていく。

「ル、ルシフェラ…!..」

宗太は顔を真っ赤にしながら怒鳴るが、ルシフェラは澄ました顔のまま相手にしない。

宗太が怒っている理由の分からないアンジェリーナは、不思議そうに首を傾げていた。

第1-6話 夢と決意じゃ！（後書き）

お姉様キャラでホントにお姉様を出してしまった…。

夢の見方ですが、自分の見る夢を参考に書きました。
いきなり時間が飛んだりとか、空間が変な風に繋がってたりとか…。

あまり夢見ないんですけどね。

書いてる内に大分長くなってしまったので、キリの良い場所で切つ
ての投稿です。

それではまた次回の投稿で。

17話 召喚魔術と召喚魔法です

『ちょっとソータ、放置はヒドいんじゃないー?』

宗太がリリスに怒られたのは、食事も終わり出発の準備に入つた時だつた。

食器やらの片付けはリースリットに任せ、天幕を仕舞う時になつてよつやくリスを中に忘れていた事に気付いたのだった。

「いめんじめん…。」

宗太は両手の平を顔の前で合わせて謝罪する。

魔導書に対し謝罪する男の図というのも、端から見るとショールな光景だつた。

「何じゃ、オヌシの世界ではそういう風に謝罪するのか?」

ルシフェラは宗太の謝り方を不思議そつに見ている。

「え？…え？と、単純にお辞儀だつたり、片手だつたり、あとは土下座…かなあ？」

宗太は謝罪の仕草を思い出しながら囁ひ。

「ドゲザ…？何じゃそれは？」

「え？と、いつこいつ姿勢なんだけビ…。」

宗太は土下座をして見せる。

「う…む、コレは、なかなか…。」

土下座を見て軽い優越感と嗜虐心を覚え、ちょっと自画でも取り入れようかと考えてしまふルシフュラだった。

（…うて、いかんいかん！儂はそこまで鬼畜では無いぞ！）

だが、ふと我に返ると頭を振つて考えを追い出す。

「…確か東方の群島国家ヤマトではその様な謝罪があつたと書物に

あつましたね。」

食器の片付けを終えたリースリストが土下座を見ながらそりそり言つた。

「あらんだ、土下座……。てこつか、ヤマトヒテ……。」

あまりに捻りが無せ過ぎて突っ込む氣すら起さない。

「ナヒニエバ、ヒヒの世界で一般的な謝罪の仕方ってどんなの?」

ふと疑問に思った事を尋ねてみる。

「む? こちらではお辞儀か、田上の者に対しては右腕を胸の前で折り曲げてのお辞儀が一般的じゃのう。騎士の敬礼は、王に対しても例外は直立で右腕を胸の前で曲げるのじゃ。王に対しても例外はあるがの。」

ルシフロはそつそつとお辞儀をして見せる。

握った右拳が左胸の前にくる形だ。

「へえ、その礼の仕方は初めてみたよ。ビウニウ……うわー…」

『ちょっと、ソータ！！謝罪の仕方なんて今はビウでもいいの…』

謝罪談義へと話が脱線している事に痺れを切らしたリリスのシック口
ミが入る。

「あ、ああ、」めん…。」

『まつたぐ…、せっかく召喚魔術が完成したっていつのこ…』

リリスはブツブツと文句を言つてゐる。

その中で、宗太には気になる単語があつた。

「待つた！召喚魔術が完成したつて、勇者召喚のか？」

宗太の言葉にルシフュラはピクリと僅かに反応するが、気付いた者は居ないよつだつた。

『何で私がそんなの作らなくちゃいけないのよ。前に話したでしょ

？私が実体化するための召喚魔術。』

言われてみれば、確かにそんな話をしていた気がする。

この一週間程度で完成させてしまったところだらうか。

『じゃあ、詠唱と魔力の変換ようしくー。』

（よひしくつたって、俺呪文とか知らないぞ？）

流石に適當な呪文で発動するモノでは無いだらう。

『大丈夫、私の後に続いて詠唱して。魔力も必要量を満たしたら合図するから。因みに光属性ね。』

（ん、分かった。）

それなら何とかなるだらう。

宗太は了承すると、魔力を変換し始める。

思えば聖剣以外では初めての光属性魔術だ。

深呼吸をして気分を落ち着ける。

『じゃあ、いくよ。

世界の根源 天上の光よ』

『 世界の根源 天上の光よ』

リリスの後に続いて詠唱をしながら、前方に出現した白い魔術陣に
どんどん魔力を流し込む。

周囲の木に止まっていた鳥達が、いち早く異変を察知して一斉に飛
び立つ。

『 我、光を以て変革を望まん』

『 我、光を以て変革を望まん』

突如詠唱を始めた宗太に、ルシフェラ達は驚きの表情で見ている。

『 我が魔ちから力を以て世界に新たな理いじわざを』

「 我が魔力を以て世界に新たな理を」

先ほどから馬鹿みたいに魔力を注ぎ込んでいるのだが、一向に合図が無い。

右手から溢れでは魔術陣へと吸い込まれる魔力の奔流により、周囲の空気までもが魔術へと向かつて渦巻く。

ゴクリ、と誰かが息を呑んだ音が微かに聞こえる。

あまりの魔力量に、リースリットは無意識に一步後ずさつていた。

『 我が魔ちから力を糧に彼の者をここに顯現せん
召喚!サモン』

「 我が魔力を糧に彼の者をここに顯現せん

召喚!」

詠唱の終わりと共に、さらに魔力を流し込む。

普段使う魔術とは文字通り桁違いの魔力量に、宗太が不安を覚え始めた頃。

魔力オツケー！

ようやく出されたりリストの合図と共に魔力の供給を止める。

結局全魔力の五分の一ほどの魔力を使ってしまった。

魔術陣が一層その輝きを増し、光が弾けると同時に

空気が弾けたかのような風の奔流が吹き荒れ、周囲の木々を激しく揺らす。

突然の光と風の奔流に、堪らず宗太達は顔を腕で覆い隠す。

目を瞑り、腕で顔を覆つていっても尚瞼の裏まで届く光と、辺りの物を吹き飛ばさんとする突風に何とか耐える。

「わあわあわあわあっー!?」

「アンジー！？」

吹き荒れる風の中、微かにアンジェリーナの悲鳴が聞こえてくる。

やがて光と風が止み、アンジェリーナの方を見ると、びりやり吹き飛ばされはしなかつたようでその場にへたり込んでいた。

「うん、成功成功！」

宗太達は揃つて声のした方を向く。
宗太達は揃つて声のした方を向く。

そこには足首にまで届く白い髪に金色の瞳、色白の肌を白いドレスで包み背からはこれまた純白の天使のような羽を生やした美少女ホワイトグレイルの魔導書に宿る意識、リリス・ホワイトグレイルが立っていた。

「何者じやつ！」

ルシフェラは一瞬で影から魔剣月夜・朔夜を抜くと、突如現れた少女に警戒を向けながら構える。

リースリットも剣を抜きこそしないものの、腰の双剣の柄を握りながら半身に構えている。

「ちょ、ちょっと待ってよ！私は敵じゃないってば！」

いきなり臨戦態勢の一人に、リースは慌てた様子でわたわたりと手を振る。

「リース！」

「…リース？もしゃ、魔導書の意識体か！？」

宗太の言葉に、ルシフェラは魔剣を構えたまま驚愕の表情を浮かべる。

「そりそり、さつきのソータの召喚魔術で実体化したの！だから神剣を向かないで！」

若干涙目になりつつ、説明をするリリス。

「実体化すると斬られたら死ぬのか？」

宗太はふと浮かんだ疑問を聞いてみる。

「え？いや、別に死なないけど斬られるってイヤでしょ？せっかくの魔力も無駄に消費しちゃうしね。」

小首を傾げながら答えるリリスに、ガックリと力が抜ける気がした宗太だった。

「…それにしても、召喚魔術って服とかも一緒に召喚されるんだな。

」

「なにに、裸の方が良かつた？ソータのエッチ。」

気疲れしてつい漏らしてしまった宗太の呟きに対し、リリスは手を後ろで組み、少し前屈みになつた態勢で宗太の顔を覗き込んでくる。

顔にはニヤニヤと笑みを浮かべている。

「……ひ、違ひ違ひーそつこつ意味じやなくて……」

とんでもない勘違いに、宗太は顔を真っ赤にしながら慌てて否定する。

背中に突き刺さるルシフェラ達の冷ややかな視線が心に痛い。

「あははー！冗談冗談。精神体の実体化っていうのは、要はそのモノのイメージだからね。服をイメージして魔力と一緒に実体化をせってるんだよ。勿論翼も隠せるよ。」

ホラ、と言つて背中の羽を消して見せるリリス。

イメージ次第で姿、格好を自由に変える事が出来るといつことどうか。

あまりの便利さに思わず感心してしまひ。

「あ、イメージ次第つて言つても、その存在からかけ離れた姿は取れないよ？精密なイメージにも限界があるからね。」

宗太の考えを読んだかのように訂正を加えられた。

何でも思いのままとはいかないようだ。

「それにしても、呪喚魔法とは…のう。」

「そういえば、魔法と魔術って同じ意味なのか?」

ルシフーラの呴きに、以前から疑問に思っていた事を聞いてみる。

魔法だつたり魔術だつたりと、人によつて言い方が異なるのが気になつていたのだ。

「む?…ああ、宗太は違いを知らんのじゃつたな。アンジーもかのう。」

「はい。」

「私も知らないなあ…。私が生きていた頃は魔術で統一されていた筈だから。」

リリスも首を傾げている。

魔術の知識に長けているリリスまで知らないこと、内心驚く宗太。

「他の魔術師と契約していなかつたりリス殿が知らぬのも無理は無い。魔法というのは神族が滅びてから出来上がつたモノだからのつ。」

「といふことは、魔術より新しいモノつてことか？」

疑問が解ける前に新たな疑問が浮かんでしまう。

「いや、そういう訳では無いのじや。まあ、詳しい話は馬車の中であるとしよう。」

そう言ってルシフーラは馬車の方へと歩いて行く。

気にはなるが、確かにこの場で話してては時間が勿体無い。

宗太達も荷物のチェックをしてから馬車に乗り込む。

「セヒ、魔法についてじやつたの?」

馬車が進み始めてから、ルシフローラは先ほどの話の続きを口を開く。

「ああ、魔術と何が違うんだ?」

「違ひは無い、魔法とは魔術の事じや。」

「「……は?」

意味の不明さに思わず口をポカンと開ける宗太とリリス。

「……どうこいつことなんですか?」

アンジエーナも首を傾げながら質問する。

「つまり、魔法とは現在純粋な使い手の居らぬ魔術の事を言つのじや。厳密には無属性 純粋な魔力を使う魔術と光属性の魔術の二つを指す。」

「無属性魔術と言つと、魔術妨害とか？光属性の使い手はソータみ
たいな勇者が居たらしいけど、それでも魔法に分類されたの？」

「うむ、それで合つておる。それと、逆に言えば光属性を持つ者は
一人だけ。それも魔力量の低さと、教える者が居らぬ為に未だかつ
て使いこなせた者は居らぬ。故の『魔法』じゃ。まったく、宝の持
ち腐れじやの。」

ルシフェラが呆れた様に溜め息を吐く。

「…えつと、魔術妨害つて何？」

ルシフェラとリリスの魔術談義について行けない宗太が、恐る恐る
手を挙げ質問する。

「魔術は大量の魔力、魔素が混ざると構成を保てなくなるの。魔術
妨害つていうのは、簡単に説明すると大量の魔力をバラまいて相手
の魔術の構成を崩す力業よ。相手の数倍の魔力を使つたりするから、
魔力量の多い存在じやないと使えないのがネックなんだけどね。詠
唱で指向性を持たせる事も出来るよ。」

「なんとまあ…。」

詠唱で指向性を持たせる事が出来るから魔術といつ括りなのだろうか。

あまりのじり押し技に呆れるばかりだ。

「他に聞きたい事はあるのかの？」

「私は今の所無いわね。」

リリスは既に理解したようで、首を横に振る。

宗太はふと疑問に思った事を訊ねてみることにする。

「あー…、闇属性も光属性と同じ事が出来るんじゃなかつたっけ？
闇属性も魔法になるのか？」

「闇属性は魔族が居るじやろうが。それに、似ているが少し違うのじや。例えば儂やリースが収納に使つておる空間魔術があるじやろ？闇属性は魔力の消費が少ない代わりに、扉は『影』と限定されるのじや。光属性は魔力の消費量が多い代わりに、そういう制限は無く何処でも行使出来る。」

言われて思い返してみれば、確かに魔剣や道具の出し入れは全て影からだった。

「他の同系統の魔術もそう。闇属性は魔力の消費量の少なさに対し範囲、又は効果が限定されるのじや。戦闘に生かせるかは使い手のセンス次第じゃのう。」

それは光属性も同じじゃがの、と言つて笑う。

リリスの召喚にはかなりの魔力を使つてしまつた。

光属性は便利だと使いまくつていては、直ぐに魔力切れを起こしてしまうのだろう。

もしそれが戦闘中だったとしたら、それは致命的なミスにもなりうる。

「…人間って魔力量少ないんだろ？よく召喚魔術なんて出来たよな。

」

「うむ、数百人、もしくは大量の魔晶石を使った大儀式だそうじや。

因みに、魔晶石とは魔力を内に溜めておける特殊な石の事じゃ。以前説明した魔素石を精製して造る事が出来る。」

宗太が知らないことを見越して魔晶石の説明を付け加える。

そこままでして勇者を喚ぶ執念に軽い恐怖すら覚える。

出来る事なら関わりたくは無い。

兎にも角にも、疑問は無事解消されたのである。

勇者召喚の事はなるべく考えないようにして、通常の雑談へと移るのであった。

17話 召喚魔術と召喚魔法です（後書き）

今回はリリスの実体化と、所々『魔法』となっていたり『魔術』となっていた事の理由の説明となりました。

前話など、どんどん増える設定に、友人には「ちゃんと纏めきれるのか？」と言われたり…。

…頑張ります。

話は変わりますが、今回の大地震。

皆様ご無事でしたでしょうか？

我が家は棚の上の物や鬼瓦、瓦が落ちた程度の被害で済みました。津波も家の近くまでで止まつたようです…。

余震もまだまだ起きていますし、どうかお気をつけてお過いこトセ
い。

それではまた次回の投稿で。

第18話 ルーベック到着と入城審査と（前書き）

今回全然進みませんでした……。

年上キャラは一体何時になれば出せるのか。

第18話 ルーベック到着と入城審査と

「ルシフェラ様、ルーベックの街が見えてきました」

「む？ おお、ようやくか」

御者席に設けられた小窓から馬車内へとリースリットが声を掛ける。

街道を馬車で走る事五日。

ようやく遠くに鍛冶の街ルーベックが見える位置にまでやつて来ていた。

馬で五日といつのは、どうやら馬車でといつ意味だつたらしい。

馬車では僅かに遅れ、六日掛かってしまった。

尤も、一日程度遅れた所で大して問題も無いのだが。

道中は初日の森以来盗賊に出会つ事も無く、森を抜けた頃からチラホラと商人達ともすれ違うよになつた。

初日にすれ違わなかつた原因は、やはりあの盗賊団にあつたのだろう。

道中、偶々同じ場所で休む事になつた商人に話を聞いた所、どうやら都市部の商人の間ではこの街道は『危険な道』としてウワサとなつてゐるらしかつた。

ならば何故そのような道を選ぶのか。

答えは『時は金なり』という事である。

脚で稼ぐ行商人などにとつて一分一秒は大事な物である。

が、利益を考えれば増やせる護衛など高が知れているし、護衛を多少多目に雇つた程度で安心し危険な道を選ぶことには、詰まる所商人としては一流以下だつたということだろう。

確かに時間は得難い物ではあるが、命に代わる物は無いのだから。

一日目以降にすれ違つた商人達は幸運だつたと言える。

だが、それに気付かないのであれば、いずれ同じ過ちを繰り返すことになるのだろう。

その時に運が向いているかは知らないが。

途中、魔獣には幾度か遭遇したものの、全てルシフェラとリリスによつて瞬殺されていた。

乗り物酔いで動けない宗太と戦闘に慣れていないアンジェリーナの代わり、という事だが、リリスは実に嬉々として魔獣を狩つていた。

久しぶりに実体を持てた事が余程嬉しかったのだろうか。

対象を自動追尾する攻撃魔術の複数発動などを難なくこなし、一同を驚かせていた。

ルシフェラの魔剣月夜・不知夜月がそれに似てはいるが、追尾系魔術は難易度の高さから現代では失われた技法であるらしい。

改めてリリスの技能の高さを思い知られた。

『いやー、随分と掛かつたねえ』

そのリリスはと言つと、数度の魔獣退治で魔力を使い果たし、今は魔導書の中に戻つてゐる。

魔力を使つたとしても、召喚主からの追加の魔力供給により実体化の時間は延びるらしいのだが、リリスが拒否したのだ。

曰わく、『実体化していると通行税や手続きが面倒だから』 という事である。

しつかりしていると言つべきなのだろうか、理由を聞いた一同は余りに現実的な理由に微妙な反応を返すことしか出来なかつた。

（全くだ……、街に着いたら先ず休みたい……）

乗り続けて慣れたのか初日よりはマシになつたものの、未だ続く頭痛を堪えながら宗太はリリスに同意する。

吐き気は無いのが救いか。

と言つても、最早戻す物が胃の中に無いというのが事実なのが。

「ソータさん、大丈夫ですか？」

「ソータ、街に着いたら直ぐに宿を取る。もつ少し我慢せい」

相変わらず蒼白な顔色の宗太を見かねて、アンジェリーナとルシフエラが心配そうに声を掛ける。

馬車の中では終始この調子である。

延々続く頭痛も、一人にこうして声を掛けられると堪えられる気がするものが不思議だ。

「ソータよ、念の為、今の内に魔力の属性変換をしておくがよ」

「……え? なんでもまたそんな事を?」

宗太が憎き頭痛を耐えながらも横を向くと、向かいの座席に座るルシフエラの手には既に黒く鈍い光沢を放つ『』が握られていた。

いつの間にか影の中から取り出していたようだ。

ルシフェラは弓の上端に弭槍弭槍を取り付けながら、説明を続ける。

「うむ、街に入る際に魔力属性の審査を受けるやも知れんからの。簡易版の識別球なら体内で属性変換した魔力を巡らせれば誤魔化せる。まあ、それも割と高等な技術なのじやがな、ソータなら問題ないじやろう。魔術での識別阻害の方は、リリスに術式の改変を頼むしかないじやろうしの。そちらは王都への道中で間に合つじやろう」

「分かった。じゃあ、風と……火、水辺りで良いかな」

「うむ」

宗太は言われた通り、体内の魔力を変換して巡らせる。

頭痛により集中力を切らせば、直ぐに無属性へと戻つてしまふのだが……。

そうして馬車に揺られること更に一時間、太陽が頂点を過ぎた頃、ようやくルーべックの街の城門へと辿り着いた。

「ようこそ、鍛冶の街ルーべックへ。旅の方ですか？」

「はい、審査の方よろしくお願ひします」

城門の監視をしている衛兵に、御者席からリースリストが対応する。

「では、手続きをしますので皆さんはこちらに。規則ですので馬車も確認させて頂きますが、よろしいですね?」

衛兵に促され宗太達も馬車から降り、門に備え付けられている審査窓口へと向かつ。

ルシフェラが了承の意味で頷くと、別の衛兵一人が馬車の荷台や内部などを詳細に調べだした。

これは密輸などを防ぐためである。

都市部の通行税は商人よりも冒険者などの方が安い。

その都市に店舗を持たない行商人などからは通行税として徴収するためである。

それ故、冒険者ギルドへと登録だけし、税金を「まかして利益を上げよう」と考える者が出でてくるのも当然と言えるだろつ。

その対策として、馬車や大荷物を背負つた冒険者は度々荷物検査を受ける事になるのである。

拒否すれば入城は認められず、規定量以上の商品と思しき物品を持ち込む際は追加の税を払つ、もしくは投獄される事になる。

投獄などは余程悪質と判断されなければ、滅多にあることでは無いのだが。

但し、冒険者にも基本追加税無しに持ち込み及び売却が認められている物がある。

魔獸の素材である。

優秀な冒険者がその都市周辺で魔獸を狩つてくれるならば、近隣の被害も抑えられ領主が兵を出す必要も減るためだ。

私兵を討伐に差し向けるより、冒険者ギルドに依頼を出す方が安く済む。

ならば冒険者から素材を買い取つて行商するなりどつか、と考える
だろつが、その様な事はまず起こらない。

冒険者にとつては商人に売つてもギルドに売つても値段に大差は無
いからである。

商人としては利益を出す為に出来るだけ安く買いたい。

ならば、と冒険者は少しでもランクアップの評価に繋がるようギ
ルドで売却するのである。

ランクの高い冒険者の中には、都市の素材を扱う商店で直接買い取
つて貰う者も居るが。

どちらにせよ行商人にとつては、魔獣素材の売買は面みが無いので
手を出す者は居ないのである。

「身分証などがありましたらお出し下さい」

兵士に連れられて向かつた場所はハーベルと違い、城壁内、外開き
の城門より内側に設けられた小窓だった。

宗太は以前受けた審査との違いに、不思議そうに眺めていた。

実はハーベルの城門にも同じ物があり、普段はそこで審査されるのだが、宗太の怪しさから詰め所での審査になつたのだった。

が、そこは宗太の知るところではなかつたりする。

キヨロキヨロと周囲を見回す宗太を不審に思ったのか、衛兵達の顔付きが僅かに厳しいモノとなる。

「ソータ、初めての街が珍しいのは分かるが、あまりキヨロキヨロとするでない」

不穏な空気の変化を過敏に察知したルシフェラに窘められ、宗太は慌てて姿勢を正す。

そのやり取りを見て、衛兵達の間の張り詰めた空気が僅かに弛む。

新米冒険者が初めての審査で緊張の余り拳動不審になるのは別に珍しい事では無いのだ。

一応仕事であるから警戒はするが、衛兵達もそんな冒険者は何度も見てきたのである。

「ギルドカードで良いかの」

そんな宗太の態度に苦笑しながら、ルシフュラが窓口の衛兵にギルドカードを提示する。

次いで、リースリストとアンジェリーナもギルドカードを差し出す。

「ルシフュラ・レストールさん、リースリスト・ノエルさん、アンジェリーナ・メナードさん、全員ランクDでハーベル登録の冒険者で間違い無いですね？」

「つむ」

窓口の衛兵の問いをルシフュラが肯定する。

「……それで、あなたは？」

書類に何やら書き込んだ後、衛兵が宗太の方を見る。

先程の挙動不審な様子から、若干探るような視線を宗太に向けている。

「あ、はい」

宗太は身分証を出していない事に気付き、慌ててギルドカードを提示する。

「ハハツ、慌てなくとも良いですよ。ソータ・アカツキさん、ハーベル登録……、ランクB！？」

苦笑しながらギルドカードを受け取った衛兵は、内容を確認すると共に思わず絶句する。

それを聞いて他の衛兵達も驚く。

拳動から新米冒険者と思えばまさかのBランク。

熟練者とも言える実力を持つているというのだから、この反応も当然だ。

不正な書き換えや偽造カードといつことでも疑つたが、その様な形跡もなくカード自体も本物のようだ。

衛兵達の様子に何か拙いことでもあつたかと内心焦る宗太だつたが、咄嗟のこと何と説明すれば良いのか分からずつい黙つてしまう。

「ソータは今まで人里離れた森の中で武術の師匠と一人暮らしていたらしくてのう。冒険者としてはまだまだ初心者じゃが、ロングホーンボア程度なら一人でも容易く狩れる程の実力者じゃ。そのランクはそれがギルドに評価された結果じゃよ」

と、訝しんだ衛兵が再び口を開こうとした頃、見かねたルシフェラが助け舟を出してくれた。

「ロングホーンボアを？ まあ、そういう事でしたら……。次は魔力属性の検査をさせていただきます。皆さん、順番にこちらの水晶に手を翳かざして下さい」

ルシフェラの言葉もいまいち信じてはいない様に見えるが、とりあえず仕事を進める事にしたようだ。

カウンター脇から識別球を取り出すと、宗太達の魔力属性を調べるために促す。

「三属性が三人に、二属性が一人……ですか。今まで色々な冒険者を見てきましたが、属性持ちの人なんて初めて見ましたよ」

どうやら識別阻害は上手くいったようで、宗太はホッと胸をなで下ろす。

尤も、三属性持ちが三人も固まっているというのも異常な光景なのだが、衛兵達はその事に気付いてはいないうだつた。

因みに、リースリストは識別阻害の魔術により、火と風の一属性のみ反応するようにしていったようだ。

「これも主あるじを立てるといつことなのだらうか。

「あたしとソータさんは、ルシファラさんとコースさんに魔術を教わりながら旅をしているんですよ」

「才ある者を育てるのも存外楽しいモノでのつ。魔術師ギルドの偏屈共には任せておれねわ」

衛兵は偏屈共という部分で思わず吹き出してしまつ。

ともあれ、魔術も使えるならランク魔獣の単独討伐も可能なのだ
ろうと、宗太の実力と立ち居振る舞いの差異については一応の納得
はしてくれたようである。

正拳一撃で倒したなどと言われば信じなかつたであらうが。

いい具合に勘違ひをしてくれたようだ。

「それでは通行税、お一人につき銀貨一枚になります」

「じゃあ、四人分で」

「確かに。では良き滞在になりますよ」

通行税は宗太が代表して払い、衛兵に礼を言つて、馬車に乗り込み
街へと進めるのだった。

第18話 ルーベック到着と入城審査と（後書き）

外で煙草吸いながら執筆していたら、足首から先で11力所蚊に刺されました。

指先とか刺すのは止めて欲しいです。

まあ、それは置いといて。

何の予告も無く、5ヶ月にも及ぶ休載をしてしまい済みませんでした。

ここに深くお詫び申し上げます。

続きを読むように書けず、つい読み専という逃げに走ってしまいました。

これからも投稿は不定期になるやも知れませんが、今後はここまで間を空けないように執筆していきたいと思います。

それではまた次回の投稿で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4542q/>

魔王襲来！！

2011年8月14日02時47分発行